

---

# IS<インフィニット・ストラトス> 月明の守護者

HAL-HAL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラatos < 月明の守護者

### 【Zコード】

Z3751R

### 【作者名】

HAL・HAL

### 【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公は、『奈々瀬 ユウ』として転生する。オリジナルとは若干異なる、自分が創り出したISの世界で彼は何を想い、どんな物語を構築していくのか。

ガラスの平穏、捻じれ狂うセカイ、無限の欲望。

望んだはずの世界は容易く反旗を翻し、容赦無く牙を剥ぐ。

「……偽善だな。人は利害のみで結びつく生き物だ」

「奈々瀬ユウは、私の……敵」

心を侵食する現実、襲い来る絶望の刃。

それでも……護りたい物があった。

「現実を知り、それでもなお幻想を抱くか！」

「それでも僕は、人を信じたい！」

人の心が闇に打ち克つ時、守護者に秘められし力が解き放たれる。

これは、人の闇を知り、拒絶され、それでも人を護り続けた、一人の少年の物語……

あなたには、自分の命を懸けてまで護りたいものがありますか？

外伝始めました。こちらからどうぞ。

<http://ncode.syosetu.com/n2667>

w /

## Shift 0・1 「Protologue」(前書き)

初めまして、HAL・HALです。

今更ですが、最近のIS人気があやかり連載を立ち上げました。  
今までちゃんとした作品を作る機会が無かつたので色々と至らない  
部分があると思いますが、どうか生温かい目で見守ってください。

### CAUTION!!

本作品はチート成分満載、及び原作崩壊が著しく、  
一部のキャラクターの設定が原作と全く異なる場合があります。  
また、作者は素人なので更新が不安定かつ遅いです。

「こんなのISじゃねえ!」「俺の嫁を汚すんじゃねえ!」

「一ヶ月更新しねえとかふざけんじゃねえ!」

等の感想を抱かれる可能性のある方は閲覧を推奨いたしません。  
すぐにブラウザの戻るボタンを押してお引き取りください。

それでは、お楽しみください。

「…………知らない…………天井だ」

目を覚ました僕は開口一番にそう言った。だが今の一言にはこなさか語弊がある。

今僕がいる空間は辺り一面が白、白、白、白、どこを見ても白。遠近感という言葉が介入する余地なんて全く存在しない程に、真っ白だ。

つまり、天井があるかと問われれば僕は首を捻りざるを得ない。

「…………どうしてこうなった？」

僕は自分の内面に思考を巡らせ、つこたつき起きた事を記憶の底から引っ張り出す。

まだ冬の厳しい寒さが残る2月のある日、僕は仕事が休みで、なんとなしに近所の書店にふらりと出掛けた。その帰り道、交差点でキヨロキヨロと辺りを見渡す幼い子供が一人

えー…………小さな女の子がいた。

その女の子はあろう事か向こう側から来るトラックを全く気にしておらず、このままだと奇跡が起きない限り轢かれるだろ?と思つた。だから僕は……

「幼女のミンチなんて見たくなあああい! ! !」

……別に僕は幼女が好きなワケじゃないんだ。

パツと見、そんな単語しか当てはまらないと思つたから言つたんだ。

とにかく僕は女の子を助けるために全力で走り、女の子を突き飛ばした。

その後は…よく分からない。たぶんトラックに轢かれて死んだんだろ？

今思えば女の子を抱いて全力で逃げれば良かつたと思つたが、過ぎた事を悔やんでも仕方が無い。

たとえ書店で買うはずだった小説が売り切れて買えなかつたとしても、僕は悔やんでいない。

女の子一人救えたのならそれでいいと思う。

「…よし、回想終了」

つまり、結論から言えばここは死後の世界というヤツなんだろ？  
…考へてた所とだいぶ違うな。三途の川とか無いんだろうか。  
そう思いながら辺りを見回していると

「あやああああ！…！」

ツ！？ 上の方から悲鳴が！？

反射的に体を動かし、上から降ってきたモノを回避する。

「へふしつ…！」

ソレはそのまま地面（立つていられるし幼女がつぶれているのでそらくは）に激突した。

上から降ってきたモノ…それはなんと

「あの時の幼女？」

「私は幼女じゃありません……」

おでこにあざができるいるが見間違いではない。まさしくあの時の  
幼女だった。

……本人は否定しているが。

「私は神様なのですっ！」

自称神様は左手を腰に当て、右手の人差し指を立ててこっちに向か  
ながらそう言い放つ。

どつかで見たことあるなこのポーズ。

「百歩譲つて神様だとして、その神様が死人に何の用ですか？」

普通死人は閻魔大王に裁かれて天国か地獄に行くはず。  
そこに神様が介入する余地はない。例外を除いては。

「そのう……実は貴方はまだ死人ではないのですよ」

ばつが悪そうな表情でそう言い放つ幼J……つて、ゑ？

「僕は死人じや……ない？　じゃあこことは？」

「JJはJの世とあの世の狭間なのです」

なるほど。JJはあの世でもこの世でも無い狭間の世界。故に何も  
無いということか。

そして僕は死んじやいない。つまり、この神様に頼めば僕は元の世界に戻れるはずだ。

「じゃあ早く元の世界に戻してください」

「それは……できないのですよ」

神様は頭を伏せてなんともいたたまれない雰囲気で言った。……待て。

「戻れない！？ 死人じゃないんでしょ？」僕は

「確かに貴方は死んではいないのですよ。少なくとも『今』は

「『今』は？ それはどういう意味ですか？」

「貴方の体はトラックに轢かれて重体なのです。  
お医者さん達が色々手を尽くしていますが、30分後には体の全機能が停止するのです。

今貴方を体に戻した所で助かる見込みは無いのですよ」

「なら貴女が手を尽くせばいいでしょう？ 神様なんだから」

「私は神格が低いせいで現世への干渉能力がほとんど無いのです。  
魂である貴方を引っ張つてくるので精一杯だったのですよ」

「…………」

言葉を失った。今から戻っても本当にあの世へ行ってしまうだけと  
は。

「何で僕の魂を引っ張つてくるなんて面倒なことをしたんですか？」  
もうここに存在する意味も……あれ？

「それが本題なのですよ」

神様はよつやくといった感じで話し始めた。

「私は現世の調査をするために神界から遣わされた新米の神様なのです。  
……ですが現世に来たのは初めてだったので、つい見入ってしまったのです。

それでうっかり不可視の結界を張るのを忘れてしまったのです。  
普通の人には私を見る事はできませんが、能力があれば見る事は可能なのです。

そういう人にも見られないように結界を張る義務が私にはあったのですが、  
それを怠ってしまったのですよ」

「つまり……僕は見なくていいものを見てしまい、拳銃の果てに助けなくていいものを助けてしまい命を落としたと？」

「私は現世への干渉能力が低いですから、トラックも透けて通り過ぎるはずだったのですよ」

何て茶番なんだ……。傍から見たら自分からトラックに飛び込んだ自殺志願者じやないか。

神様のミスで死ぬなんて……不幸だ……ん？

「正直驚いたのですよ。私を見る事ができるだけでなく、

突き飛ばす事ができる人間がいるなんて。貴方は靈媒師か何かなのですか？」

「……違いますよ。ところで貴女はさつき結界を張る義務がどうとか……」

「やうなのです。貴方は私のミスで死なせてしまったようなものなのです。

これはイレギュラーな事なのです。本当に申し訳ないですよ」

深々と頭を下げる神様。待てよ?これはひょっとして転生の件なのくだけか?

他の作品ではあつたりだが……出でくるまで結構かかったな。

「イレギュラーをそのままあの世へ行かせる事は出来ないです。こうじう時はイレギュラーを転生させると相場では決まっているのですよ」

「相場って……まあいか。それで、転生に条件はあるんですか?」

「よく知ってるのです。もちろんあるのですよ。

転生先は、イレギュラーが元からいた世界はたとえ時間軸が異なつても禁止。

転生にあたつてイレギュラーの願いを一つ叶える事。この二つのことですよ

「つまり、転生先は僕が元いた世界はたとえ時代が違くてもダメ。そして転生する時に僕の願いを一つだけ叶えてくれる……そういうことですか?」

「飲み込みが早いのです。私は優等生が大好きなのですよ」

「まあ……そういった小説は結構読んだからなあ……。お願いは一個か。」

読んで字の如く、一生に一度のお願いだから、よく考えないと。

「わろそろ決めるのですよ」

5分後、神様はそう言つてきたが……転生先はすぐに決まった。  
あとはお願ひの方だが……よしーあれだー!!

「じゃあ、転生先はインフィニット・ストラトス」

「……HISの世界ですね？そこなら問題ないのですが、お願いの方はどうするのです？」

「僕の部屋に一冊、ノートが置いてあるんですが……取つて来てもらえませんか？」

「……へ？ それがお願ひなのですか？」

「違いますー！ お願いに関係する物なんですよー！」

ノート一冊取つて来てもらうだけでお願いはお終いつて……とんでもない詐欺だー!!

「まあその程度なりの一ふるぶれむのですよ」

滑舌の悪い英語を喋りながら神様はパチンと指を鳴らす。  
すると地面に一冊の古びたノートが現れた。

「これが貴方の願いにどう関わるのですか？」

神様が怪訝そうに訊いてくる。

このノートは僕が書き溜めた創作ノートだ。当然一次創作も書いた。特にE.Sが好きだったので気合の入った作品がいくつもある。僕はページをパラパラとめくり、目当てのものを見つけるとそれを神様に見せた。

「この作品の設定を反映させてください。僕が主人公で」

「これは……E.Sの一次創作なのですか？」

そう言って神様はノートに目を通していくが……徐々に顔を引き攣らせていった。

まあ……主人公がチートだしな。

「恐ろしい事に不可能ではないのですよ……でもそれなら最初からこの作品を転生先に選んで、お願いで主人公にしてほしいと言えれば良かったと思うのですよ」

「神様がそう言つならそれで構いません」

「でもこの作品、途中までしか書かれていないのです

「丁度いいじゃないですか。作品は自分の体で完結させますよ」

「それは面白そうなのですっ！　私も出来る限りサポートするのですよ！」

作る側から演じる側へ。何が起ころか分からないけど、その方が面白いと思つ。

だから僕はわざと完結していない作品を選んだ。

「この設定で良ければ転生をせるのです。言い残しは無いですか？」

「……あつません」

僕は少し考えてからきつぱりと言つた。もう決めた事だ。  
向こうでどんな事があつても後悔はしない。

「それでは逝くのです！」

そう言つて神様は指を鳴らす。待て、字が違う。

僕はそう言おうとしたがそんな考えはすぐに吹き飛んだ。  
なぜなら、僕の真下に黒い穴がぽつかりと口を開けて……

「これは……ベタ過ちる

そう言つて僕は穴の中に落ちていった。

ユウ「いよいよ始まりましたか」

HAL「ここまで来るの、結構大変だったよ」

ユウ「パンを投稿するまで僕やエリの設定をずっとイジッてました  
ね」

HAL「物語が進むにつれて色々合わない部分が出てくるかもしけ  
ないから、  
そこ調整のためだよ」

ユウ「とにかくの続きを考えてあるんですけど?」

HAL「勢いで投稿したからまだほとんど出来てない」

ユウ「ちゃんと続くのか不安になつてきました(汗)」

HAL「多分大丈夫だつて…多分」

ユウ「こんな新米作者ですが、どうか温かい目で見守ってください」

HAL「ひどい言われようつだね」

ユウ「貴方は黙つて続きを書いてください」

HAL「……はー」

「次回のタイトルは『月明の守護者』です。楽しみにしてくださいね」

HAL「ちょっと…それ俺のセリフ…」

神様「私の出番つてこの話だけなのですか?…とても寂しいのですよ」

HAL「何勝手に出てきてんの!…戻つて戻つて!…」

神様「厨二作者がグダグダ言わないでほしいのですよ」

HAL「くつ…好き勝手言いやがって。まあいい、次回もおせ」

神様「次回も見ないと魂引っこ抜くのですよ~」

HAL「ノオオオオオオ!…!…(涙)」

改行について不満があつたり、誤字・脱字等がありましたら感想掲示板でお申し付けください。出来る限り訂正していきます。

## shift 0-2 「兎畠(たづねこ)の介護者」(前編)

家に一台しかパソコンが無い上、弟がネットゲーミングでパソコンから離れない…。

見つけたぞー世界の歪み（執筆が遅れる原因）を…。

……なんか色々とすみませんでした。」「

改行とかこれでいいのかな？

できるだけ見やすいように努力はしているけど…

見にくかつたら感想板でお申し付けください。

## shift 0・2 「月明(ナツメ)の守護者

落ちていぐ。落ちていぐ。果てしなく落ちていぐ。

どれくらい時間が経つただろうか。5分? 30分? それとも1時間?

もう時間の感覚が無い。本当に転生できるのだらうか? 不安になってしまった。

……ん? 下に光が見えてきた。

それはだんだんと大きくなり、やがて辺り一面が真っ白になった。

そして次の瞬間

「ねぎやああー!」

「よつやく生まれました! 元気な男の子ですよー!」

僕は、転生した。新たに与えられた名は、『奈々瀬 ゴウ』。

原作開始(一夏がEIS学園に入学する日)から16年前の事である。

一応、生まれた時の家族構成を紹介しておく。

父親の名は『コリウス・アンドrevイチ・クレンコフ』。

出身はロシア。ロシア国内では比較的著名な研究者である。

元々は婚約者がいたそうだが、その話を蹴って今の母と結婚し、実家とは絶縁同然という経歴を持つ。

意外と行動力があるな。

母親の名は『奈々瀬 亜衣』。

出身は日本。実家は神社だが、兄弟がいたため家は継がなかつた。

容姿端麗、武芸に広く通じ、家事もそつなくこなし、そして包容力がある。

父でなくとも男なら絶対惚れるであろう、したたかな女性だ。

そして長女である、僕の姉の名は『奈々瀬 コイ』。  
僕より5歳年上で、後に篠ノ之東に匹敵する天才科学者となる姉である。

ちなみに僕と姉の姓が日系なのは、父が、

「日本人の名前はカッコいいね！ 憧れてたんだ！」

とか言って籍を入れる時に奈々瀬の姓を入れたためだ。

僕と姉の名前がカタカナなのは、母が、

「見た目が日本人っぽくないし、カタカナの方が面白そうね」

とか言って、しかも父が妙に納得して従つてしまい決まってしまったためだ。

まあ……設定通りなんだけどさ。

これから僕は、自分が創った物語の通りに行動することになる。おかしな行動さえとらなければ、途中までは自分が思い描いた通り

に物語は進行する。

シルバリオ・ゴスペル  
銀の福音戦までは何とかなるだろう。

その後は……自分でどうにかしよう。

僕は順調に成長し、学校に通い、友達を作り、そして

篠ノ之束が『IDS』を開発。世界に向けてその存在を明らかにした。

その他にも、言葉では到底語りつくせないくらい沢山の出来事があった。

楽しい事も、悲しい事も。僕は全てを乗り越えた。

そして時は流れ、原作開始の1ヶ月前まで進む。

僕は今、アメリカの某州にある、近年急成長してきたアメリカのIDS機器開發生産会社、アナハイム・エレクトロニクスの秘密ラボにいる。

もちろん姉さんも一緒に。

「遂に完成したんだね、姉さん」

「ええ……これが私のオリジナルにして最高傑作。その名は『月明アーティスの守護者』」

一人の目の前にあるのは、一つのIDS。

それもただのIDSではなく、奈々瀬ユイが一から創り上げた、468個目のコアを持つIDSだ。

「本当にこれで世界は変わると思ひ?..」

姉さんが後ろから僕に抱きつきながら訊いてきた。僕は自信を持つて応える。

「変わるんじゃない。変えるんだよ、姉さん。僕が変えてみせる」

「世界を変えるだなんて、最初は馬鹿げた事だと思ってた。でも、今はちょっと見てみたいかな… 変革した世界を」

「『夢は常に大きく、志は常に高く』。母さんの言葉だよ」

「……そうだね。コウならきっと出来るよ。私はやつ信じてゐる。僕がこの世界を変えてみせん。この機体が、姉さんが手伝ってくれる。

「プロジェクトN・T・S、か」

姉さんはその言葉が持つ意味を噛み締めるように口づぶやいた。

「とにかく姉さん。ここ最近ラボに籠りつきりだつたでしょ？ 家に帰つて『飯にしない？ お腹空いたでしょ？』

姉さんは職人肌の人間だから、集中すると中々ここから出でこない。備え付けの食事は全然減つてなかつたから、きっと何日も食事を摂らずに研究に没頭していたのだらう。

「コウの手料理かあ…… 最後に食べたの、いつだつたかな？」

そう言つて姉さんは視線を遠くに向けた。たぶん1週間くらい前… かな？

「じゃあ、いい……！？」

言い切らうとした瞬間、ラボにアラートが鳴り響いた。

「何があつたんですか！？」

僕は通信用のボタンを押して尋ねる。確かに警備員に繋がるはずだ。

「しつ、侵入者です！ 数は一人！ テュノア社製ラフアール・リヴ  
アイブ！ 何だコイツ……つよ」

「

通信はそこまで途切れた。やられたか。

「バレてたの？ おかしいなあ……」

姉さんは不思議そうに首を捻っている。まさか……マークされてた  
のは姉さんか？

「「」のままだとひじき「」まで来ちゃうな

姉さんはモニターを見ながらのぼほんと言った。  
うちの姉の辞書に焦燥という単語は果たして載っているのだろうか？

「とにかく迎撃しないと……」

「機体は出来上がったばかりのそれしか無いよ」

アルテミス

「これは秘密ラボだから、機密性を重視するためにエレベーターは配置していない。

エレベーターを配置するところには、これは重要な物だと、そう言つてふり  
しているよつなものだからだ。

つまり、必然的に僕がアルテミスで迎撃せざるを得ない。でも……

「僕、これ動かすの初めてなんだけど」

「……ファイト」

試運転もせずにこきなり実戦つて……一夏とほとんど変わらないじやないか。

むしろ生死が懸かっている分性質たちが悪い。

たとえI-Sを動かせると知つても、やつぱつこうこう状況だと緊張する。

「あー、やうやう、フォーマジト初期化とハイクティンク最適化処理は実戦でやってね」

くつ、たぶん僕は今日死ぬだら。この後何が起こるか知つていなければ。

時間が無い。僕はコード型にした、これから愛機となるであろう機体を持つて研究室を出る。

笑顔で手を振る姉に見送られながら。

通路をゆっくりと進むラフアールの操縦者、オータムは退屈していた。  
I-Sの性能は既存の兵器を軽く凌駕する。通常兵器などI-Sの敵ではない。  
警備員などいくら集まつても戦力にはカウントされない。

「チツ……ちつたあ骨のある奴はいないのかい？ 楽勝過ぎてアクビが出るだ

この秘密ラボから開発中のISを奪つて来いとスコールに命令されて来たが、警備用のISも付けずに研究・開発される物などタ力が知れている。

口クな機体じゃないと勝手に値踏みしながら通路を進むと、実験場らしき広大な空間に出た。

「ようやくお出ましかい。ちつとは楽しませてくれるんだろうなあ？」

実験場には先客がいた。白いボディが特徴的なISだ。おそらくアレが今回のターゲットだろう。

操縦者は銀の短髪にスカイブルーの瞳、男とも女ともとれる姿で、その顔には様々な感情が入り乱れている。

「はじめまして。貴女が侵入者……ですよね？」

「分かりきつたこと訊くなよ。わざわざられてそいつを奪わくな！！」

そう言つてオータムはアサルトライフルを構えた。

shift 0・2 「仄聞(ナツメコ)の守護者」(後書き)

ユウ「散々遅いとか言つてたくせに、割と早く出来ましたね」

HAL「まあ、連載開始する前に少しだけストックを作つておいたからね」

ユウ「それは良いとして…」

HAL「スルーされた！？」

ユウ「どうして戦闘シーンが入つてないんですか？」

HAL「どうして…」の方が読者が楽しみにするかな～って

ユウ「新米作者はそんなこと考えずにさっさと次の話を作つてくれださい。」

…まさか戦闘シーンが書けないとか言いませんよね？」

HAL「……（汗）」

ユウ「…はあ…」

HAL「や！…あからさまに失望したようなため息つかない…！」

ユイ「ねえねえ、キャラクターとかEDの設定つていつ出すの？」

HAL「そこ…勝手に出てくるな…」…はあ…。

設定はあと2話くらい投稿したら出します

ユウ「は!? 気合い入れて作つてたくせに、何書つてるんですか! ?」

HAL「色々と大人の事情があるんだ。

読者様には悪いけどもう少し我慢して頂きたい」

ユウ「そんな戯言はプロになつてから書つてください」

HAL「ぐあー!」

ユイ「ふうん。大人の事情? ジャあ別にいいや。

私はユウとイチャイチャできればOKだから」

ユウ「ねつ…姉さん! ? ちよつ…抱きつかないで!!」

HAL「(よし、今がチャンス!)

次回のタイトルは『守護者の覚醒』ですー♪お楽しみ

ユイ「次も読んでくれたら嬉しいな〜」

HAL「…やられた(涙)」

8/29 改稿しました。

## shift 0・3 「守護者の覚醒」（前書き）

知識再確認の為、原作を一から読み直しています。

…話を書くのが嫌になつて逃げたとか、そんな理由では決してありません。

…本当にですよ？

それでは本編をお楽しみください。

## Shift 0・3 「守護者の覚醒」

ラファールのアサルトライフルが火を吹く。まずい、黙つて立つていたらしい的だ。

「くつ……」

反射的に身を逸らし、同時にスラスターを作動させ、襲い来る銃弾をかわしていく。

だが、僕のIS操縦時間はまだ10分程度。加えて機体が最適化されていない。

故に、どうしても操作がぎこちなく、遅くなってしまう。かわしきれなかつた銃弾が機体に当たり、シールドエネルギーが削られていく。

「何だ何だ？ まるでド素人じゃねえか！ 動きがノロノロだぜえ？」

オータムはサディスティックな笑みを浮かべながらアサルトライフルを撃ち続ける。

「たかが侵入者一人に本気を出すのは情けないですから……ね！」

強がつてはみたものの、彼女の言つている事はおおむね正しい。

僕は今までISを『実際に』操縦した事が無い。だから素人と言わても反論はできない。

だからと言って、僕は今まで何もしてこなかつた訳ではない。

姉さんお手製のISシミュレーターを何年もこなしてきた僕の仮想工

S操縦時間は、おそらく国家代表クラスと比べても遜色ないだろう。……つまり、この機体の最適化が終了し、僕の思い通りに扱えるようになれば、戦況がひっくり返る可能性は十分にある。

「そらそらー 無様なダンスでも踊つてな！ ヒヤハハハハ！！」

オータムめ……遊んでいるな？ わざと比べて狙いが甘くなっている。

僕は彼女にザコ認定された訳か。屈辱的だが、今は利用させてもらう。

銃弾を避けつつ、機体状況を確認。シールドエネルギー残量は8割。初期化、及び最適化は3割終了。……もっと早くならないのかこれ。

「避けてばかりじゃアタシは倒せないぜえ？ ほらほら、早く反撃してきな！」

「油断大敵つて言葉、知つてますか？」

「お前がそんなこと言える立場があ？ アハハハハ！」

安い挑発に乗つてみすみす勝機を逃すような事はしたくない。ここは我慢だ。

だが、このまま避け続ければ彼女に何か狙つていると感づかれるかもしれない。

仕方ない、ここは彼女に乗つてやるか。

僕は反撃をするために武器を呼び出すとした。しかし

「……なつー？」

武装欄を見て絶句した。武装のほとんどが使用不可になっていたからだ。

必死になつて使用可能な武装を探し出したが、それはたつた一つ。

「ビームサーべル……これだけ？」

両腕に装備されているビームサーべルだけだった。

この機体は複数の武装を同時に使用することが可能だが、これでは意味が無い。

「……無こよりはマシ……そういう事か」

そう言つて腕からビームサーべルを抜き、両手に持つて刃を出す。柄から形成されるビームの刃は細く、頼りない印象を受ける。だがこれでも威力は实体剣なんかよりもずっと高い。

一撃……一撃でも当たられれば十分だ。

「おいおい……状況分かつてんのかあ？ 近づけもしねえのによー…

「そんな考えだから……貴女は弱いんですよー」

オータムは油断しきつている。今なら銃弾を扱い潜り近づく事は難しくない。

今まで回避に徹していた体を反転させ、一気に距離を詰める。

「ハツ！ 近づかせるかよー…」

オータムはアサルトライフルを連射し、弾幕を張る。

銃弾の相対速度が上がり、機体へのダメージも跳ね上がる。

ダメージは気にするな。相手への一撃に集中するんだ。

僕は心の中で自分にそう言い聞かせ、オータムの懷に飛び込む。

「……ツ！？　！」

被弾を恐れず突っ込んでくる僕の姿を見て、彼女は一瞬怯んだ。今だ！

「はあああッ！」

速度を十分に乗せた右の突きを繰り出す。  
だが、オータムは直感か、それとも経験か、突きを寸での所で左に動いてかわす。

「！」のガキ！

そのまま武器を近接ブレードに持ち替えて反撃しようとする。だが

「甘い！」

僕は体を回転させ、その勢いそのままに左手のビームサーベルを薙ぐ。

「チイツ！」

ビームサーベルと近接ブレードがぶつかり合って、音と閃光を伴つて一瞬拮抗した。

だが、サーベルの方が切れ味は上だ。

近接ブレードはビームサーベルによつて真つ一つに切り裂かれた。

「！」のクソがあ！！」

「女性がそんな汚い言葉を使つものじやないでしょ！」

すぐに追撃を掛けようとするが、オータムは苦々しい顔つきで僕から距離を取る。

ダメージは『えられなかつた。ついでに油断も無くなつた。失敗したか……。

「もう一度と近づけさせねえ！ ブチ殺す！…」

オータムは再びアサルトライフルを呼び出し、乱射してきた。

「……くつー！」

狙いが付いてない分予測できない。その上密度も上がつていて。シールドエネルギーは3割を切り、装甲もボロボロだ。このままじゃ本当に殺され……何ッ！？

「……しまつた！？」

気付いたら僕は何時の間にか実験場の隅の方に誘導されていた。まづい、逃げ場が無い。

「まさか……あの怒りは演技だったんですか？」

「アツハハハハハ！ アタシが本氣を出せばざつとこんなモノよ。よくここまで耐えたねえ？ でも、これで終いだあー！」

オータムは武器をアサルトライフルからグレネードランチャーに切

り替え、僕に向けて躊躇なく撃つ。  
この間1秒。回避は……無理だな。

「姉さん……」め

言い切る前に僕の声は爆音で搔き消え、僕の体は爆発の光に包まれた。

「ヒヤハハハハ！ これで終わり……何イ！？」

勝利を確信していたオータムだったが、爆発の煙が收まり、僕を視界に捉えるとその表情は一変する。

……無理も無い。

今彼女の瞳には、初期化と最適化を終え真の姿となつたアルテミスが映つているのだから。

## Shift 0・3 「守護者の覚醒」（後書き）

ユウ「この話、タイトル詐欺になりませんかね？  
それになんだか話が短い気が…」

HAL「なんか切りが良い所で切つたらこんな感じになった。  
次は長めだから大丈夫だろう。…多分」

ユウ「…チートとは程遠い苦戦ぶりですねえ？」

HAL「最初からチートじゃ面白くないだろ？」

ユウ「確かにそうですが…とにかく設定の方はビックリですか？」

HAL「大方出来上がっているよ？次投稿したら載せるよ」

ユウ「そうですか…」

HAL「次回のタイトルは『IS D』です。

次でプロローグ編は終了し、原作一巻の話に入ります。  
次回もお楽しみに…よしつ、勝つた…！」

ユウ「ところで原作一巻からの話つて出来るんですか？」

HAL「……（汗）」

ユウ「…貴方のような大人はツ…修正しますツ…！」

HAL「…ツ…待て！俺に何を…グハアツ…？」

8 / 29

改稿しました。

## Shift 0-4 「HSR（イグニショナルストライク・ドライブ）」

ジージュネに買い物溜めてあつたラノベ10冊ほど…そろそろ消費したいところ。

執筆進むかな…（汗）

設定は最終確認をしてから出すので、明日が明後日くらいになると思っています。

……一巻の話に入つてからどうにも執筆が進まない。  
大筋は一応組んであるけど、上手く文章化するのが難しい。

……いかん、ナーバスになってしまった。それでは本編をお楽しみ下さい。

## Shift 0・4 「HSR（イグニシヨナルストライク・ドライブ）

「ふう……間に合って良かつた」

視界の中央に表示されている、初期化と最適化が終了した<sup>10</sup>のウインドウを閉じながら、僕はほっと胸を撫で下ろした。

今の攻撃は、一次移行<sup>11</sup>によつて追加された両肩のバインダーで防いだ。

あとほんの数瞬遅ければ僕はボロボロになつて倒れていただらう。正直にいう心臓に悪いイベントはあまり体験したくない。

機体は先程までとは違ひ、両肩に非固定式のバインダーが追加され、実体ダメージがリフレッシュされた装甲は曲線が映える天使のような形をしている。

今まで感じていた違和感は全く感じられない。  
それどころか、僕が願えばその全てを叶えてくれる。そんな全能感すら感じられる。

……行ける。理屈など関係無い。直感がそう告げている。

「一次移行だとおー!?　まさかためえ、今まで初期設定の機体で戦つてたつてのか!?!?」

オータムはそう言いながら、苦虫を噛み潰したかのような顔をする。その顔は一次移行前に倒せなかつた僕に対してか、それとも一次移行させてしまつた自分に対してか、それともその両方に對してか。僕にとってそんな事は些細な事でしかない。これで僕は自分の戦いができる。

「だが……今更一次移行してもおせえんだよぉー！」

お前のシールドエネルギーはもうほとんど残っていない。対して自分はほぼ無傷。

どうせみちお前の負けは揺るがない。言外にそう言っているのだろう。

確かにシールドエネルギーはあと一割しか無く、たとえアサルトライフルでも、攻撃を受け続ければすぐにでも装甲を光の粒子へと還すだろう。そうならないためには

「貴女の攻撃を食らわなければ良いだけの話です」

「やうかい、じゃあ……避けれるもんなら避けてみなあ！」

そう言つてオータムはアサルトライフルを構える。あと一秒もしないうちに撃つてくるだろう。

だけど不思議と焦りは感じない。何故か解つてしまふのだ。

彼女が何処に狙いを付けているのか、彼女が動搖している事が、彼女が頭の隅で、ほんの少しだけ油断している事が、解るのだ。なぜ解るのか、その理由の検討もついている。

機体全体に張り巡らされ、一次移行によつて機能を開始した『サイコフレーム』。

これが僕のニュータイプとしての力を増幅しているのだ。

あと二三秒もすればアサルトライフルから銃弾が飛び出すだろう。

被弾はもう許されない。そして隅に追いやられたこの状況を打破しなければならない。

取れる行動は限られてくる。

「はああああッ！！

「……なつ……にい！？」

オータムが引き金を引く瞬間、僕は彼女に向かつて突進した。被弾してはいけない場面での、特攻とも取れる突進。明らかに矛盾している。

「ツ！？ ナメンじやねえええ！！」

この矛盾に明らかに動搖したオータムだが、それでもアサルトライフルの引き金を引くのをやめない。

銃弾が僕に向かつて飛び出す。だが、動搖した状況でまともに狙いを付けるのは難しいはず。

予想通り、直撃コースはほとんど無く、たとえ直撃コースでもバインダーで全て防げた。

「食らえツ！」

「グボアツ！？」

僕はバインダーを前に構えたままタックルした。

オータムは回避行動もせずにアサルトライフルを撃ち続け、衝突。そのまま20メートル程吹っ飛ばされ、受身も取れずに地面に転がつた。

僕はバインダーが緩衝材になつたので、衝撃はほぼゼロだ。もし動搖していなければ、このタックルは冷静にかわされ終わつていただろう。

動搖の瞬間は油断と同様、最も攻めに適した瞬間だ。そう母さんが言つてたつて。

ISにはブラックアウト防止機能が付いているので、オータムは気絶しなかった。

すぐに体勢を整え、深呼吸。……動搖が消えた。もちろん油断も。右手に近接ブレードが現れる。チツ、予備があつたのか。

「……ダセエ。たかがガキ一人にこのザマ……か。柄にも無く熱くなつちましたぜ。……おい！ もう遊びは終わりだ！ ……死ね！」

オータムがそう告げた瞬間、刺突の構えを取り、僕に向かつて瞬間<sup>イグニッシュ</sup>加速<sup>ブースト</sup>を発動させた。

速い！？ もう目前じゃないか！？

「オラア！！」

「ツ！」

突っ込んでくるオータムを紙一重でかわす。今のは危なかった。どうする？ 射撃武器は追加されていないので使えない。

瞬間加速は使えない事は無いが、このタイミングで使うのは色々と怖い。

彼女にダメージを与えるにはどうしても速さが足りない。

「こんな時に考え方かあ？ 隙だらけだぜえ？ そらッ！ お返しだあツ！？」

「ぐあツ！？」

蹴りを入れられた！？ シールドエネルギーは……まだ大丈夫だ。さつきのオータムのように地面に転がる事は無かつたが、10メー

トル程飛ばされた。

くつ、あの速さは想定外だった。……だが、負けない。負けるわけにはいかない。

彼女の速さに対抗するためには、あと一手必要だ。その一手は今、アルテミスの中に眠っている。ならば引き出すまで。

……僕を護る気があるのなら、『守護者』の名が伊達ではないのなら、力を貸せ！

そう強く願った瞬間、「かちり」と、扉の鍵が開くような音が聞こえた。

『…感情レベル…』  
…機体ダメージレベル…高  
…サイコフレーム共振率…27%  
…状況による数値補正を考慮…再計算終了  
…規定条件のクリアを確認  
…IS-Dを起動します』

いくつものウインドウが出ては消え、出ては消えを繰り返し、最後に現れたウインドウには『IS-D』という文字。

それが現れた瞬間、機体全体の装甲がスライドし、サイコフレームが露出。

サイコフレームは淡い赤色に輝き、自らの存在を主張している。

「テメエ、まだ奥の手を隠してやがったのか！？」

直感で身の危険を感じ取ったのか、オータムは再び瞬間加速で僕に肉薄する。

早々に決着を付けるつもりか？ だがそれは悪手だ。

「……遅い！」

「何ッ！？」

オータムが僕に向かつてブレードを突こうとした瞬間、目の前から僕の姿が消えた。

否、突こうとした瞬間、僕は高速で彼女の後ろに回り込んでいた。

「はあッ！－」

「グアツ！？」

隙だらけになつたオータムの背中掛けて、僕はビームサーベルを一閃。

ラファールのスラスターを破壊する。

「……ヤロオ！－」

スラスターを破壊されたオータムは近接戦闘の不利を悟つたのか、武器をアサルトライフルに持ち替え、距離を取りつつ弾幕を張る。

「見えるー！」

「コイツ……速い！？」

彼女の弾幕は、しかしながら僕を捉えるには至らなかつた。単純に速いのだ、機体速度が。

サイコフレームの残光が幾重にも折り曲がりつつ、一筋の赤光となる程に。

「退いてください……ここから、今すぐ」……」

弾幕を搔い潜り、ビームサーベルを薙ぐ。一瞬遅れてアサルトライフルが両断され、オータムが破棄した瞬間、爆発した。

「チクショウ！」「の化け物がア……！」

完全に戦意を失ったオータムは、悪態をつきつつもスマートグレネードを使いその場から逃走した。

『戦闘の終了を確認。IS-Dの起動を終了します』

IS-Dの起動が終了し、装甲が元に戻っていく。これにて僕の初陣は終了した訳だが

「はあ、はあ、……ぐつー？」

体全体が急に痛み出した。特に頭が痛い。

おそらく脳が今までには無い情報を受信してしまい、異常な負荷が掛かっていたためだろう。

追々慣れていくしかないな、これは。機体が粒子に還り、僕は地面に倒れた。

「ユウ～、お疲れ様～」

痛みで薄れゆく意識の中、最後に見た物は駆け寄つて来る姉さんの姿。

その笑顔はきっと僕を労つてゐるのであって、決していいデータが

… そう信じたい。  
… 取れたからそんなイイ顔してこる訳ではないのだろう。

## shift 0・4 「HSR（イグニシナルストライク・ドライブ）

「HSRって、まんまアレじゃないですか！  
どいつせりの意味だつてモガモガ……」

HAL「ハイハイ、ネタバレは厳禁ですよ~」

「くつ…といひで、この話でプロローグ編は終了でしたね」

HAL「やうだよ。次から原作の主人公勢が出てくるよ」

「うそですか…とつとつ『彼女』に会えるんですね」

HAL「ああ、『彼女』はじめて出なによ？」

「？」

HAL「だつて原作でも結構遅かつたじゃないか。  
この連載だとまだ出てこないよ」

「うあああああん！…！（涙）」

HAL「行つちゃつたよ…まあいいか。

次回のタイトルは『入学と自己紹介』です！次回もお楽しみ  
に！」

「…おつと、忘れてた。この意見この感想お待ちしております」

## 連載の一時中断について

先日発生した大地震による原発の問題で、福島在住の作者は最悪の場合、自宅を離れ避難する事になります。

そうなった場合、パソコンからの更新はできなくなりますので、連載できなくなる可能性があります。というか無理です。

また、ライフルайнに関しても不安定であり、電気が使えないなつてもアウトですので、

いつそのこと連載を一時中断します。

読者の皆様には申し訳ありませんが、「理解」と「協力」のほど、よろしくお願いいたします。

連載の再開については、4月の上旬～を予定していますが、大幅に遅れる可能性がありますので、あくまで日安と考えて頂きたく思います。

それでは4月にまたお会いしましょう。

## 連載再開のお知らせ&amp;オリジナル主人公及び主人公機の設定（前書き）

長らくお待たせいたしました。本日より連載を再開いたします。  
ただし、不定期である事に変わりは無いので、どうか過度な期待を  
なさぬよう。

設定の紹介が続くので、本編開始はもう少し後になります。  
本編をお待ちの方は申し訳ありませんがもうしばらくお待ちください。

## 連載再開のお知らせ&amp;オリジナル主人公及び主人公機の設定

主人公設定

名前 奈々瀬 ユウ（ななせ ゆう）

性別 男

身長 164cm

体重 59kg

容姿 髪は銀のショートカット。瞳の色はスカイブルー。体の線は細く、女性に見えなくもない。

一番理想に近いと思われるモデルはガンダムWのカトル・ラバーバ・ウィナー。

趣味 料理（先生は近所に住んでいる、有名ホテルの元料理長）と読書（主に小説）。

特技 変装（本人は否定。女装は因捜査で標的が100%引っ掛かるレベル）と

料理（これも本人は否定。店を出せば絶対に儲かるレベルらしい）。

好きな物 たいやき（とある店舗限定）、笑顔。

嫌いな物 女子供の涙、絶望。

苦手な物 姉、想定外な事、海（泳げないという訳ではない）。

性格　冷静沈着な策士タイプ。ただし他人を犠牲にするような冷徹さは無い。

意志は強く、己の信念を貫くような熱い部分も持っている。ただし、温和な表情と物腰のためよく天然系キャラと勘違いされる。

基本的に言葉遣いは、姉と小さな子供にはフランクに、それ以外の人には丁寧な言葉遣いをする。

ただし、感情が昂っている時は丁寧ではなくなる。

その他情報（今後役に立つかもしれないもの）

- ・両親が他界してからはアメリカの叔父の所に身を寄せている。身を寄せる際、叔父が経営する電気機器開発会社、アナハイム・エレクトロニクスが経営危機に陥っている話を聞き、会社をIS機器開発に参入させることで救った。  
以後は社長よりも頼りになる社員として待遇されている。
- ・ISが扱えるようになつてからアメリカ軍にスカウトされ、対IS特務機関の補佐官に任命された。階級は大尉。
- ・アナハイムの経済事情が劇的に良くなつたため、懐はこれでもかと潤つている。俗に言うセレブである。  
自宅はロスの一等地で、IS学園から車で30分の海辺沿いに別荘を持っている。
- ・日本語、英語に加え、ロシア語、フランス語が話せる。
- ・護身術としてCQC（近接格闘術）や、  
サバット（屋外での使用を想定した実戦派格闘技）を用いる。

また、護身用として防弾仕様の鉄扇を持しており、

鉄扇での戦闘術も一応習得しており、鉄扇で斬鉄できる。

- ・ユータイプの適性を持つ。ただし能力はあまり高くなく、アルテミスのフルサイコフレームの補助が無ければ的確な察知はできない。

8割方転生前の主人公の創作ノートより抜粋。

追加情報（今後ストーリーが進んだ場合に明らかになるもの）

・父親の仕事の都合で、ロシア、フランス、日本と、引っ越しと転校を繰り返していた。

・アメリカに引っ越ししてからも一夏と文通をしていた。

しかし、情報操作をしていたため、一夏はコウの現状をよく知らない。

転生前の主人公について

ごく普通の家庭に生まれ、ごく普通の学校に進学し、ごく普通の会社に就職した、ごく普通の社会人（享年25歳）。

高校を卒業する前に好意を寄せていた女の子に告白し、振られた。ちなみに一夏のような鈍感ではない。モテ体质でもない。純愛が理想の恋愛だと思い込んでいるおめでたい人間。

小説（特にライトノベル）を愛読し、溢れる創作意欲をノートに書き溜め、  
創作ノートを作り上げた。

ISの小説が最も好きだった理由は、『シャルロットに恋をした』

ため……らしい。

主人公機設定  
名称 アルテミス（月明の守護者）  
げつめい しゅごしゃ

操縦者 奈々瀬 ユウ

機体説明

アナハイム（正しくは奈々瀬 ユイ）がProject N.T.Sの過程で開発した第四世代試作型IS。

奈々瀬 ユイが新たに創り出した468個目のコアを内蔵している。

これまでのISとは異なるエネルギー供給システム（高圧縮式マルチシフトリアクター）を採用しており、駆動時間は第三世代型のおよそ4倍、

エネルギー系武装の威力はおよそ1・5倍と大容量、高威力化を果たしている。

加えて背部に追加のプロペラント・タンクが装備されており、稼働時間がさらに増している。

ただし、装甲とシールドエネルギーについては他の第三世代とあまり変わらない。

機体フレームは全てサイコフレームとなつており、ユウのニュー・タイプ能力の強化に一役買っている。

サイコフレームが操縦をアシストするため、ISスーツを着なくとも操縦に影響が無い。

ただし、最低限操縦者の命が守られなければならないため、ユウはIS学園の制服を改造し、ISスーツに近い性質を持たせている。

機体のシルエットは曲線が映える天使のような形。カラーリングは白。

全身装甲とはいかなまでも、装甲の割合は他の機体よりも多く、加えて機体の周囲に非固定式の4つのバインダーを装備し、外観はいかにも重装甲型らしい形をしている。

しかし、機体の周囲にある非固定式の4つのバインダーはシールドの他、

スラスターとしても機能し、見た目とは裏腹に高い機動性を持つ。

機体イメージはガンダムのクシャトリヤにゴーラーンの機能を持たせ、

装甲をスマートにした上で白色に塗装した感じ。

スペックデータは偽装され、第三世代相撲に落ちてきている。

## 武装

ファンネル×12

操縦者の脳波に連動して起動、攻撃する漏斗型小型自律兵器。

BT兵器のようにビームを偏向させる事は出来ない。

バインダーに各3つずつ搭載されている。

バースト・ファンネル×4

ビーム砲を9門装備している大型のファンネル。

バインダーに各1つずつ搭載されている。

ビーム・ガトリングガン×2

4砲身型の小型ガトリングガン。

エネルギー充填式であり、一回の充填で500発撃てる。

弾丸を搭載する必要がないので小型かつ軽量。

片手で所持することができ、取り回しもビーム・マグナム並。両手に持つて使用することが多い。

1発の威力はあまり高くなく、専ら牽制・弾幕用として使われる。

### ビーム・マグナム

エネルギーパック消費型のビームライフル。

一発につき雪羅の荷電粒子砲並の威力があり、掠めただけでもダメージを負う。

エネルギーパックは1パックにつき5発分、予備の物を合わせても15発分しか無く、

一回の戦闘で15発しか撃つ事ができないが、

機体のエネルギーを消費せずに強力な攻撃を行える事が強みである。

### ビームサーベル×4

ビーム刃を形成して敵機を攻撃する近接武器。

実体系の近接武器より高威力かつ取り回しが良い。

2本は両腕部に、残りの2本は後ろ二つのバインダーに各一本ずつ収められている。

腕部の物はビーム・トンファーとして用いることも可能。

### 高出力ビームソード×2

ビーム刃がより高出力かつ長大になつたビームサーベル。

近接武器の中では長い部類に入るが、取り回しはビームサーベルとほとんど変わらない。

前二つのバインダーに各一本ずつ収められている。

### ビームバリア発生装置×4

バインダーの表側に搭載されている防御兵装。

稼働させれば実弾、光学問わず大抵の攻撃の威力を無効化、もしくは減衰できる。

4つの発生装置の内一つだけ稼働させるなどの部分展開が可能。全て同時に稼働させた場合はエネルギー消費が激しい。

### ワンオファビリティー

#### I S D (イグニッショナルストライク ドライブ)

『機体と操縦者の潜在能力を引き出し、戦闘能力の即時強化を行つ』ためのシステム。

発動時に機体全体の装甲がスライドし、サイコフレームが露出。同時に機体性能、特に機動性が大幅にアップする。

また、ユウの二ユータイプ能力も強化され、より素早い察知が可能となる。

ただし、相手のBT兵器等の操作はできない。

通常稼働時はサイコフレームが赤色に、最大稼働時は月光色に輝く。

圧倒的な性能ゆえに使用状況が限定されるという性質を持つ。

この機体説明は一次移行以後の状態を示しているものであり、Shift 1 - 1から適用される設定である。  
セカンドシフト

## 連載再開のお知らせ&amp;オリジナル主人公及び主人公機の設定（後書き）

HAL「とりあえずお待たせしました。それと本編じゃなくて」めんなさい」

ユウ「今まで投稿出来ていなかつた僕の設定ですね」

HAL「うん。次はその他のオリジナルキャラ&amp;HSの設定ね」

ユウ「本編をさつと書けとは言いませんが、この設定……」

HAL「何か？」

ユウ「何故僕の転生前の情報が載つているんですか？」

HAL「いやあ……需要あるかと思つてついでにさよしつつと」

ユウ「なんですかこの設定は！？ 酷すぎますよコレは…まるで僕が根暗な人間みたいじゃないですか！」

HAL「え？ 違うの？」

ユウ「違います！…」

HAL「そうそう、本編が進んだ時の追加情報はこっちに入れるから、

話が進んでからもこっちを定期的にチェックしてくれよな

「スルーですか！？　スルーしましたよね！？」

HAL「細かい事気にするな。器の小さい男だと思われるぞ」

「む……仕方がない。でも後で必ず後ろから刺します」

HAL「おおいわい。それじゃあきをつけよつ（棒読み）。

それでは読者の皆さま、今後とも応援よろしくお願ひします  
！」

「僕としては先行きが不安です。作者がこんなんで……」

HAL「うつやれこ」

## オリジナルキャラ及びオリジナルIS設定（前書き）

IISってゲーム化しませんかね？

劇中では普通にゲーム有りましたし……。

漫画化・アニメ化と来れば後はゲーム化しか残っていないと思つんですが……。

ゲームシステムはガンダムvsガンダムみたいな感じで。

媒体はPS3あたりだと画面が綺麗で良いんですけど。

あとエディット機能を付けてくれればいくら高くても買います。絶対に買います。

## オリジナルキャラ及びオリジナルIS設定

オリジナルキャラクター設定  
SHIFT 0 - 2 以降登場

名前 奈々瀬 ユイ (ななせ ゆい)

性別 女

身長 不明 (ボールペンで荒々しく塗り潰されており、解読不可)

体重 不明 (身長と同様)

スリーサイズ 不明 (『ユウ以外には見せてあげない』と書かれている)

容姿 おおよそユウと変わらないが、髪はロングで胸が大きい。  
美女と呼べるレベル。

好きな物 ユウの手料理 (『むしろ自分が料理されたい』と後ろに  
書かれている)

嫌いな物 ユウを傷つける人

(こちらは『ユウをキズモノにするのは私の役目』と書  
かれている)

性格 一言で言つなら「ブラン」。何かにつけてユウにくつづきたが  
る。

ユウの頼みなら基本何でも聞く。

篠ノ之束と同等、もしくはそれ以上の天才。  
しかし、束と違い他人に対する排他的ではない。

#### その他情報

- ・ユウの5歳年上。家事はほとんどできず、ユウに任せっきり。
- ・ISの基礎となるものを創り出した。その時、弟子の中に篠ノ之束がいたため、  
束からは『師匠』と呼ばれている。
- ・ユウの頼みでアナハイムの技術主任を務め、経営の持ち直しに一役買つた。
- ・束以外にIS「ア」を作ることができる人物である。

名前 ユリウス・アンドレヴィチ・クレンコフ

詳しく述べ Shrift 0-2 に記載。

#### 追加情報

- ・奈々瀬ユウが10歳の時に事故死。

名前 奈々瀬 垣衣（ななせ あい）

詳しく述べ Shrift 0-2 に記載。

#### 追加情報

- ・奈々瀬ユウが10歳の時に夫と共に事故死。

Shift 1 - 2 以降登場

名前 河井 和花（かわい わか）

性別 女

容姿 髪は濃藍色のショートカット。瞳の色は、ダークブルー。

メガネを掛けしており、容姿は山田真耶とよく似ている。

性格 年相応の思考をし、年相応の夢を抱く、ごく普通の少女。  
人が見ていない所で人一倍努力するがんばり屋さん。

弱気で気が小さい一面を持っているが、暴走すると手が付けられなくなる。

その他情報

- Shift 1 - 2 の時点では名前を出す予定しかなかった。  
しかし、名前が特徴的かつキャラ自体も動かしやすいので、  
モブキャラからサブキャラに見事昇格したシンデレラ・ガール。
- クラスメイトからは『マママヤ2世』のあだ名で呼ばれる。  
しかし、言つまでも無く山田真耶との血縁的関係性は皆無である。  
マンガやアニメを密かに楽しむ隠れ一次専。  
BLもGLもいけるオールマイティな人。

名称 ワルキューレ（鉄の戦乙女）  
くろがねいぐさあどめ

#### 機体説明

アナハイムが開発した第一世代型 I S<sup>バッスロット</sup>。特徴は豊富な拡張領域と、新開発フレーム、『エクステンショナル・ディバイドフレーム』による高い追従性。さらに、用途に応じて多種多様なカスタムができるので、熟練者が乗れば最新型と互角にやり合うほど潜有能力を持つ。機動性では『ラファール・リヴァイブ』にやや劣るが、武装の性能は第二世代の機体の中では最も高い。悪条件下での機体の安定性や信頼性も高く、それが評価されアメリカ軍で制式採用されている。機体のデフォルトカラーは灰色。

#### 基本装備

ビームサーベル × 2

性能は基本的にアルテミスの物と同じ。

左腕部に一本、シールドに一本収納されている。

#### ビームライフル

言わずと知れた、ビームを撃ち出すライフル。小型ゆえ、片手で持てる。

威力はブルー・ティアーズのスター・ライト Mk ·?·くらい。

ビーム・マグナムと違い弾数制限は無いが、

機体のエネルギーを消費するので使えばその分稼働時間が短くなる。

#### バズーカ

拡散弾頭を積んだ大きめのバズーカ。装弾数は4発。

弾頭の特性上距離が開けば開くほど威力が低下するが当てやす

くなる。

### シールド

物理シールド。裏側にビームサーべルを一本収納している。  
表面に対ビームコーティングが施されており、  
光学兵器に対しても一定の防御力を持つ。

### その他IS関連設定

アナハイム・エレクトロニクス社（通称アナハイム）

近年急成長してきたアメリカのIS機器開発生産会社。

世界で初めてビーム兵器の小型化に成功し、その他豊富な携行火器を開発、

生産している。国外からの需要は高い。

第一世代型IS「ワルキユーレ」がアメリカ軍で制式採用されている話から、

アメリカ国内では政府に融通が利く程影響力がある。

## オリジナルキャラ及びオリジナルHS設定（後書き）

「…………酷いですね」

HAL「いやー、普通にインタビューしたら適当にばぐらかされちゃったよ。

参った参った

HAL「参った参ったじゃありませんよー」こんど読者の皆さんが納得すると

思つてるんですかー？」

HAL「じゃあお前がインタビューすればいいじゃん

HAL「うう……。で、でもここののは作者である貴方の仕事でしみじみ

HAL「インタビューだけならお前だけでも問題ないだろ

HAL「…………やっぱワルキューの設定、作ったのは良いんですけど、

これがうまい予定つて有るんですか？」

HAL「ロイッ…………露骨に話題逸らしがって……。まあいい。

一応頭の中ではHS7巻のように出す事を考えている。  
……何時になるかは未定だけどな

HAL「一応先読みしましたけど、5話使って戦闘シーンがもがもが

HAL「バカヤロウ！！ てめ、ネタバレすんじゃねえ！！」

ユイ「次回から本編に入ります タイトルは『入学と自己紹介』だよー。」

お楽しみにー」

HAL&amp;「コウ「あ。 言われた…… orz」

## Shift 1-1 「入学と自己紹介」（前書き）

ストーリーは基本主人公視点、もしくは三人称視点で進行します。人物の心情は（）、もしくはインナーロードで入れていきます。

進行速度が異常に遅い気がしないでもありませんが、これは作者の力量のせいです。気にしないでください。

## Shift 1-1 「入学と自己紹介」

Interlude 奈々瀬ユウ

「全員揃つてますねー。それじゃあSHRはじめますよー」  
シヨートホールーム

この声は、今教壇に立っている山田先生の物だ。  
転生前は一次元でしか見た事が無かつた（当然だが）が、三次元で  
見るとその破壊力たるや凄まじいものがある。特に胸。  
なるほど……一夏が称賛するだけの事はある。あの体つきでの胸  
は反則だ。

しかし……思つていた以上にIS学園は居心地が悪い。

秘密ラボ襲撃事件（秘密なので当然ニュースにはならない）  
の後、ニュースに『唯一IS使える男』こと織斑一夏の名が頻繁  
に出るようになつた。

そのニュースを見て僕は、アメリカ政府に対しアルテミスの稼働ゲ  
ーテを提出。

そして政府はこれを受諾し、僕は『IS使える一人目の男』にな  
つた。

……秘密裏に、なんだけどね。

ISを使える一人目の男になつたことで、当然の事ながらIS学園  
への入学が強制的に決つた。

姉さんは僕のIS学園への入学が決定すると、

「IS学園の教師にならうかなあ。そうすればいつでもユウとイチ  
ヤイチヤできるし

「お願いだからやめてよ姉さん。欲望がダダ漏れだよ？」

姉さんの世界の中心はどうやら僕らしい。

少しでもいいから自分が世界に及ぼす影響を考えてほしい。  
駄々をこねる姉さんをアナハイムの社員たちに預け、僕は単身、I  
S学園に向かった。

これが原作開始前の、一ヶ月の間にあった事だ。

そして冒頭に戻る訳だが……

女、女、女、女、どこを見ても女。いや、一人だけ男がいる。

織斑一夏のことなのが。

ちなみに僕の席は一夏の三つ左で、篠ノ之箒の一つ左。  
一番窓側の一番前。一夏よりはだいぶマシな位置だな。  
右斜め前には教壇に山田先生の姿。そして後ろは全員女。

後ろから突き刺さるような視線を感じる。感情の大半はおそれく『  
好奇』だろう。

原作では一夏が全て受け止めていたのだから、そのプレッシャーた  
るや凄まじいものだったのだろうな。

当の一夏本人は原作同様そわそわしている。

……あ、こっちに視線を向けた。正確には僕の一つ右の箒に視線を  
向けた。

その視線は『助けてくれ』という意味だらう。  
やはりというか、筈は顔を逸らした。

一夏は今度は本当に僕に視線を向けてきた。

自己紹介くらい自分でできないと将来苦労するぞ？

僕はわざと目を逸らし、顔を窓の外に向けた。

「織斑一夏くん。……織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

一夏は裏返った声で返事をし、教室内からくすくすと笑い声が出てくる。

泣き顔の山田先生に頼まれた一夏は席から立ち上がり、後ろを向いてクラスメートたちを一瞥、自己紹介を始める。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

一夏、それでは情報量が少なすぎるぞ。

自己紹介は相手に自分を知つてもらう初步的な手段だ。

ここである程度情報を提示しておかないと、相手が自分に対してもうのように接すればいいか分からず、結果、適切な友好関係が築けないといった弊害を招く。

ほら、他の女子たちは『もっと何か喋つてよ』といつ視線を一夏に送っている。

その視線に対し、一夏は息を吸つて……

「以上です」

がたたつ。案の定、ずつこける女子が複数名。  
そして何時の間にか教室に入ってきた千冬さんが、不甲斐ない弟に対して出席簿アタックをきました。

その冷徹さたるや、つちの姉とは大違ひだ。

振り向いた一夏は一言、

「げえつ、関羽！？」

パンツ！ うわっ……痛そう。

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

そりや怒るよ、そもそも性別が違うじゃないか。

この場合は『弓腰姫』こと孫尚香が正しい。おそらくは。げえつ、孫尚香！？ ……ダメだ、合わない。

そんなくだらない事を考えていると、女子から黄色い歓声が上がったり、一夏に対して羨望の声が上がったりした。

女帝織斑のネームバリューは凄まじいな。改めてそう思つ。

そう僕が思った瞬間、千冬さんが僕の方をギロリと睨み、

「奈々瀬、今失礼な事を考えなかつたか？」

「ッ！？ 思考を読まれた！？ だがまだだ、まだ終わらんよ！

「いえ、織斑先生の人望は素晴らしいと考えていました。自分も先生のようになるために精進します」

「……ふん。まあいい」

ふう、危なかつた……今のは読心術か？ ニュータイプも真つ青だぞ。

ちなみに僕はニュータイプで、真つ青になつたんだが、どうでもい

い事か。

しかしどうやら出席簿アタックは回避できたらしく。幸か不幸か、まだSHR終了のチャイムは鳴らず、自己紹介は続き……

「次は……奈々瀬ユウ君」

「はい」

僕の名前が呼ばれた。僕は席を立ち、後ろを向く。

「初めて。奈々瀬ユウです。僕はロシア人と日本人のハーフで、生まれは日本、育ちはロシア、フランス、日本、今はアメリカ。趣味は料理と読書です。

皆さんと早く打ち解けたいと思っているので、気軽に声をかけてください。よろしくお願ひします」

『…………』

必要最低限の事を述べ、かつ声を掛けやすい印象を持たせる。僕としては上出来だ。でもなぜ皆黙っているんだろうか。

『…………』

か？ カッコいいとかかな？

『かわいい～～～！～～～！』

……なんですか。

「男子！ もう一人の男子……。」

「しかもハーフだつて。銀髪綺麗～」

ええそうです。ハーフです。珍しいでしょ？

「弟にしたい！ 頭を撫で撫でしたい～」

まあ、実際弟だし。姉さんいるし。いつも撫で撫でされてるし。

「これが今時の草食系男子ね！ むしろ天然系？ 癒されるう～

天然系つて……他の人にはそんな風に見られてるのか？ むう…  
…。

「キタ！ —×コウ！… これで、飯三杯はイケるッ！…！」

おい、誰だ今言つた奴は。ちょっと表で『オハナシ』しちつじゃな  
いか。

薔薇より百合の方が素晴らしいって事を説いてやんよ。……やつぱ  
り今の無じで。

……どうやら僕は少し錯乱しているようだ。

だって反応が予想外過ぎるだろこれ。と/orか女子の田が姉さんと  
同じようになつてきてるし。

え？ 何これ、気を抜いたら喰われるとか、どんなバイオハザード  
だよ。

これから学園生活について一抹の不安を感じつつ、僕はSHR終了のチャイムが鳴るのを聞いていた。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にこれからHSの基礎知識を半月で覚えてもらつ。

その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

締めはやはり織斑先生のありがたいお言葉。  
やつぱりここは普通の高校じゃないな。当然だけど。

#### Interlude out

## shift 1-1 「入学と自己紹介」（後書き）

ユウ「一つだけ訊きたい事があります」

HAL「何？」

ユウ「何故僕は女子にあんな田で見られるんでしょう？」

HAL「えーと……あれだ、知つたら軽く絶望するよ。」

ユウ「は!? 一体何を……」

ユイ「ねえ、私の出番ってあれだけ？ 勿論この後も出られるよね？」

HAL「うん？ ユイの出番はこの先全くと言つて良いほど無いけど？」

ユイ「作者のバカアアアーーー！」

ユウ「ああ、泣いて何処かに行つちゃいましたよ。  
ちょっと酷いんじゃないですか？」

HAL「事実なんだ。仕方ないだろ？」

じゃあ逆に訊くが、ユイをE.S学園に赴任させていいのか？」

ユウ「……現実は残酷ですね。」

HAL「やれやれ、お前も他人の事言えないな

ユウ「貴方ほどではありますんよ」

HAL「次回のタイトルは『再会』だ

ユウ「次回もお楽しみに!」

お知らせ

『奈々瀬ユウ』の欄に情報を追加。

8/29 改稿しました。

## Schrift 1 - 2 「再会」(前書き)

「Jの作品にB-L要素は一切入っておりません。安心してお読みください。

え？ 何でこんな事書いたのかって？ ……ビヘンだらうね。

あと一話「Jとの進行速度が遅いよつた」がするけど、気にしない気にはしない。

## Shift 1・2 「再会」

Interlude 奈々瀬ユウ

ショートホーム  
SHR終了後、すぐに一時間目のIIS基礎理論の授業が始まった。僕は姉からIISに関する知識を色々と教えていたため問題無かつたが、一夏はやはり全く分からなかつたらしい。

チャイムが鳴り、先生達が教室から出でていくと同時に教室がざわつき始めた。

女性は無駄話を好む傾向にあると何処かで聞いたような気がする。十代女子の活力は3分の1くらいは無駄話から得ているのだ。おそれくは。

だが、今回のざわつきは無駄話の類という訳ではなさそうだ。

実質女子校であるIIS学園に合法的に入学してきた男子。それも一人ではなく二人。

結論、僕と一緒に夏は否が応にも目立つ。

今現在この学園においては、特定の男子を探す事などどんな女子でもできる。

教室内だけでなく、廊下からもおびただしい数の視線が僕と一緒に夏に注がれている。

これはスーパースターを見るギャラリーと言つよりも視か……ゴホン、逆セクハラもいいところだ。

だが女尊男卑の今の風潮では、そんな事を訴えても追い詰められるのはこっちだつたりする。

そんな何とも情けないような世知辛いような事を考えていると、視線に耐え切れなくなつたのであろう一夏が立ち上がり、僕の所にや

つて来た。

久しぶりに会つたんだし、せつかくだから少し茆めいやひつかな。

「久しぶりだな、コウ。その……元氣で何よつだ

「……？　何を言つているんですか？　貴方と会つたのは初めてですか？」

「……んなつ！？」

驚愕に田を剥ぐ一夏。ちょっとインパクトが強すぎたか？  
それとも「ぐら友達だから」と言つてこれはやり過ぎだつたか。

「すみません、[冗談]ですよ。久しぶりです一夏。小学4年以來ですね」

「ええ、僕なんかよらずっと[冗談]ですよ」

「……そうち。ユーリおじいさんと畠衣おばさんの事、その」

父さんと母さんは僕が10歳の時に事故で亡くなつた。

葬式には織斑姉弟と篠の姿もあつたので、彼らは一人の死を知つてゐる。

「良いんですよ過去の事は、父さんと母さんの分までちゃんと生きるつもりですから」

「やうか。コウらしいな、その意志の強さとか

なんかしんみりとしてきたので話題を変える。話題とは移ろいゆく物だ。

「それより一夏は大変ですね。こんな所に無理やり入れさせられたんでしよう?」

「ああ……つて云ふは違うのか?」

「僕は自分の意思でここに来たんですよ。君と違つてちゃんと知識も入れてきました」

「うぐう……納得してないのは俺だけなのか?」

一夏は自分の待遇にひどく不満なようなので、とりあえず説得してみるか。

まあ、例によつてからかうんだが。

「もう遅いです。さっさと受け入れて順応したらどうです?」

「それに悪い事ばかりじゃないですよ、ここは。」

女の子がいっぱいになりどりみどり、大和撫子からパリジョンヌ、巨乳から貧乳まで何でも揃っています。

しかも純粹無垢、男に免疫がありません。

自分の腕次第ですが、墮とそうと思えば誰でも墮とせます。

たとえ君が如何にモテナイ君だったとしても彼女等の誰かは墮とせます。

ハツキリ言つてこには男子にとって地上の楽園なんですよ

ちなみに『それに』は一夏にのみ聞こえるよつて話した。

こんな話が女子に聞かれた暁には、女子に軽蔑されるのは目に見え

ている。

しかし、改めて見渡してみると女子のレベルは結構高い。  
本命は一人だが、その一人がダメとなれば標的<sup>ターゲット</sup>を変えて積極的に攻めていつてもいいかもしねり。  
……姉さんに喰われない内に。

「……しばらく会わない内に随分変わったな。……悪い方に」

呆れる一夏。今のはドス黒い欲望丸出しだつたからな。……漢共<sup>オハニー</sup>の。だがこんな話は男同士、気心が知れた者同士だからできるのだ。

「所詮僕の本質は、どんなに取り繕おつと男なんです。当然のことです。それに、こんなバカ話ができる男友達がいた方がいいでしょ?」

僕の意図に気付いたかは不明だが、一夏はククク、と笑い、

「そりだな。お前がいてくれて本当に助かるよ」

本当に嬉しそうに言つてくれた。

……悪いな一夏、本命以外の女子は全員君に押しつけさせてもらう。恨むなら己の運命を恨め。僕は知らん。

そんな感じで一夏と話をしていると、横から、

「……ちよつといいか」

この声は篠だ。授業終了後すぐに席を立つて何処かに行つていたようだが、どうやら戻つてきただらしい。

視界の隅では篠がちらちらと一夏の事を見ている。メインは一夏か。

「お久しぶりです、篠ノ之さん」

「ああ……」Jのよつたな形で再会するとは思つていなかつた。それと呼び方は篠で構わないぞ。前はそう呼んでいただろう?」

「分かりました。一夏、篠と一人で話したらどうですか？　会つのは久しぶりなんでしょう？」

「おう、……でも何で久しぶりって知つてるんだ？」

「彼女の立場を考えれば当然です」

篠ノ之束の妹ともなれば保護は必然。転校もやむなしといつ事だ。多少の予備知識だけでも、少し考えれば分かる。

「廊下でいいか？」

「おう！」

幕は一夏を連れ、廊下に出て行つた。……待て、教室には僕一人じゃないか。

餌に飢えた狼の群れに羊が一匹。これは危険すぎる。

狼が一拳に押し寄せてくれば僕は一分と持たずに喰い飛ばされるだらう。

「あう……あのー」

「はー?」

後ろから声を掛けられた。振り返つてみると女子が1名。その後方には女子のグループが1つ。

どうやら今僕に声を掛けている女子が代表らしい。よく考えてみれば、入学初日から初対面の人間に遠慮なく声を掛けような、無遠慮かつ鬱陶しい人間などそうはない。

……自意識過剰だったか。

「えーと……か、か……」

あいにく僕には瞬間記憶能力なんて便利な能力は無い。だから入学初日からクラスメート全員の名前を把握することは難しい。

「かつ、河井です。河井和花」

そう、思い出した。山田先生みたいに上から読んでも下から読んでも名前が同じ人だ。

なんて言つか、山田先生を彷彿とせる人なんだよね。色々と。

「そつ、河井さん。……えーと、僕に何か？」

「う、うん。奈々瀬君つて織斑君と仲が良いの……ですか？」

今普通に話そとしたりしたけど、初対面だし男子だしあつぱり丁寧な方がいいかなとか思つて、急遽丁寧な言葉に変えようとしたんだけど、使い慣れていないくて結局噛んだって所かな。

丁寧な言葉を無理して使おうとすると大抵失敗する。僕だって最初は失敗していた。

「普段通りの話し方で構いませんよ河井さん。一夏とは小学3、4

年生の頃クラスメートだつたんですね。

僕は家庭の事情で小学4年の時にアメリカに引っ越ししてしまつたんです、引っ越した後は年に一回手紙を交換していました

その手紙には僕の身分等、重要な情報は全く書かなかつたんだが。

「そつなんだ。……えつと、ありがとう」

そう言つて彼女は後ろのグループに合流し、他の女子に情報を伝えている。

人の口には立てられない。明日には全校生徒に伝わるのだから。ちなみに今の返答が『一×コウ交際疑惑』を更に加速させる事になるのだが、答えた本人にとつては知る由の無い事であつた

2時間目始業のチャイムが鳴り、一夏と篝が戻つて来た。その後山田先生と千冬さんによつて授業は行われたのだが、

「織斑君、分からぬ所はありますか?」

「先生、ほとんど全部分かりません」

一夏は山田先生に不明点を尋ねられ、己の不勉強を吐露。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか?」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「アーンツ!」

参考書を電話帳と間違えて捨て、

「必読と書いてあつただろ？が馬鹿者…後で再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな？」

「でも一週間でのこと……」

「やれと書つてこむ」

「……はー、やつまか」

千冬ちゃんに手酷く叱られた。その上、

「えへへつと、織斑君、分からぬ所は放課後に教えてあげますから、それまで頑張つてください。ね？ ねつ？」

山田先生に手を取られ慰められている。男としてのメンツが丸潰れだな。

見ていろ」ひちが恥ずかしこよ、全く。

#### Interlude out

そして一時間目が終りし、休み時間。静観していたあの女おじょりわらわが、遂に動き出した。

S h i f t 1 - 2 「再会」(後書き)

和花「えーと、初めまして。河井和花です」

HAL「ひむ。よひじく『マヤママヤツ世』」

和花「まつ、マヤママヤツ世ー?」

ユウ「ちよつと、あまり彼女をいじめないとださー」

HAL「すまん。でもハイツはモブだからひつ使おうと俺のか

和花「え!? 私の出番ってあれだけなんですか!?」

ユウ「え!? モブだつたんですか!? サブだと思つてたの...」

...

HAL「うん。名前以外全く考えていない。

勿体ないよね、名前は良いの?」

ユウ「どうにかなりませんかね、彼女の扱い」

HAL「だからひつで使う事にした」

和花「へえ、そつなんですか」

ユウ「河井さん、貴女の事ですか」

HAL「じゃあ早速次回予告よひじく

和花「え！？ わ、私がですか！？ ……え～っと、次回のタイト  
ルは……」

『お嬢様ってツンツンしてるのが多いけど、仕様？』です。  
「ちょっとギャグっぽくないですか？」このタイトル。  
え？ まだ続きあるんですか！？ エーと……  
次回も見るの！ ……ですよ。 ……ダメでした。』

HAL「……やつぱりか」

ユウ「……ですね」

お知らせ

『奈々瀬ユウ』、『ユリウス・アンドレヴィチ・クレンコフ』、  
『奈々瀬亜衣』の欄にひつそりと情報を追加。

河井和花の情報？ 需要があれば載せます。

8/29 改稿しました。

## shift 1・3 「お嬢様のシンシンヒトのがっこかど、仕様?」（新）

去年テレビでやっていた、『マヤの2012年地球滅亡説』が笑えなくなってきたような気がする今日この頃。

大型余震多発でまた連載中断とかやだなあ。

## Shift 1・3 「お嬢様つてシンシンしてるのが多いけど、仕様?」

Interlude 奈々瀬ユウ

「ちょっと、よろしくて?」

「へ?」

突然横から掛けられたお嬢様然とした声に、一夏は間の抜けた声を出して振り返り、僕は声のした方向を向いた。

筈は僕と同様、声のした方向に首を向けている。

今は一時間目の休み時間。一時間目の休み時間と同様、一夏が僕の席に赴き、筈も加えて三人で談笑していた時のことだつた。

顔を向けた先には、金髪ロールが特徴のイギリスのお嬢様。知ってる人は知っている、あのセシリリア・オルコット嬢である。実際に会つてみると、高貴なオーラと言うか、出来る女的なオーラがひしひしと伝わってくる感じがする。

しかし、残念な事にこのオーラはひと度も経たない内に消え去る事になるだろう。

……織斑一夏といつ存在によつて。

しかし、篠ノ之筈にセシリリア・オルコット、凰鈴音、果てはラウラ・ボーデヴィッヒ。

ツン後デレの女子の比率が非常に高い……気がする。

若干名ニコアンスが違う者がいるのだろうが、僕は全部同じに感じる。

ツンデレの種類について議論する気は無いが、こんなにツンデレを

出して読者の需要が偏つたりしないのだらうか？

「聞いてます？　お返事は？」

「どうやら思考の海に漫かる時間が長過ぎたらしく。

視界の隅の一夏をチラ見してみると、僕と同じように思考の海に漫かつていたのだろう。

はつとなつて彼女の質問のニコアンスを推し量つている。彼女の目線から察するに、おそらく僕にも返答を求めているのだろう。

「あ、ああ。聞いてるナビ……どうこいつ用件だ？」

「これはこれは、イギリス代表候補生のミス・オルコットではありませんか。

光榮ですよ、わざわざ貴女に声を掛けて頂けるなんて」

「まあでも無いが、前者が一夏、後者が僕だ。

「どちらの方はいいとして、貴方！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光榮なのですから、それ相応の態度という物があるんではないかしら？」

「こういった自己顯示欲が強いというか、無理にでもガンガン押し込んでくるような手合いは好きじゃない。

だが、こういった人間を数多く相手にしてきたため、あじらい方は嫌でも覚えた。

こうこう相手にわざわざ真正面からぶつかり合つ気なことたりそり無い。

適当に返事を呑ませて、さっさと話を終わらせるに留める。

一夏はそんな大人な考え方をしてくれるとは思えないが。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？」このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを…？」

「ユウは知ってるか？」

「無論です。ネットで調べればすぐに見つかります」

ちなみに、各国の代表候補生のデータだが、何故かホームページ上に載っていた。

無論国家公認ではなく、非公式ではあったが。しかもそのデータ、IS関連は全く載っていない。

載っているのはスリーサイズ（予想）、趣味、誕生日などなど、まるでというか、まんまアイドルのプロフだった。やはり好き物はどんな時代、どんな世界にもいるようだ。

「へえ。あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくじよ」

「代表候補生って、何？」

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「貴方つ、本氣でおっしゃつてますのーー?」

「おひ。知らん」

「一夏、受験生だつたんですから新聞くらい読んだでしょ? 読みましたよね?」

「……すまん。教科書とノートと参考書で手一杯だった」

ダメだ」「いや、早く何とかしないと。

「一夏、どうやら僕は君に対する評価を改めなければならなこようです」

「え? どいつ事だよそれ

「信じられない。信じられませんわ。常識ですわよ、常識。これだから極東の島国は……」

「で、代表候補生つて?」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるヒーロートの事ですか。」

……貴方、単語から想像したら分かる事でしょ?」

「一夏、加えて説明しますが、国家代表候補生には専用のISを所持する権限が与えられています。」

世界にISのコアは467個、研究用を引けば実用機は少なく見積もって200前後、国家代表の分を引けば100程度。

分かりますか? 彼女はその100人の中の一人なんですよ。

例えるなら、世界に100匹しかいない希少生物が今、田の前にいるという事です。

どれだけ幸運な事だか分かりましたか？」

「そりゃ、そいつはラッキーだな」

「……馬鹿にしていますの？」

そつ言つてミス・オルコットはさういちを睨んできた。

まあ、あれだ、少なくとも間違つてはいない……はずだ。

「大体、貴方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。

こちらの方程ではなくとも、少しは知的を感じさせるかと思つていましたが、ハツキリ言つて期待はずれですわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが

違うな一夏。織斑千冬の弟といつ時点での君は既に期待される対象になつてゐる。

良くも悪くも……ね。

「まあでも？ わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくして差し上げますわよ。

泣いて頼められたら、ISについて教えて差し上げなくもありませんわ。

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから

「入試つて、あれか？ ISを動かして戦つてやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ、教官」

「は……？ わ、わたくしだけだと聞きましたが？」

一夏の試験結果だが、正しくは相手の自滅だ。自滅と撃破はニュアンスが違う。

この場合、ミス・オルコットの言い分が正しい。だが、一夏はそんな事はお構いなしとばかりに追加口撃する。

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。

うわっ、こりない一言を言つから空氣にヒビが入つたじゃないか。無論、物理的に修復不可能なのはお約束だ。

「つ、つまり、わたくしだけではない……と？」

「いや、知らないけど」

「貴方も教官を倒したって言つていいの！？ ……まさか貴方も！？」

ミス・オルコットはそう言つてこっちを睨みつけてきた。  
はあ……仕方ない。正直に言おつ。

「僕は教官を倒してませんよ。そもそも入試すら受けていません。  
稼働データと実戦データを提出したら即合格でした」

「……は？ 試験も受けずに合格！？ ハーリーであるわたくしで  
さえ試験を受けるよつと言われたのに！？」

「僕は男ですから、例外もあるんでしょう」

「例外！？」

「じゃあ俺は例外じゃないってか？」

「貴方はすっ込んでなさい！」

「まあまあ、落ち着いてください」

「これが落ち着いていられ

ミス・オルコットがヒートアップする直前、三時間目開始のチャイムが鳴った。

この学園のチャイムは本当に空気が読める。何処かの唐変木とは全然違う。

「う……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくつて！  
？」

決め台詞を言つて自分の席に戻つていくミス・オルコット。本当に  
律義な人だな。

## shift 1・3 「お嬢様ってシンシンしてるのが多いナビ、仕様?」（後

ユウ「僕は主人公ですね? 田をそりやかに答えて下さ!」

HAL「無論、お前は主人公だ。なぜ今更そんな事を聞く?」

ユウ「本編での僕の主人公らしさがこれっぽっちも感じられません」

和花「あー……」

HAL「それはあれか、そろそろカリスマが欲しいって事か?」

ユウ「否定はしません」

HAL「安心しろ。お前の見せ場なら作つてある」

ユウ「本当ですか!-?」

HAL「和花、次回予告を頼む」

和花「はいっ! 次回のタイトルは、

『上には上がいる。能ある鷹でも気分次第で爪見せる』です。  
でもこれってやつぱりギャグっぽいですよね?』

HAL「気にするな。俺は気にしない」

ユウ「次回も楽しみにしててください」



shift 1 - 4 「上へ上がる。熊ある魔でも気分次第で爪見せる」

バトルを期待していた方々、申し訳ありませんが今回、バトルはありません。

といつかこの進行速度だとしばらくはバトルがありません。

ほのぼのとした学園生活を楽しみながらお待ちください。

## shift 1-4 「上へ上がる。熊ある庵でも気分次第で爪見せる」

Interlude 奈々瀬ユウ

三時間目開始のチャイムの後、千冬さんと山田先生が入室し、すぐに授業が始まると思ったが、

「授業の前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

そう言えば決闘イベントがあつたな。適当に一夏に押しつけるか。

「はいっ。奈々瀬君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います」

「ほら一夏、君への推せ……あれ？」

「俺も奈々瀬が良いと思います」

待て、何かおかしい。なぜ一夏の名前が出てこない？  
それから一夏、僕を売る気か？ 売る気なんだな？

「では候補者は奈々瀬ユウ……他にはいないか？ いないのなら奈々瀬で決定するぞ」

まずい。このままでは僕がクラス代表になってしまつ。  
僕は立ち上がり千冬さんに存在を示して意見する。

「ちょっと待って下さい！ ……一夏、後で友情って何なのかよ～

く話し合いましょう。

織斑先生、僕は織斑君を推薦します

「 ゆー、コウ！？ なんて事をするんだ！ 今の雰囲気なら押し通せると思つたのに…」

一夏が立ち上がつてそう言つてくる。

「冗談じやない。君がクラス代表にならないとこつちが困るんだ。

「 待つてください… 納得がいきませんわ…」

「男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ！  
わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間  
味わえとおっしゃるのですか！？  
そもそも実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。  
それを、物珍しいからという理由で I.S のあの字も知らないような  
素人や、人のご機嫌を取ることしかできないような甲斐性無しの方  
にされでは困ります！」

さすが、貴族らしい堂々とした発言だ。だがミス・オルコット、最後の一句は余計だ。  
僕はまだいいが、一夏が黙つていないで。

「わたくしは I.S の修練の為にこのよつな島国くんだりまで来ているのです。

ただでさえ、文化としても後進的な国で暮らせなくてはいけない事  
 자체が苦痛であるというのに

「

「イギリスだつて大してお国自慢ないだる。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

若干シナリオとは違う展開になつたが、まあいい。

これで決まつたな。後はオートで勝手に進むだひつ。

「あつ、あつ、貴方ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？  
……決闘ですか！」

「おう、いいぜ。四の五の言つより分かりやすい」

「では織斑先生、まずは織斑君とミス・オルコット、その後勝つた方と僕という試合の流れで構いませんか？」

「まあ、構わんが……お前には男のプライドという物は無いのか？」

二人の決闘の流れとは別に、僕はクラス代表決定戦の試合の流れを千冬さんと相談していた。

千冬さんは僕にも男らしい一面を期待しているようだが、プライドねえ……。

じゃあこの後ちよつとカツ ローリー所見せりや おうかな。意趣返しを兼ねて。

「それで、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらい」「一夏」……何だよコウ

「一夏、これから行うのは決闘、真剣勝負でしょう、ならばハンデなど不要。

付けよつとするならそれは決闘という行為への侮辱でしかありません

ん

一夏の言葉を遮つて僕はそう言った。感謝して欲しいな一夏。本来なら君は女子全員に笑われているはずなのだから。

「……そつか、そだな。悪かつた」

「あら、分かっていらっしゃいますわね。貴方になら特別に情けをかけて差し上げてもよくてよ」

「……ミス・オルコット、貴女は一つ勘違いをしています

右手の人差し指を立てながら、僕はそう言った。

ミス・オルコットだけでなく、クラス中が僕に注目している。何この状況、刑事ドラマ？

「勘違い……ですって？」

「先程の話を覚えてますか？ 入試の話です」

「ああ……あの話がどうかなさいまして？」

「気付きましたか？ あの話こそ、僕の実力を顕著に表わす物だったと言つて」「元の

「……？ どうこう事ですか？」

「僕が試験を受けることなく合格したのは、男だからとか、そんな陳腐な理由だからではありません。

まして国家代表候補生レベルの実力で試験を回避できるなんて、IS学園はそんなに甘くはない。

ならば、導き出される答えは絞られてくるでしょう？

「……つ、勿体ぶらないで話しなさい！」

「僕が提出した実戦データは、国家代表一人を同時に相手し、勝利した時のデータなんです」

『…………は？』

僕の言葉を聞いた瞬間、教室全体が固まった。  
クラス中が何を聞いたのかよく理解していない感じだ。  
もし完全に理解できていたとしても、それはそれで驚愕せざるを得ないデータなのだが。

「……国家代表って……」

「国家代表候補生の、その上の人たちですね」

相手はナターシャとイーリスだったんだけど、あの二人、結構強かつたよ。

コンビネーションが特に良かつた。ISの世代が同じだったらこっちが負けてたな。

「バカな！？ 何かの偶然ですか！」

「3連戦して、3戦とも僕の勝ちでした」

「…………」

さつきまで怒りで赤かったミス・オルコットの顔が、みるみる青ざめていく。

だがそれでも『分かりました』とうなずかないのは、貴族の意地か、それともただ単に現実が受け入れられないからなのか。どちらにせよ、次の一撃で勝敗は決する。

「理解して頂けましたか？ 情けを掛けられる側のは、本来なら貴女なのだという事を」

トドメの一撃を受け、ミス・オルコットはすとん、と力無く席に着いた。

肩が震えているように見えるのは悔しさからか？ それとも怒りか？ 泣いているかどうかは確認できないが、もし泣かせてしまっていたなら自己嫌悪に陥りそうだ。

『言いすぎた。悪かった』と、後でちゃんと謝つておこう。しかし、女子たちに一つの事実を示す事ができた。

『『ISを扱える男子が出てきた場合、女子と対等以上に戦える実力を手に入れられる可能性がある』』という事実を。教室の沈黙がその重さを顕著に物語っている。

「さて、話は纏まつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。

初戦は織斑とオルコット、その次が奈々瀬対初戦の勝者という一ナメント形式だ。

それぞれ準備をしておくよう

「元気のまま織斑先生が話を締めようとするが……」

「え？ クラス代表ってコウジじゃないの？」

声を上げたのは一夏だ。まるで今までのクラス代表が決まつたような雰囲気だが、それは決して違う。

そもそも君とミス・オルコットの決闘の話が発端だろ？

「まだ試合をしていないのに決める奴がいるか、馬鹿者！」

「一夏、君はミス・オルコットとの約束を裏ににするつもりですか？」

「でも実質お前が」

「パーンッ！ 織斑先生の出席簿が振り下ろされた。哀れいち  
パンッ！ ……痛い。何故僕まで叩かれるんだ？」

「織斑、やりもしない内に負けを認めるな。そんな脆弱な心では工  
Sに振り回されるぞ。

それから奈々瀬、口が達者なようだが、ガキの口喧嘩に機密事項を  
使うな」

「……はい」「

今のは全面的に織斑先生が正しい。

一夏もそれを分かつてているのか、織斑先生に返す返事は一緒だった。

Shift 1-4 「上は上がり。熊ある庵でも気分次第で爪見せる」

HAL「良かつたね、カツコい所を見せる事が出来たよ？」

ユウ「良くありません!! 何ですかこれは…?  
まるで僕が悪役じゃないですか…!」

HAL「君にはこれからもこう汚い事をいっぱいしてもらひつか  
う、

腹の底で黒く笑つていれば良いと想つよ

ユウ「最悪な主人公ですね」

HAL「何を言つてゐる。必要悪だよ、これは

ユウ「……そうですか。ところで今日は河井さんがいませんね

HAL「いないね。じゃあ君がやつてよ、次回予告」

ユウ「はい。次回のタイトルは、『ルームメイトは誰?』です。  
そういうえば僕は誰と組むんでしょう?」

HAL「それは次回のお楽しみだ

8/29 改稿しました。

## shift 1-5 「ルームメイトは誰?」（前編）

コウのルームメイトは、迷いに迷つてあの人になりました。  
だって動かしやすいんだもん。

といひで『明石家さんまのホンマでっかTV』つてすぐ面白いですね。

ふわふわおつ いにする方法があるって聞いた時は「コーナー吹きましたよ（笑）

おつ い体操つて実在したんですね……  
しかも動かし方を変えるだけで大きさも自由自在。  
もはや魔法の域としか……。

どうにかネタとして使えないだろうか……。

## Shift 1-5 「ルームメイトは誰?」

Interlude 奈々瀬ユウ

「うひ……意味が分からん。なんでこんなにややこしいんだ……？」

「一夏、今はまだ辛いかもしませんが、一ヶ月もすれば自然と分かるようになりますよ。

僕はそうでしたから

「……なあ、俺にI.Sの事教えてくれ

「教えてもらいたいなら、まずは参考書を読み切る事ですね。一週間の時間制限付きなんでしょう?」

「うぐう……」

放課後、僕と一夏は教室でそんなやり取りをしていた。  
筈は何処かへ行ってしまったため、教室にはいない。

ちなみにお昼休みだが、一夏は学食に向かつたようだ。それも堂々と。

女子のプレッシャーが大変だったに違いない。

何故そういう風に僕が他人事のように言うのか。

その理由だが、僕は女子の索敵網を搔い潜り、誰もいない屋上で自作の弁当を食べていたからだ。

せっかくなんだし皆で食べようよ、とか思つた人もいると思うが、せめて食事くらいは落ち着いてゆっくり食べたい。

女子に囲まれて、緊張して味が分からない料理を食べるよりは遙か

にマシだ。

食べてる途中、一夏が「裏切り者おおおー！」とか叫んでいる気がしたが、おそらく幻聴だ。

それに今となっては過去の事。

一夏、君も過去を気にしない懐の深い男になつた方がいいよ。うん。

「あ、織斑君に奈々瀬君。まだ教室にいたんですね。よかったです」「え？」

考え方や雑談をしていたので気が付かなかつたが、何時の間にか山田先生が書類を片手に立つていた。  
今の気の抜けた返事は一夏だ。

「山田先生、僕たちに何か？」

「はい。えっとですね、寮の部屋が決まりました。一人は別々の部屋で、その……どちらも女子との相部屋です」

そう言って山田先生は僕と一夏に部屋番号の書かれた紙とキーを渡した。  
ん？なぜ僕にも渡されるんだ？ 確か別宅から通学する予定だったんだけど。

「俺の部屋、決まって無かつたんじゃないですか？」

前聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらひつて話でしたけど

「僕もじばりくは別の所から通学するものだと思つていたんですが……」

「織斑君の場合は、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。それから奈々瀬君の方なんですが……最初から部屋割りの方に組み込まれてたみたいですね」

「……は？」

「どうこう事だ？ 僕は男だから、普通なら選考の時点では弾くと思つけど……。

「まあ、まあ、一ヶ月もすれば二人用の部屋が用意できますから、しばらくは一人とも女子との相部屋で我慢してください」

「ちょっと待つた！ なら俺とコウが組んで、お互いの相方が組んだ方がいいんじゃ……？」

一夏が筋の通つた反論を当たり前のように返してきた。  
一ヶ月も女子と相部屋なんて我慢ならないんだろう。  
だが、僕としては君と篠が同室になつてくれた方が色々と面白い。  
とりあえず確認すべき事を確認しよう。

「一夏、部屋の番号を教えてください」

「え？ えっと、1025号室だけど」

1025か、原作と同じだな。ならば一夏に篠を押ししつけるチャンスだ。

ここは何としても押し込む。諦めろ一夏。

「この選択が後に、僕に災厄をもたらす事になるのだが、この時点で僕はそんな事知る由も無かつた

僕は一夏と篠をくつつけるため、説得を始めた。

「僕は1036号室ですね。割と近いですからいつでも会えますよ。それに、学園に一人しかいない男子と相部屋ともなれば、おそらく彼女たちは部屋替えの件を了承してはくれないでしょう。幸運だとか言つてね。

それに一夏、君には早く耐性を付けてもらわないといけません。無論女子に対しての、です。どうして僕がこんな事を言うか分かりますか？

さつき言いましたがこの学園に男子は僕と君の二人しかいないんです。

日常生活ではどうしても女子に接する機会が多くなりますし、女子に気軽に話しかける事ができなければ何時まで経っても僕以外の友人ができませんよ？

僕は君がそんな悲しい事になるのを友人として見過ごす訳にはいきません。

僕としても君と同室になれないのは残念ですが、今後の事を考えればこれは必要な事です。

それに一ヶ月なんて、ISの勉強をしてればすぐですよ。

……ですから一夏、僕と同室の件は諦めてくれませんか？」

若干、というかもう暴論に限りなく近いが、そこは身振りを加え感情を前面に押し出し、一気にまくしたてる事でカバーする。

更に最後には一夏の手を取りお願いする。男同士で気色悪いとか言われそうだが、これだって立派な交渉術だ。この際気にしない事と

する。

「コウ……俺の事をそこまで考えてくれてるのか。……お前が友達で本当に良かつた。……じゃあ山田先生、一ヶ月後に部屋替えって事でよろしくお願ひします」

両手を僕の両肩に置きながらそう言つ一夏。

うん、ちょろいね。小学生の頃から何も変わってない。

単純で鈍感で直情的だから、とりあえず熱意を見せれば首を縦に振ってくれる。

叔父さんもそうだけビ、こうこうタイプは扱いやなくて助かるな。

そして山田先生の方は……ん?

「…………」

何故かぼーっとその場に突つ立っている。しかも顔が赤くなっているような……。

「……山田先生?」

「織斑君と奈々瀬君つてそんな……ダメですよ、二人とも男の子同志なのに」

いかん、この人の瞳の奥にバラ園が見える。これは早急に引き戻さねば。

「山田先生、山田先生!」

「へ? あ、はい! 一ヶ月後ですね。分かりました」

話せりやんと聞いていたようだ。戻つてくれて良かった。

「わういえ、荷物は一回家に帰らないと準備できないでし、今日はもう帰つていですか？」

「思い出したよ、一夏が言ひ。わういえ、僕の荷物つてどうなつてるんだ？」

間違えて別の方に行つていたら田も当たらない。

「あ、いえ、荷物なり」

「私が手配をしておいてやつた。ありがたく思え。それと奈々瀬の荷物なら届いていたぞ」

「ど……どうも」

「ありがと、……」

なんとも素晴らしいタイミングで登場してくる千冬さん。

「ユータイプの勘が告げてこる。この人は危険だと。……多分。

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取つてください。

あとお風呂ですけど、寮には大浴場がありますが、その……織斑君と奈々瀬君は今の所使えませんので、各部屋に備え付けてあるシャワーを使ってください」

「え、なんですか？」

真顔で聞き返す一夏。いや、普通聞き返せなこでしょ。理由が明らか過ぎる。

「一夏、君はエリ学園の女子生徒全員を敵に回す奴ですか？」

「は？ それってどういって……？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入

「山田先生、部屋の様子を見たいので、用事が無ければ失礼しても構いませんか？」

今の山田先生の言葉は誤解を生むような気がしてならなかつたので、誠に失礼ながらカットさせてもらつた。

「え？ あ、はい。構いませんよ。私たちはこれから会議がありますので、これで。織斑君、奈々瀬君、道草くつちやダメですよ」

直帰しろという事だらうか？ 参つたな、色々と見て回りつつと思つたんだけど。

まあ、別に明日でもいいか。まだ初日だし。

「分かりました」

「んじゃ行くか、ユウ」

そう言って僕と一緒に夏は教室を後にしようとしたが……何故か周りの女子が「いつ、一緒に帰るのかな?」だの、「手を繋いで帰るのかな?」だの、「やっぱり一×コウで間違いないわね!」だの、訳のわからない事をワイワイ言い合つて騒いでいた。

別にいいだろ、男同士で帰つても。あと最後の奴、変な物見過ぎだ。

「1036、1036……」とか

寮に入つてから、僕は一夏と別れて自分の部屋を探した。  
田当ての部屋はすぐに見つかり、僕はドアの鍵を開けようとするが、

「……違う、これは拙いな」

差し込もうとした鍵をピタリと止める。  
危ない危ない、危うく一夏と同じ轍を踏むところだった。  
女子がいるかもしれない部屋にノックもせずにに入るなんて自殺行為だ。

とこう訳で僕は一回、ドアの向こうの相手にも聞こえるようにノックした。

「はーい」

程なくしてドアの向こうから返事が聞こえた。やっぱりいたか。  
無論、ここで気を抜いて自分からドアを開けるのもダメだ。

以前姉さんの部屋に踏み込んだ時は酷かつた。あんな思いは一度と  
したくない。

「奈々瀬です。ドアを開けて頂けますか？」

「えっ、奈々瀬君！？ ちょっと待って」

ドアの向こうが急に慌ただしくなる。中で何が起きて居るのか気が  
なるが、無駄に詮索しないのがマナーだらう。  
といひ声の声、何処かで聞いたような気が……。

しばらくしてドアが開かれ、田の前には

「えっと、確か河井さん……ですよね？」

教室で話をした河井和花さんだ。  
この部屋にいるって事はまさか……

「えーと、うん。それで、この部屋に……何か？」

「この部屋って、1036号室ですね？」

「わうだけど、もしかして私のルームメイトって……」

僕は部屋番号が書かれた紙を見せながら河井さんに囁いた。

「どうやら、僕みたいです」

## shift 1・5 「ルームメイトは誰?」（後書き）

ユウ「前回いじにこないと思つたら、出演準備してたんですね……」

HAL「これでモブからサブに格上げだな」

和花「あらがとうござります!」

ユイ「うふふふふ」

ユウ「? 姉さんどうしたの?」

ユイ「何でもないわ。うふふふふ」

ユウ「…………（絶対に何かあるよコ）」

HAL「次回のタイトルは、『策士策に溺れる?』だ」

ユウ「策士って僕の事ですか？ 僕の事ですね？」

HAL「誰もそんな事言つてないだろ」

ユウ「田が泳いでますよ?」

ユイ「次回も楽しみにしてね。うふふふふ」

お知らせ

『河井和花』の情報は近日公開予定。

8 / 29

改稿しました。

## shift 1 - 6 「策士策に溺れる?」（前書き）

やらなきゃいけない事が増えてきたので、更新ペースが落ちる事になりそうです。

それと、その内あらすじとキーワードを一部変更します。迷走したって良いじゃない。処女作だもの。

「意見、感想は随時受付中です。

## Shift 1 - 6 「策士策に溺れる?」

「……えつと、とりあえず入っても構いませんか？」

「え？ あ、はい。どうぞ」

いつまでもドアの前で突っ立っている訳にはいかないので、とりあえず部屋に入れてもらう。

僕の部屋なので『入る』が正しいと思うが、残念ながらこの学園では女子の方が強い。

この部屋の優先権は女子である河井さんにあるのだ。

別にレディーファーストだって言えば良いんだろうけどさ。

「それにしても驚いた。まさかルームメイトが奈々瀬君だなんて……」

「僕もですよ。さつき話した相手がルームメイトだなんて、普通は考えませんから」

実際のところ、ルームメイトが誰かなんて予想もしていなかった。彼女がルームメイトだなんて想定外だった。

中に入つて部屋を見渡すと、思っていた以上に広く、設備も上々だ。ベッドが一人用としては随分大きい気がしたが、気にする事じゃないよな。

手前のベッドにはまだ未整理の荷物が数多く置いてある。僕はこんなに沢山荷物を送った覚えは無いし、荷物の量からして女性の物、つまり河井さんの物である事は間違いないだろう。

そのまま手前のベッドをスルーし、奥のベッドに向かおうとする

「あれ？ その荷物、奈々瀬君のじゃないの？」

河井さんに止められた。……はて？ なぜ止められた？

彼女は今この荷物が僕の物だと言つた。なぜ？

「え？ この荷物は河井さんのじゃないんですか？ 僕はこんなに沢山送った覚えは無いんですけど……」「…………」

「私はもう荷解きを終わらせたけど……」「…………」

「…………」

「…………」

静寂がこの空間を支配する。お互い顔を見合わせ、同時に視線をベッドの上の荷物に向ける。

……なぜだらう、すつじく嫌な予感がする。そして不幸な事に、僕は「コードタイプだからこの勘が外れる可能性を否定することができます」。

どこかで木刀が木製のドアを貫くような音がするけど、今の僕にはそれを聞いて楽しむ余裕はこれっぽっちも有りはしない。

……とりあえず状況を整理しよう。

1、僕は山田先生から11036号室の部屋を割り当てられ、鍵をもらつた。

2、「この部屋はおそらく一〇三六号室である。

（鍵を確認していないので確定ではないが、河井さんが認めていれる）

3、織斑先生の話によれば、僕の荷物は部屋に残っている。

4、河井さんは、既に荷解きを終えている。

うん。絶対僕のだよね、この荷物。全く身に覚えが無いんだけど。

「あ、あの……」

「……何か？」

「う、うん。もしかしたらこの荷物、奈々瀬君のじゃなくて別の人のかも……」

ふむ、確かに可能性が無いわけじゃない。でも間違えるだろ？  
量的にパツと見分かるような気がするけど……。

それにこれが全部他の人の荷物とも限らない。

「もしかしたらこの中に僕の荷物が混じっているかもしれません」

「……！ それもそうだね」

「他人の荷物をいじるのは趣味じゃないんですけど、この際仕方が  
ありません」

そう言つて荷物の確認を始める。しかしそうである事に気が付いた。

「あれ？隠れて見えなかつたんですけど、タグが付いてますね。  
これなら誰の荷物かすぐに分かりますよ」

「それならすぐに見分けられるね」

荷物にタグが付いている事は不自然な事じゃないし、悪い事でも無い。  
むしろいい事だ。でも何故だろ？……。

脳裏では僕の勘が常に警鐘を鳴らしている。  
それに触れるなと言わんばかりに……。

しかし、一度出した手を引っ込めるなんて不自然なので、結局タグ  
を見てしまつた。

タグには『名前：奈々瀬ユウ』の文字。……ん？ 奈々瀬ユウ？

「こんな荷物、見覚え無いんだけどな……」

次の荷物のタグにも『名前：奈々瀬ユウ』の文字。  
……まあ、荷物がひとつつて訳じやないから。

そうして確認していく結果、とんでもない事実が判明した。

「結局全部奈々瀬君のだったね」

「そんなバカな……」

全ての荷物に僕の名前のタグが付いていた。

これはアレか？ 増殖したのか！？ それともドッキリか！？

そして未だ鳴りやまぬ警鐘。間違い無い。これは特A級危険物だ。  
開けた時点で DEAD END な代物だ。

「奈々瀬君、どうしたの？ 荷解きしないの？」

固まつた僕を見て首をかしげながらそう言つるームメイト。  
開けるしか、ないのか……？ いや、まだ回避手段は残つてゐる。

「……今日は疲れたんでもう後で」

「でもこの量じゃ、早く解かないと後で苦労するよ」

くづつ……なんて優しいルームメイトなんだ。涙が出てくるよ。  
惜しいのはこれが嬉し泣きじやないって事だ。

「……分かりました。それじゃ、始めます」

覚悟を決め、手近にあつたカバンを開けて中にある物を取り出す。

…………コレハ、ナンダ？

出てきたモノは白い服のような物。

ヒント1、「これはEIS学園で身に付ける物である。

ヒント2、何故かズボンが付いていない。

ヒント3、間違つても僕が身に付けるべきではない。身に付けては

ならない!

「奈々瀬君……それって

- 1 -

壊れたブリキのおもちゃのように首を河井さんの方に向けると、  
河井さんは口元に手を当て、ほほを赤く染めてビックリしていた。  
やつたあ、ドッキリ大成功！……なワケあるかボケエ————！！！  
何コレ！？ 何で女子の制服入ってんの！？ 新手のドッキリ！？  
仕掛け人は河井さん！？ カメラは何処だ！？

あ、あの「

「…………はいっ！？」

「封筒、落ちてる」

はつ……取り乱して分からなかつたが、河井さんに指摘されて初めて気が付いた。

だ。

パツと見普通の封筒だ。差出人の名は書かれていない。封筒を開けてもドッキリは起きず、一枚の紙が出てきた。

どりっ。私手作りの制服は気に入ってくれたかな。

わざわざと女子に嫌われてこっちに帰つてきなさい。

そしたらお姉さんが優しく慰めて ア・ゲ・ル（はあと）

君が敬愛してやまない麗しの姉より

つまりはこいついう事だらう。

『女子用の制服を作つて荷物に仕込んでおいた。

その制服を女子が見ればキモイと思うだらうし、仮にそう思われなくとも、女子用の制服についての噂が広まればトトロ学園でマトモに生活できるはずが無い。

とこう訳でわざと喰われに帰つてこい』……と姉はのたまつているのだ。

手紙を読み終え僕は一言、

「……姉、さん……。謀つたな！ 姉さん！…」

やつぱりアンタか！？ 何処まで弟に迷惑かける気だよ！

第一人学園から引き戻すのにどんだけ仕込んだんだ！

この最終鬼畜変態ブランクンシスターがああーーー！

ちなみにユイの仕込みがどれほどの物だったかと言つ

と、

1、書類を改竄して部屋割りに組み込ませた。

2、ユウ専用の女子の制服を作った。（無論、愛情のこもった手作り）

3、ユウに偽装の荷物業者と契約させ、自分が荷造りした荷物の方を学園に送った。

以上をひと冊で完璧にこなした。才能の無駄遣いである。

ちなみにユウが姉の悪質なイタズラを満喫している頃、一夏と篠は

……

「お、お前から希望したのか？ 私の部屋にじりと……」

「俺はユウと一緒にって言つたんだけど、ユウがどうしてもつて言つから……」

「……ユウが？」

「ああ、でもルームメイトが篠で助かつたぜ。幼馴染つてのはいい響きだな」

「…？ ……ああ、そうだな。つむ、幼馴染とは良いものだ（コウには後でお礼をしなくてはならんな）」

……割と良いく感じだった。

shift 1 - 6 「策士策に溺れる?」（後書き）

ユウ「ハメられた……。」「

HAL「さあがの俺でもアレやられると動搖というか、混乱するな

ユイ「さあ、私の元にカムバック!—!」

ユウ「入学初日でまさかの退学!—?」「

HAL「安心しろ。次は『都合主義満載の話だから。  
それとお前が退学したら話にならん』

ユウ「せつですか……良かつた」

HAL「……無傷で乗り切れると思つなよ」「

ユウ「!—?」「

ユイ「次回のタイトルは、『平穏の代償(笑)』だよー。  
いやあ、楽しみだねー!」

ユウ「ちゅう、もつこんな話を入れる気ですか!—? (ヒンヒン)」「

HAL「別に良いじゃん。ちゃんとR-15付けてるんだし(ヒン)  
ヒン)」「

オリキャラ紹介の欄に『河井和花』の情報をひとつそりと追加。

8/29 改稿しました。

## shift 1 - 7 「平穏の代償（笑）」（前書き）

良くも悪くもコウの方向性が決定してしまった話（苦笑）

書いたつて良いじゃない。作者だもの。

「これはマズイだろ」と思つ表現があつましたら、感想版で指摘  
ください。  
すぐに訂正等を行います。

あと、通常の感想等も受け付けています。気軽に書きこなしてください。

## shift 1-7 「平穏の代償（笑）」

Interlude 奈々瀬ユウ

「奈々瀬君はじつとしてていいよ。私が脱がしてあげるから」

「だつ、ダメです……河井さん。こんな事……」

今現在、僕は河井さんに押し倒されている。

普通は逆だらうと突っ込みを入れたいが、今はそんな余裕は無い。河井さんの目は潤み、しかし据わっていて妖しく光っている。頬は朱に染まり、息遣いはハアハアと荒くなっている。つまりビリビリこう状態かといふと

「…………我慢、出来ない。ヤツちやつてもいいよね？」

「全力で拒否します！……」

「答えは聞いてない」

「そんな理不尽な！？ 正気に戻つてください……！」

「ナニヲイッテルノ？ ワタシハショウキダヨ？」「

暴走しているのだ。この雌猫は。  
誰か答えて欲しい。ビリビリになつた？

20分前。

僕のカバンに女子用の制服が入っているという衝撃的な事件の後、河井さんは処理落ちしたかのように動かなくなってしまった。顔は俯いており、表情は読み取れない。

きっと彼女に『女装趣味のキモイ男』と取られたに違いない。

「…………」

「…………その、失望……しましたか？」

「…………」

返事は無い。やっぱり嫌われてしまったか。仕方ない。  
これ以上迷惑を掛けたわけにはいかないし、さっさと荷物を纏めて出でていこう。

「短い間でしたが、お世話に「待つてー」……え？」

何故か河井さんに止められてしまった。エロゲ展開だよねこれ。

河井さんは奥のベッドに駆け寄り、ベッドの下をゴソゴソしている。定番と言えば定番だけど、それ絶対自分のベッドでやる事じゃないよね？

河井さんは田舎での物を見つけたらしく、何かを抱えてこっちに来た。

「…………」

顔を赤くし、目を逸らしながら両手で物を差し出してくる河井さんの姿には、男子としてそそられる物があった。

しかし惜しいかな、手に持っている物との相性がすごぶる悪い。何せ彼女が手に持っている物、それは……

#### 『女装探偵ユージの事件簿』

女装しての潜入捜査を得意とする高校生探偵、小鳥遊悠一たかなし ゆういちが、怪事件が起きたと噂される女子校に潜入し、他の女子と怪事件を解決するという、

いかにもな設定の選択肢形式のノベルゲーム。R-18指定。定価6980円。

うん。突っ込み所満載だね。

でも僕が何を強要されるかすぐに分かつてしまつのが怖い所だよ。

「何でそんな物持つてるんですか？」

「お兄ちゃんが、『溜まつたらコレ使え』って」

河井兄！ アンタ妹になんて物持たせてるんだ！？

それから理由がおかしいだろ！－ 15の妹に言うセリフじゃないよね！？

「……で、コレが出てきた理由を教えてもらつても、構いませんか？」

「そのう……一生のお願い！ ソレを使って女装して欲しいの！」

……ダメ？

僕が持っていた女子用の制服を指しながらそつまづ河井さん。

顔を赤くし、上田遣い + 潤んだ瞳でそうお願ひしていく河井さんの姿には、男子として（以下略）

しかし惜しいかな、言つてゐる事との（以下略）

ハツキリと言おう。僕に女装癖は無い。前にアメリカでやらされた事はあつたが、どうしてもと下座され、かつ人助けの為だつたらイライヤながらやつたんだ。

何で僕が女装しなきゃならないんだ。キモイだけだろう。

……なんて言つたら、この先HS学園で生活していく事ができないような気がした。

彼女が一言、『奈々瀬君は女装癖持ちのキモイ男だ』と言えば僕は即、警察に危険になるかもしれないからだ。

つまりこれは僕がHS学園で3年間生活していくための代償といふ事か……。

これは大きい代償だな。しかし背に腹は代えられない。

「……分かりました。ただしいくつか条件が有ります」

「条件？」

「一つ目、僕が女装した事は絶対誰にも言わない事」

「まあ、それくらいなら。私こいつ見えても口は堅い方だから

「それを持つてる貴女が言える事ですかね？」

彼女が手に持つてゐるソフトを指してそう言つ。

とんでもない秘密をカミングアウトしてゐる彼女を信用するのは勇気がいるな。

「ちょひ……それ酷くない！？」

「……はあ。分かりました。信用しますから。次、一つは僕が女装した写真や映像記録は決して残さない事。音声もバレそつた気がするのでアウト

「えー。」

「えー。じゃありません！ 僕にとつては死活問題なんです！」

「こいつ秘密にしておきたい事は、物的証拠を残さないのがセオリーダ。

記録に残るのではなく、記憶に残る……はちょっと違つか。

「最後に、僕が着た女子用の制服は僕が責任を持つて処分させて頂きます」

「えー！？ せめて制服くらいは……」

「…………聞きたくないですけど、一応聞きます。何に使う気ですか？」

「せつかくだし、私も着るの」

「着るの…？」

「うん。」

「うん。じゃありません！ 僕が困ります…。」

それをやられるとドックペルゲンガーに遭遇するより心臓に悪い。なんでそんな事したがるんだ。普通しないだろ。

「じゃあせめて着替えシーンへいらっしゃ

「却下。」

「ケチ」

「……はあ。条件は以上です。分かったら向こうに向いていてください。……覗かないで下さいよ?」

「はいはい。じゃあ着替えが終わったら言つてね」

「分かりました」

話を終えると間仕切りを出して、僕はすぐに着替えに取りかかった。ノロノロじていると襲われそうな気がしたからなのは言つまでも無い。

しかし女装という行為に関して良い思い出は全く無い。むしろ悪い思い出ばかりな気がする。

ゆえあってFBIの捜査に協力した時は最悪だった。

検挙した犯人の全員が全員、『男だとは思わなかつた』なんて口を揃えて言つていたのだ。

しかも騙されたのに顔はなんだか良いものを見たような清々しさだつた。

罵詈雑言を受けるよりダメージを受けたよ、あれには。

とにかく、下着、ビニール……。上はこことして、下はこのまま

じゃマズイよね。

そういうえば他のカバンを開けてなかつたし、この際だからついでに開けてみるか。

他のカバンを開けてみると、出るわ出るわ、女装用の胸パット、コスメセット、

果ては女物の下着 etc . . . 。

「開けてみる物……か。あのブラコン、僕に何をせる気だつたんだ？」

「うん。帰つたら必ず仕返しじよつ。……倍返しで。

「どうかした？」

「何でもありません」

とつあえず着替え再開。上は胸パットを入れ、ブラを装着。その上にシャツを着る。

下は短パンで何とかなるか。某超電磁砲のお嬢様だつてそつてしまし。

うわ、スカート短いなー。何で女子つてこうこうの好むかな?

ところでこの制服、女子が着ている物とデザインが全く違う。  
色は同じだが、女子中高生が着るブレザーに近い形だ。

IS学園つて制服のカスタムが自由だけど、これでもOKなんだろうか。

スカートを穿いてネクタイを締め、制服に袖を通す。  
マイクは……まあ、最低限で。後は長髪のかつらを付けてポーネー<sup>テ</sup>  
ールにすれば完成。

鏡の前でぐるりと一回転……とかしないから。しないからね？ 所要時間は10分足らず。これはきっと必要最小限の準備だったからで、決して慣れているからではない。そう信じたい。

「……終わりましたよ」

「随分と早かったね。それじゃ早速……ツー？」

河井さんが僕の姿を田にした瞬間、何かとんでもないものを見たかのように動かなくなつた。

「……やっぱり変ですよな。見苦しいものを」

「……綺麗」

「……へ？」

綺麗？ ここの姿が？ まさか。聞き間違いだ。

「すこしく似合つてゐる。体の線だつて細いし、どう見ても女子にしか見えない」

「それは、どうも……」

うん。やっぱり聞き間違いじゃなかつた。

女子にしか見えないと、それ褒め言葉じゃないよね？

「ここの胸だつてすこしく自然。何入れてるの？」

「他のカバンに入つていたパットを……ひうー？」

僕の胸を指さして訊いてきた河井さんが、いきなり胸パットを触つ  
てきた。

ビックリした……。コレって作り物だけど、リアルに圧力掛かるみたいなんだよね。

「……………どうしたの？」

「いえ……その、いきなり触られたのでビックリして」

—— そう、なんだ？

۱۵۰

そのまま揉み続ける河井さん

何たる事  
圧力は慣れてくると今度はぐすくにたしいよ

ପ୍ରକାଶକ

「んっ！？ 河井さん？」  
くすぐったいんで、やめて……っ！？

卷之三

無言で揉み続ける河井さん。なんか怖いよこの人。

ふに、  
ふに、  
ふに、  
ふに。

「はつ……く、くすぐつた……んつ。」

「奈々瀬君……可愛い」

「河井さん？　いい加減にしないと……わつー？」

河井さんの力に耐え切れず、ベッドに押し倒される。  
え！？　何で押し倒されるの？　僕の方が力あるよね？

「河井……さん……？」

「奈々瀬君がいけないんだよ？　もしかして一々扇情的な仕草をするから……」

「えー？　そんな事……」

「あはっ　無意識にしてるの？　もしかしたら奈々瀬君って実は  
女の子だったりして」

「違いますーー！」

「全部脱いだら、本物の胸が出てくるんでしょ？」

「違いますーー！　絶対に有り得ませんーー！」

「奈々瀬君って嘘つきだなあ。やうこいつたまほオシオキしなくちゃ

そして畳頭の文に戻る。以上が20分の間にあつた出来事だ。

「マズイ……」そのままじゅ大事な物を失つてしまひそうで怖い。

「へへへっ！ いい加減にしないと……はうっ！？」

「ダメだよ、じゅとしてなあや」

抵抗むなしく、河井さんに押さえつけられる。  
だからどうして河井さんの方が力が（以下略

「んふふ～」

あれよあれよと言つ間に制服のボタンが全て外され、ネクタイが取り扱われ、シャツのボタンに手を掛けられる。  
別に胸を見られよつが構わない。それで止まるなら抵抗なんてしない。

だが、彼女の目が語つてているのだ。『胸だけで済むと思つなん』  
…と。

『田は口ほどに物を言ひ』とはよく言つた物だ。

一夏、済まない。僕は望まぬ形にせよ、男になるかもしねない。

あまりにも酷い遺言のような覚悟を決めた時、奇跡は起きた。

「ンンンン。

部屋に響き渡るノックの音。来客だ。

「……？ はむぐっ！？」

河井さんがノックに気を取られている内に拘束から脱出。  
そのまま河井さんの口元を押さえ、体勢を入れ替える。

僕が上に、河井さんが下になり、攻守が逆転した。

田を白黒させる河井さんに向かつて静かにするよ<sup>ジ</sup>ジョンスチャーリー<sup>ス</sup>、居留守を使って来客をやり過<sup>ハシ</sup>します。

「「「カー。 いるかー？ ……ビ」」行つたんだろ?」

来客は一夏だつたよ<sup>ウ</sup>だ。 デアの向こうの気配が遠のいていく。 どうやら諦めたようだ。 一息ついた僕は河井さんを解放する。

「ふはっ、バックリした。 奈々瀬君って大胆なんだね」

「違います。 この格好で出たら一夏にバしゃるでしょ」

「……？ 何が？」

まさかもう忘れたのか！？ 僕が男だという事を。 僕が女装しているといつ事を。

「僕をただの変態にしたいんですか？」

「……あー、ごめんなさい」

「はあ。 もう良いでしょ？ 着替えますから、向こうを向いていてください」

「え？ もう終わり？」

「もうすぐ夕飯の時間です」

## Interlude 河井和花

あーあ、もうそんな時間か。

もつと見たかったのになあ、奈々瀬君の女装姿。

私なんかよりずっと可愛かっだし、絶対生まれてくる性別間違ってるよ。

私は奈々瀬君に言われた通り180度回れ右をして待つ。

あれ？ さつきと違つて間仕切りが無いから、そつと振り向けば……

生着替えが見られる。

飽くなき探究心を抑えつける事ができず、私はそつと振り向いて……

Interlude out

Interlude 奈々瀬ユウ

僕が着替えをしていると、突然、

「#〒§ ÷!？」

後ろから奇声が聞こえてきた。河井さんの声だらう。

僕が振り向くと、そこには鼻血を噴いて倒れる河井さんの姿が。  
……つてええつ！？

「河井さん！？ 大丈夫ですか河井さん！」

河井さんは小さこながらも力強い声で、

「……我が生涯に一片の悔い無し」

言い終えるとそのまま氣絶した。幸せそうな、清々しい顔で。うん。何を見たのか分かつてしまふから余計に傷つくな。

……「れじや夕食は食堂では食べられないな。  
河井さんを彼女のベッドに運ぶ途中でわう思った僕は、彼女の夕食を取つてくるために部屋を出た。  
……ひやんと着替えてから。

その後食堂で一夏にバッタリ出くわし、お前何してたんだとか、どうして飯食わずに持つて行くんだとか訊かれたが、一言、

「ルームメイトが貧血で倒れましてね。色々と忙しいんです」と言つたら、

「……大変だな

と納得してもらいました。ある意味間違つてないから別にいいよね。といふか真実を言つても信じてくれないよね。言つ気すら無いし。そんなこんなで散々な日だった。もう嫌だ。絶対に女装なんてしない。

この決意はひと月も経たずに無駄になるのだが、それはまた別のお話。

I  
n  
t  
e  
r  
l  
u  
d  
e  
  
o  
u  
t

「ウ「さて、覚悟は出来ていますか？」

HAL「待て、あれはユイがやつた事だ！」  
俺は何も知らない！」

ユイ「ぐすん……あれは作者がやれって言つから……。」

でないと出番減らすからって……

ユウ「姉さん……。全く、貴方つて人は……。  
さあ、どこから切斷されたいですか?」

HAL「ユイ!?」  
くつ……和花、ユウの姿、どうだった?」「

和花「それはもう天女様のように綺麗で……（鼻血噴いて倒れる）」

HAL「和花！……ユウ、お前は存在 자체が毒だ！  
また犠牲者を出しやがって！」

「…何を…やめ…待て…！」

(報道規制)

「またつまらぬ物を切つてしまつた」

ユイ「次は特別番外編を予定しています。みんな見てねー」

H A L 「俺は.....死なん.....ガクッ」

お知らせ

あらすじとキーワードを変更しました。

8 / 29 改稿しました。

今回は、サザンクロス様の「エレインフィニット・ストラトス／不屈の翼」より、

月光夜明と夕暮太陽をゲストとして出させて頂きました。

サザンクロス様、一人を貸し出して下さり本当に有難う御座います。

個人的にやり過ぎちゃった感が有りますが、太陽への大きすぎる愛  
ゆえ……という事でどうか許して頂きたく思います。

それでは本編をお楽しみください。

## Shift EX-1 「特別番外編 姉弟を立ち直らせた、運命の出会い」

両親の死後間もなく、アメリカにいる叔父の元へ身を寄せる事になつた奈々瀬姉弟。

両親を失つた悲しみに加え、大きな環境の変化もあり、二人の心は少なからずダメージを負つていた。

二人の心をどうにか癒そうとした叔父ではあつたが、一人は叔父に対して全く心を開こうともしなかつた。

二人の心は、事故の日を境に完全に止まつてしまつていた。

しかしある日、停止した二人の心は唐突に再稼働する。  
叔父が一人を連れて入つた一軒の喫茶店、そこにいる二人の人間が、彼らを振り動かした。

この出会いは、もしかしたら運命だったのかもしれない

「……ねえ、叔父さん。今日はどこに連れてくの？」

「……歩きっぱなしで疲れた。お腹空いた」

「もうすぐ着くからもうひとつ我慢しろ。美味しいモン腹一杯食わせてやつから」

10歳の少年、奈々瀬ユウは叔父に対してもややかな、放つておけ

とでも言いたげな視線を向けつつ質問し、15歳の少女、奈々瀬ユイは文句をブツブツ言いながらふらふらと歩いている。

叔父は一人の前を歩きながら、一人を宥め、歩かせている。

しばらくして唐突に、叔父が歩みを止めた。叔父の目線の先には一軒の喫茶店。

喫茶店の名は『Daiybreak's Suic』  
『ダイブレイクス ダイブレーフークス サイクス バー シュウイツ』

彼の行きつけの喫茶店だ。叔父、ユイ、ユウの順に店内に足を踏み入れる。

「いらっしゃい」

「よう、おっさん久しづびり。最近顔出さないから、嫁の手料理食つてるかと思つてたぜ」

女性の声、続いて男性の声が聞こえてきた。

店内には客の他に店員と思われる人が二名ほどいるが、この声は店員達から発せられたものらしい。

女性店員は、髪はショートヘアが入っている紅いセミロングで、瞳の色は髪と同じ紅色。

スタイルは服越しでも十分に優れている事が窺える。

有名ブランド誌の巻頭に出てきそうな美女だ。

しかし、何故か彼女には『漢らしい』という表現がしつくりきてしまつのが何とも謎だ。

男性店員は、髪は銀のロングヘアを翼の形をした髪留めで一つに纏め、瞳の色は髪の色と同じ銀色。

体格は長身瘦躯だがひ弱な印象は受けない。

甘いマスクでこれまで有名ブランド誌の巻頭に出できそうな男性だ。しかし、顔からはどうもイタズラ好きな子供のような印象を受ける。

どちらも若々しく、年齢は推定20代半ばと言つた所。

「おーおー、俺はまだ30代だぜ？ おっさんはひでえだろ。それと妄想はよせ。ちょっと忙しかったんだよ」

叔父は男性店員に向かつてやれやれといった仕草をしながらそう言う。

男性店員は悪びれもせずに、見た目がおっさんっぽいぜ、と漏らしつつ、女性店員に彼らを席に案内するよう指示した。

「済まないなクレンコフさん。御覧の通り今はカウンターしか空いていないんだ。それでも構わないか？」

女性店員は申し訳なさそうにそう尋ねてくる。

昼時とあってか、座席は8割方埋まり、カウンター席しか空いていない。

「……だそうだ。二人ともカウンターで良いか？」

「別にどっちでもいい」

「右に同じ」

叔父の質問に対し、疲れと空腹から適当に返事をする一人。女性店員に案内され、三人はカウンター席に座る。

「ねえ叔父さん。」の人们たちは知り合い?」

程なくしてユウがそう尋ねる。ユイも気になるようだ。  
店内には他に多くの客がいるが、その中でも圧倒的存在感を放つ一  
人の店員。

気にならないはずが無い。

「ああ、そういうや二人は初対面だつたな。こっちの兄ちゃんは月光  
夜明。で、こっちの姉ちゃんは月光太陽ちゃんだ。  
夜明、太陽ちゃん。こいつらは兄貴んtronのガキ達だ。こっちが奈  
々瀬ユイ。んでこっちが奈々瀬ユウ」

「二人とも、ヨロシクな!」

「よろしくな。あとコイツの事は夜明オジサンで構わないぞ」

「おー! 僕アまだそんな歳じゃねエゼ!-?」

「知った事か」

夜明と太陽はそれぞれ二人に挨拶（と声づきの「コント）をするが、  
ユイヒユウは会釈をするに留まった。

「さ、食いたい物を選べ。何でもいいぞ」

叔父からメニューを渡された二人は、メニューを見て一言、

「「メニューに統一感が無い」」

「「ううせえ、ほっとけ」」

夜明は一人の言を一蹴した。しかし一人がそう思うのも無理は無い。この喫茶店はシーフードとスイーツの一枚看板でプッシュしているのだ。

世界広しといえどこの組み合わせでやっている喫茶店はそう無いだろう。

そうなつた理由だが、夜明の好みが魚介類で、太陽の趣味がお菓子作りだつたため、『それならシーフードとスイーツの一枚看板でいいか』という、至極単純な足し算から来ていたりする。

これほど奇抜なメニューでありながら経営を続いている一人の技量は推して知るべし。

しばらくして全員分の注文が決まり、太陽が注文を聞きに来た。叔父は注文しつつ太陽の胸に視線を送り、注文を言い終えると、

「太陽ちゃんは相変わらず綺麗だねえ」

その言葉に何かしらの意図を感じ取つた夜明が釘を刺す。

「おいおっさん。太陽に手エ出すなよ？ 死んでも知らねエからな

「おうおう、お熱いじつで。安心しろよ、俺はまだ死にたくねえから。……ところでお一人さん、子供は作らねえのかい？」

ニヤニヤしつつ二人に質問する叔父。

叔父の意地の悪い質問に対し、夜明は明らかに狼狽しつつ、

「う、うううう、ウルセエ！… ガキの前で訊く事じやねエだろ！」

？

割と初心な夜明に対し、太陽は、

「私はいつでも構わないと言つてゐるんだが……。なぜかこいつは初々しい恋人みたいに毎回毎回避妊避妊とうるをくな。  
クレン」「つさん、なんとか言つてやつてくれないか？」

真顔でそんな事を聞いてきた。間違つても10代半ばの子供に聞かせるセリフとは思えないが、彼女の悩みはそれほどまでに深刻らしい。

コイとコウはこの話を聞いて顔を赤くすると同時に、一つの結論を出していた。

(絶対かかあ天下だ)

しかし実際はどうなのかなと知る由の無い事である。

しばらくして料理が運ばれて來た。

叔父はパエリア、コイとコウはシーフードパスタだ。  
コウは一人の料理と自分の料理を比べてボソリと一言、

「エビが少ない」

「…?」

コウの一言に夜明は肩をビクッとする。太陽はその一瞬を見逃さない。

「まさかお前、つまみ食いしたのか?」

「……まさか」

「目が泳いでいるぞ？」

「……これは生まれつきだ」

「……はあ、済まないなユウ。後でデザートをサービスするから許してやつてくれ」

夫に非難の目を向けつつ、ユウに対して謝罪する太陽。だが、

「あれ？ 本当だったの？ ダメな大人だなあ夜明さんは」

わざとらしくカミングアウトするユウ。

その顔にはうすら笑いが浮かび、人によつてはバカにしたような嘲笑に見える。

実際にはエビの量は他の一人と変わつていなかつたのだが、夜明は味見の量が多すぎたのではないかと思い込み、見事に引っ掛けつてしまつたという訳だ。

数秒経つて夜明は嵌められた事に気付き、顔を赤く染めていく。

「なつ！？ このガキ、嵌めやがつたな！？」

「……ふつ、くくつ、ははははつ！」

「あつははははー！ ガキに騙されるなんていい気味だぜー！」

太陽と叔父は夜明の道化つぶりを見て笑い放題だ。  
ユイはおろか、他の客達までクスクス笑つている。

「まさか本当に騙せるとは思わなかつたから……御免なさい」

「お前、それ絶対に謝る気無いよな？」

ユウは素直に謝るが、その顔からは未だに嘲笑がこぼれていた。  
なぜこんな事をしたのか、訊けば彼はこう答えただろう。

「イタズラが好きそうな人がイタズラされた時の顔を見てみたかつた」

……と、策士の片鱗を見せた瞬間だった。

とんでもないガキだと夜明は思うが、しかし本当にとんでもないのは夜明の方だ。

両親が死んで以来、叔父の前でも笑う事が無かつた二人を笑わせたのだから……。

食事を終え、三人はデザートをつついでいた。太陽お手製のショートケーキだ。

ランチタイムとっくに過ぎ、密の姿はまばらになってしまっている。ユイは太陽と、ユウは夜明と楽しそうに話をしている。

二人に笑顔が戻り始めている。良い傾向だ。

叔父はそう思いつつ、コーヒーを啜りながらコイ達の話に耳を傾けると……

「太陽さん、どうやつたらそんなに胸が大きくなるの？」

「ん？ そんなの簡単だ。好きな人に毎日揉んでもらえばいい」

「へえ～。じゃあこれから毎日コウに揉んでもいいつうとー。」

「ブフウ――――――おいてめえら、なんて事話してんだー…？」

微笑ましい雰囲気を出しながら中身はとても生々しかった。  
あまりの衝撃に「一ヒーを噴く叔父だったが、

「む、女性の会話に割つて入るなんて失礼だぞ」

「叔父さんのエッチ！」

「……そいつあ……悪かった」

女性一人はどうまでもしたたかだった。  
一方、ユウと夜明は至極真っ当な会話をしている。

「夜明さんには、叶えたい夢つてある？」

「叶えたい夢つて言つか、貫きたい想いだな、俺のは。聞きたいのか？」

「うん」

「コイツと結婚する前は『視界に映つた全ての人を守る』つてのが

俺の想いだった」

「……だつた？」

「今はちょっと変わってな、何があつてもコイツを守るつてのが今

の想いだ。

まあ、結婚式の時にコイツに無理やり誓わされたんだけどよ

夜明は困った風に言つてゐるが、満更でもない様子だ。

「ところでコウ、お前が叶えたい夢つて、何だ?」

「その……バカになつて聞いてくれる?」

「バカになんかするかよ。夢を持つのはガキの特権だぜ?」

アンタだってガキだら、と、この場にいる人間は突つ込んだ事だろ  
う。

実際に聞こえたわけではないので心の中で、という事になるだらう  
が。

「僕の夢は、『全ての人たちが幸せに暮らせる世界を作る』事だよ。  
正確にはだつた、だけど……」

「……へえ、いい夢じやねエか。で、なんで過去形なんだ?」

「だつて、僕達にはもう父さんと母さんが……いないから」

夜明は目で叔父に尋ねる。『何があつたんだ』ヒ。

「兄貴達は事故で死んだんだ」

叔父は苦い顔をして夜明に言つた。夜明はそつか、と呟き、

「なあ、ユウ。人はいづれ死ぬ。俺も、おっさんも、お前も。お前

の両親はそれがちょっと早かつただけだ。お前が夢を諦める理由にはならね」

「……でも

夜明の言葉に対し、コウはまだ納得のいく顔を見せない。

「じゃあお前は、両親が生きていないこと幸せになれないのか？ 違うだろ？」

「…………」

「俺は子供の頃孤児院で過ごしてた。両親がいなかつたからな。アイツだつて、俺が出会った時には両親がいなかつた」

夜明はそう言いながらコウから顔を逸らす。視線の先には太陽の姿。少しして顔を戻し、コウに語りかける。

「でもよ、俺とアイツは今幸せなんだ。世界中の誰より幸せだつて思つ。……幸せの形は一つじゃないんだぜ？」

「夜明さん……」

「生きていればお前にも『幸せだ』って思える日がきっと来る。その時が来るまで、強く生きる」

「…………。でも、僕だけが幸せになる訳にはいかないよ。だってそれじゃ、夢が叶えられないから」

「なら、強くなければ良いんじゃないか？ 皆の幸せを守るためによ

「僕に……できるかな？」

「時間ならたっぷりあるだろ？ 努力すれば、きっと叶えられるさ」

「……うん。僕、頑張るよ。強くなつて、皆の幸せを守れるようになら」

「上出来だ。頑張れよ、コウ」

「うそー！」

どうやら話は纏まつたらしい。店内の時計の針は午後一時を指している。

いつまでもここに座る訳にはいかない。

「さて、そろそろ帰るか」

叔父がユイヒコウに切り出す。一人は領き、席を立つ。

「おっと、もうそんな時間か。太陽、会計頼む」

「ああ。じゃあクレンコフさん、伝票を預かります」

太陽が伝票を預かった直後、叔父はポツリと夜明に言葉をこぼした。

「……今日はありがとな」

「何だよ改まつて。氣色悪いな」

「そつ言いたい気分なんだ」

「……何かあれば力になるぜ？」

「なら、毎日こつらの面倒を見てくれ」

「……そいつあ勘弁してくれ」

夜明の引き攣つた顔を見て、叔父は笑いながら会計に向かつ。会計を済ませ店を出る直前、ユウが夜明に尋ねた。

「ねえ夜明さん、また来てもいい？」

「へッ、テメエみてエなガキ、こっちから願いさげぶしつー？」

言い切る前に夜明の頭に衝撃が走り、鐘を撞いたような音が鳴り響いた。

夜明が振り返ると、そこにはフライパンを持つて仁王立ちしている太陽の姿。

「大事なお客様になんて事を言つていろんだお前はー！」

「……でも」

「でもじゃない！ そもそも密とトラブルを起こすのはいつもお前だろ？ その度に客に謝ってきたのは私なんだぞ？ お前がそんな事言えた義理か！」

「……はい、仰る通りです」

太陽に怒鳴られ小さくなつていく夜明。

その図はまさしく怒鳴られる子供と叱る母親のそれだ。

(やつぱりガキだコイツ)

その場に臨むさせた全員が揃いも揃つて同じような感想を抱いたのは言つまでも無い。

「じつやう、本格的なお仕置きが必要なようだな」

「……お仕置き……」

「今夜は寝かさないからな。覚悟しておけ」

それを聞いた夜明は顔を真っ青にしていく。  
普通なら男たちが血の涙を流して狂喜乱舞するようなセリフだが、  
今夜明にとっては恐怖という感情しか湧き上がりないセリフらしい。

「あはは……ほじほじしてやれよ太陽ちゃん？　じゃあな夜明……死ぬなよ？」

「せいつあ……無理かもな」

「またのじ来店、お待ちしております」

「……まあやつをあやしたー」

三人は楽しそうに店を出て行く。しかしコイとコウの顔には入店前のような暗さは無い。

その田には希望の光が、夢への情熱が宿っている。

「ねえコウ。今日は一緒にお風呂に入ろうよー。」

「ヤダ。僕はお風呂用の玩具じゃないよ?」

「むー、コウのこけず。じゃあ胸揉んでよ」

「……僕を体のいい道具か何かと勘違いしてない?」

「してなこよー。コウが一番好きだから言つてるの」「……」

「姉さん。それは社会的にダメな考え方だからね? 分かってるよね? 抱きついてないで返事してよ姉さん」

「聞こえない聞こえないーー」

「……はあ」

繰り返し言つが、その田には希望の光と、夢への情熱が宿っている  
……まぢである。

「いい眼してたな。ユウは特に

「何だ?」

「なあ

店を閉めた後、夜明と太陽は店内の掃除をしながら語り合つ。  
……常連が連れてきた、一人の子供の事を。

「昔のお前によく似ていた。あれはきっと将来大物になるな」

「……そ、うか。せ、うとい、あ、いつの夢」

「心配ならお前が鍛えてやつたらどうだ?」

「……笑えないジョークだな」

「せ、うか? 最近平和だつたからボケてるんじゃないのか?」

「あいつなら大丈夫だ。しっかりしてそうだからな」

「お前みたいに楽観的でない分、しっかりと先を見通していくそうだ  
しな」

「……バカにしてないか?」

「何だ、自覚があるのか?」

太陽に切り返され、夜明はうつり、と言葉に詰まり、テーブルを拭く  
作業を中断する。

どうやら夜明にもそれなりの自覚はあつたらしく。  
分が悪いと見た夜明は話を逸らした。

「ところで太陽。お仕置きの件だが、あれは性質の悪い

たち

「冗談だろ……とでも言いたいのだろうが、そ、うまいかんぞ」

「…………」

思考を先読みされ、夜明は冷たい汗が背筋を伝つていぐのを感じた。

「いい機会だからな。一晩じつくりと矯正かきまつりしてやる。ありがたく思え」

「おい、ルビが違くないか?」

「ん? 何を言つている。これで合つているぞ」

「……一応、念のために聞いておく。手加減は?」

「したら意味が無いだろ? 最初から最後までクライマックスだ」

「……これで死んだら俺は世間の笑い物だぜ?」

「安心しろ。私とて鬼ではない。ほら、好きなだけ使え」

そう言って太陽は、得体の知れない液体の入った瓶をざつさりとカウンターに置く。

「これだけあれば一晩軽く持つだろ?」

「……俺を体ていのいい道具か何かと勘違いしてないか?」

「そんな事は無い。私はお前を魂の底から愛している」

「嬉しいね。涙が出てくるよ」

そう言いつつも、夜明の顔は盛大に引き攣っていた……。

Shift EX-1 「特別番外編 姉弟を立ち直らせた、運命の出会い」

ユウ「サザンクロス様。本当に申し訳御座いませんでした」

HAL「ん? なに空に向かつて謝つているんだ?」

ユウ「……よくそんな平然としていられますね」

HAL「ちなみに夜明と太陽だが、原作より10歳くらい年取つて、かつ結婚している。という設定だ」

ユウ「何を訳のわからない事を……」

HAL「あと、あの後夜明と太陽がした事だが……」

ユウ「そうー あの一人に何言わせてるんですか!/? 明らかにアツチ方面としか思えませんよ!」

HAL「結局太陽は夜通しで『接客業のマナー』を夜明に叩き込んだらしい」

ユウ「夕暮さんが取り出したあの液体は?」

HAL「ただの栄養剤だ。……何を期待してたんだお前?」

ユウ「いえ……何でもありません」

ユイ「次回は本編更新予定だよー 楽しみに待つてねー」

HAL 「感想等は隨時募集中だ。書いてくれると嬉しいぞ。  
あとザンクロス様、これからも連載頑張って下さい」

8/29 改稿しました。

## shift 2・1 「策士、動く（前編）」（前書き）

この話から三人称主体で行きます。でも結構難しい（汗）執筆が全然進んでません。読者様申し訳ありません。

あと余談ですが、まどか マギカ最終話まで見ました。とりあえず感想を。

「コレ見てたら自然と涙が出てきました」

いやホント、泣けるアニメですね。

／まどか様マジ女神！／

と言ひ訳では非まどか教に入信し……ん?  
どうしたんだいシャル? え……? ちょつ……やめ……。

AM 5:30

ユウは昨日からあてがわれている自分のベッドの上で目を覚ました。河井さんが貧血（実際はそんな単純ではない）で倒れてから一晩が経ち、現在は朝の5時半。

その後彼女はすぐに復活したが、夕食を食べると「今日はもう疲れた～」と言つてさっさと寝てしまった。

しかし、精神的疲労はユウの方が遙かに大きい。

なにせ女子に強か……襲われそうになり、河井さんが寝た後に訪れた他の部屋の女子に挨拶と握手を繰り返し、アナハイムから送られてきたデータの確認まで行い、ベッドに倒れる様に寝たのは日付が変わつてから。

これが一週間も続こうものなら、確実に体を壊すだろう。

しかし、とりあえずは河井さんより早く起きる事ができて、ホッとするユウだった。

万が一寝過ぎてしまうのなら、昨日のように襲われる可能性があるからだ。

それは男にとって嬉しい事ではあるが、今のユウにとっては恐ろしい事でしかない。

「……やつれと準備するか

ユウが隣のベッドに目を向けると、まだ河井さんはぐっすりと寝ている。

まだ彼女の起床時間には早いようだ。

ユウは河井さんに配慮しつつ、登校準備を始める。

カーテンは開けず、物音を極力立てないように着替えを始める。

ちなみにユウのパジャマ、動物の絵がたくさん描かれたものすぐ可愛い”女子用”のパジャマである。

昨日着替えようとしてカバンを探つてみたら、当然のようになにコレしか入っておらず、小一時間迷った挙句、「着ないよりはマシか」と嫌々ながら袖を通したのだ。

制服、パジャマが女子用。下着も文物、カバンの中身がどうなつているのかなど想像するのは難しくない。

カバンの中には男物が全くと言つていいくらい入っていない。ユウにとつては非常に珍しくない状況だ。

(これじゃいろんな意味で精神がおかしくなりそうだよ……)

とりあえず一日も早く男物を揃えないと厳しい事になりそうだなと、ユウは深々とため息をついた。

AM 7:00

ユウと一夏は寮の廊下を歩いている。お互いのルームメイト、河井さんと篠も一緒にだ。

これから朝食を食べに行くために食堂に向かっている。

「おはよう、ユウ。……顔色が良くないな。どうしたんだ？」

「おはようございます一夏。昨日はよく眠れなかつたんですよ」

「む、それはいかんな。今週末辺りに快眠グッズを買ってやるうか？」

「あ、篠ノ之さん、私も付き合つよ」

上から一夏、ユウ、篠、河井さんの順だ。ユウは苦笑しつつ、

(河井さん、貴女が僕を襲おうとしなければ十分寝れます)

……と心中で突っ込んだ。決して言葉には出さない。

沈黙は金。要らない事は喋らないのが一番だ。

一行は食堂に着き、それぞれ欲しい物を選んで取つていいく。所謂バイキング料理で、和・洋・中、何でも一通り揃つている。

一通り取り終え、続いて空いている席を探す。

丁度4人掛けのテーブルが空いていたので、自然とそこに座った。ユウの左には一夏、対面には河井さん、左斜め前には篠。ちなみに朝食は全員和食。日本人の性<sup>さが</sup>……といった所だろうか。

食事を始める四人。周囲には河井さんと篠をうらやましそうに見つめるギャラリーが集まり、ユウと一夏の一拳手一投足に熱い眼差しを向けている。

「……一夏、昨日あれだけ盛大に啖呵を切ったんです。まさか、勝算が無いという訳では無いですよね？」

ユウはじょうゆを差し出したながら一夏にそう切り出す。

「サンキュー。……いや、あれは勢いというか、男の意地でだな……」

しうみを受け取り、納豆に掛けながらやつて一夏。

「普通に戦つたら君は負けてミス・オルコットの奴隸になってしまいますよ？」

まあ、君にそういうた嗜好があるなら口出しませんが

ユウは一夏からしうみを返してもらしながら言つ返す。  
最近の女尊男卑の影響でそういうた嗜好の持ち主が増えているらしく。

無論ユウにはそういうた嗜好は一切無い。

「冗談じゃない。俺はそんなの『ゴメンだぜ？』

一夏は苦虫を噉み潰したかのよつた顔をする。  
一夏にも隸属嗜好というものは無いらしく。

「なら、勝てるよつに死に物狂いで努力する」とですね

「ならお前が教えてくれれば」

「一夏、僕にも都合といつ物があるんです。手伝えるなら喜んで首を縊に振っています」

「……そつか。悪かつた」

ちなみにユウの都合だが、それは『一夏の特訓相手が篠になる事』  
だつたりする。

あくまでユウは『自然にそつなるよつに誘導するつもつらしく』。

外野では、コウと一夏のやり取りを見た女子たちがキャーキャーと騒ぎ合っている。

それに気づいたユウが聞き耳を立ててみると、「何も言わずにしょうゆを渡し合つた！？」だの、「あの二人、心で繋がっているのね！」だの、「もしかしてこれが究極の夫婦愛！？」だの、既にユウと一夏は恋人同士から夫婦にランクアップしているらしい。

結構腐女子の多いEIS学園一年女子なのであつた。

AM 11:00

現在三時間目、山田先生がEISの基礎知識を教えている。

「というわけで、EISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギー・バリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、EISは常に操縦者の肉体を安定した状態に保ちます。

これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどが挙げられ」

「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられているみたいでちょっと怖いんですけど……」

クラスメイトの一人が不安げな面持ちで尋ねる。ユウに言わせれば、

「実際は目紛るしく変化する環境から体を守っているんです。

人の体は激しい環境の変化に追いつけません。平地から一気に山頂まで登った時や、水面から水底まで一気に潜水した時、体はその急激な変化に追いつけず、失調したりするでしょう？ 高山病なんか

がいい例です。

元々 I.S は宇宙用に開発されていたのですから、地上から宇宙への環境の変化に十分に対応できるように作られているのでしょうか。宇宙という地上と全くかけ離れた場所で地上のように行動できる。それを考慮し、備えられたのが生体補助機能と言つた所です」

おそれらくこれが優等生の回答。だが山田先生は……

「そんなに難しく考へる事はありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブランジャーをしていますよね。

あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出るといつ事は無いわけです。

もちろん、自分に合つたサイズの物を選ばないと、型崩れしてしまいますが」「

素直に説明すれば誤解されずに済むのに、とコウは思つた。

しかもそれは女子校専用のネタ。I.S 学園は今年から共学（男子一名）なので、そのネタはいさか男子への配慮に欠けている、と評価せざるを得ない。

コウは教科書に目を落とし、一夏は顔を赤くしている。一夏と田が合つた山田先生も顔を赤くしている。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君と奈々瀬君はしていませんよね。

わ、分からぬですよね、この例え。あは、あははは……」

山田先生の言葉に対し、コウは、

「いえ、つい昨日したばかりです」

……なんて口に出して言つてはいけない。言えれば変態扱いられるのは田に見えている。

むしろ、今この瞬間ユウが一番気になつてるのは河井さんの態度だ。

昨日ユウの女装を見た河井さんがおかしな反応をすれば、ユウの方が色々とマズくなる可能性があるからだ。

山田先生がまた説明を始めて、他の女子が彼氏彼女がどうこうとか尋ねているが、それよりも河井さんが暴発するかしないか、そればかり気になつて仕方が無いユウであった。

しばらくして二時間終了のチャイムが鳴った。

結局ユウは授業終了まで河井さんが気になつて集中できなかつた。しかも振り返つても彼女の様子は授業前と全く変わっていなかつたところオチ。

この結果にユウは何とも言えない雰囲気でため息をつく。

そして一夏の方は、千冬さんの実体を女子にバラそうとしたので、突如現れた千冬さんから情報漏洩防止のために出席簿アタックを食らっていた。

千冬さんはそう言えばと一夏に、

「ところで織斑、お前のHJDが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそつだ」

「？？？」

唐突に言わされたので一夏はさっぱり理解できていません。

しかし、千冬さんの言葉の意味をしつかりと理解できている女子たちは驚愕している。

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に！？」

「ああ～、いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

女子の反応に未だ？マークを浮かべる一夏。

見かねた千冬さんがため息混じりにつぶやく。

「教科書六ページ。音読しin」

「え、えーと……」「

長くなるので纏めて言わせてもらひうど、

1、ISの最も重要な部分であるコアは467個しか無い。

2、ISのコアは篠ノ之博士しか作る事ができず、  
当の篠ノ之博士はコアを作る事を拒否している。

3、減る事はあっても増える事の無いコアは、  
世界各国に割り振られ研究されている。

本来ならば国や企業が認めた人間でなければ専用機を持つ事は出来ない。

ただし、世界でただ一人、男でありながらISを操縦できる織斑一夏。

彼は例外という事らしい。

「良かつたじゃないですか一夏。これで君も467分の1になれますよ」

「ああ、そう言ひ事か。でも確か専用機つて実力が無いと持てないんじや……」

「お前の場合は状況が状況だからな。データ収集を目的として専用機が用意される事になった。分かったか?」

「な、なんとなく……」

どうやら一夏の機体は原作通り到着が遅れるらしい。  
そう感じ取ったユウは、計画通り、一夏と篠の特訓イベントの下地作りを進める事に決めた。

ちなみにこの後、篠ノ之博士と篠の関係について教室で一悶着あつたのだが、特訓イベントに必要な事なのでえてスルーするユウであつた。

PM 12:20

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようと思つていなかつたでしょうけど」

昼休みに入つてすぐ、一夏の席に坐ってきたセシリアはつぶつと手を腰に当てるポーズが様になつているのは昨日と変わり無い。

「良かつたじやねえか。」これでお前と対等にやつ合へるぜ！」

「……ふふつ、ふふふふふつ」

一夏の言葉を聞いたセシリアは口元手を当て嘲笑した。

「……何が可笑しい？」

一夏は彼女の意図を測りかねている。しかしコウは眞然だらう、と思う。

一夏とセシリアでは経験の差が有り過ぎるので。

「まさか、専用機を手に入れたらりこでわたくしと対等に戦えると思つていらっしゃいますの？」

「どういつ事だ？」

「一夏、君はIRSなんてほとんど触った事が無いんでしょう？ 対して彼女は入学前から長くIRSに触れ、操縦している。彼女の方が一日の長、経験で勝つているんです。

さすがに経験までは埋める事はできません。彼女のアドバンテージです」

「……あ」

「ウの言葉を聞いてハツとする一夏。

「たかが一週間程度の付け焼刃で勝てる程、わたくしは甘くなくてよ」

セシリアの言葉に一夏はぐう、と唸り、対照的にセシリアは勝ち誇った笑みを浮かべている。

(これじゃ一夏が惨め過ぎるな)

あまりの惨状に、見るに見かねたユウが一夏を援護する。

「…………ミス・オルコット。余裕と油断をくればれも履き違えませんよ！」

相手を見下してばかりいると足元を掬われますよ？」

僕のようにな、とユウは最後に付け加える。  
セシリアは顔を不快そうに歪めながら、

「無論ですわ」

と言つて何処かへと歩き去つて行つた。

## shift 2-1 「策士、動く（前編）」（後書き）

ユウ「そういうえば僕の視点がメインとか言つてしませんでしたっけ？」

HAL「色々と試したいんだよ、初めてだから」

ユウ「更新頻度が少なくなつてますか……」

HAL「やる事が多くて時間が割けないんだ」

ユウ「…………そりですか」

HAL「でもせめて一週間に一話は更新したいな

ユウ「頑張つて下さい」

ユイ「次は後編だよ　みんな見てね～」

お知らせ

2011/5/14

一部改稿

8/29 改稿しました。

*Shift 2-2 「策士、動く（後編）」（前書き）*

今回の話は難産でした。三人称難しい（汗）

皆さんはGW中何処かにお出かけになりましたか？  
自分は大学の課題があつたので家籠りです。

今年は日光東照宮とか華厳の滝辺りが大穴場だとか言う報道が一周  
間前くらいに有りましたが、実際どうだったんでしよう？

……さて、課題やるか。

## shift 2-2 「策士、動く（後編）」

「……や、一夏、篠、一緒にお匂い飯を食べに行きましょうか？」

セシリアが立ち去った後、ユウは場の雰囲気を変えるため一人にそう提案した。

二人から反論の声は上がらない。

「あっ、あの…」

ユウ達が教室を出ようとすると、後ろから声が掛けられた。ユウが振り返ると河井さん以下数名の女子が立っている。

「私たちも一緒に食べて良いかな？」

河井さんがユウに質問する。  
おそらく彼女が代表という訳では無く、面倒事を押しつけられたといつた所だろうか。

ユウとしては特に断る理由が無いので、一夏と篠に同意を求める。

「……だ、そうです。一人とも構いませんか？」

「俺は別に構わないぜ」

「…………」

大勢で食べると楽しいよな、と言わんばかりに同意する一夏。  
しかし篠としては一夏を独占できない状況は非常に面白くない。  
筈は一夏をジト田で睨むが、ユウの目が、

(後で何とかします)

と言つてこるような気がしたので、

「……私も構わん」

そつまを向きながらも仕方なく同意した。

PM 12:30

教室から食堂に移動し、現在は席に着いてにぎやかに食事をしている。

唯一人、幕だけは仮面だが。

「そつまは助かつた。ありがとな」

一夏は食事を始めて開口一番、コウにそつまつた。  
そつまのセシリアとの口論の件だらう。

「感謝する」があるなら、彼女に勝てるよう努力して欲しいもので  
す」

余計な御世話だと言わんばかりに、全くもつて冷たい一言を返すコ  
ウ。

しかしこれは一夏のためを思つてこそだ。

「うぐう……相変わらず容赦がねえな。どうして俺はけなされてば

かりなんだ?「

ユウの辛辣な一言にがっくりと頃垂れ、悩み始める一夏。ユウはやれやれ、とため息をつき、諭すよつて一夏に言った。

「一夏、君なら彼女に勝てるかもしれないから言つてるんです。可能性が無いならこんな事言こません」

そんなユウの一言に、周りの女子は「しゃってシンデレ!?」といった感じの反応をしているが、間違つてもユウはシンデレでは無い。ただ単に一夏の事を弄んでいるだけである。

「やうかよ……。なあユウ、本当にこの事教えられないのか?」

縋りつくような手をして尋ねる一夏。それでもユウは動じない。

「こればかりは仕方あつません。諦めてください。それに……」

「それには?」

「僕以外にも適任者がいるじゃないですか」

「適任者って……まさか千冬姉とか言わないだろ?」

「違いますよ」

適任者。それを聞いて一夏が最初に思い浮かんだのは自分の姉。田の前に居るだろ?と、とユウは一夏の答えを苦笑しつつ否定し、筈は殺氣の籠もった視線を一夏に向けてくる。

「あれ？ 違うのか？ ジャあ誰なんだ？」

筠の視線に全く気付かず、唸りながら考え込む一夏。それを見たコウは視線を筠に向け、一人の人物の名前を出す。

「筠なら一夏を正しく導けると思いますよ」

それを聞いた筠は一瞬肩をビクつかせるが、そしらぬふりをしてご飯を食べ続ける。しかし内心では、

（コウ、よくやった！ お前は最高の友だ！）

友人の鶴の一言に狂喜乱舞していた。

一方、一夏は成程と頷き、とりあえず筠に尋ねてみた。

「他に頼れる人いしないしな……。筠、教えてくれるのか？」

「む……お、お前がどうしてもと、言つたら……教えてやつてもいいぞ」

筠はそつまを向きつつも、ちらちらと一夏を見てそう答える。

「わうか。じゃあ頼む」

筠の返答を肯定と受け取った一夏は、改めて筠に頼み込んだ。

当然ながら筠としては断る理由がない、といつか断る訳にはいかない。

「し、仕方ないな。なら放課後、剣道場に来い」

「え？ でも俺は工事の事を

」

「いいから来い！」

「わ、分かった」

どうやら話は纏まつたらしい。一夏はいまいち納得していないうつだが、篝はルンルン気分で踊りだしそうな雰囲気だ。一部始終を見たユウはニコニコ顔だが、

（予定通り。これで一夏は篝が勝手に鍛えてくれるだらう）

その笑顔は100%善意という訳ではないようだ。

その後も食事は続き、15分程経った頃、

「……さて、僕はそろそろ行きますね」

ユウがそう言つて席を立つた。

「もう行くのか？」

一人にするな、と言いたげな視線を向けながら一夏はユウに訊ねる。

ユウは一夏の視線をスルーしつつ、

「ちょっと行く所がありますから。それじゃ皆さん、僕は先に失礼します」

女子たちに一礼し、ユウは食堂から姿を消した。

放課後。ユウは現在情報処理室の前に来ている。

手には情報処理室の鍵。昼休みに山田先生から借り受けた物だ。別に千冬さんから借りても良かったが、あの人は「軟弱者!」とか言いそうだったので止めた。

一夏が「昼休みどこ行つてたんだ」だの、「これからどこ行くんだ」だの、ユウを質問攻めにしようとしたが、幕に剣道場へと引き摺られる事になりあえなく失敗。

悠々とここに辿り着いた訳である。

「……何故だらう、言い様の無い不安を感じる。もつもと済ませよう」

鍵を開け、室内に入る。室内には数多くの情報端末が整然と並べられている。

ユウは入口に近い端末の前で止まり、端末を起動させる。

程なくして端末は起動し、ユウは椅子に腰かけ作業を開始する。山田先生から借り受けたフラッシュメモリをスロットに差し込み、データを読み込む。

画面に映し出されたのは、試験官を相手に戦うセシリヤの姿。この姿を見て萌えるためにわざわざ借りた訳では決して無い。

戦場においては情報の有無が勝率を左右すると言つて良い。

敵の情報を知つているのと知つていないのとでは、知つていたほうが遥かに有利だ。

つまりはそういう事。

ユウにとつて、戦つといつ事は『戦闘する』だけではない。

己を含む味方の情報、敵の情報、戦場の情報。様々な情報を収集、処理し、緻密な戦術プランを構築していく。それも一つではなく、いくつも。それがユウのスタンス。

直接戦闘の前から既に戦いは始まっているのだ。これを一般的には情報戦と呼ぶ。

敵を知り、己を知れば百戦殆からずとはまさにこの事である。

一時間ほどセシリ亞の戦闘シーンを見て、ユウは片付けを始める。メモリを抜き、端末の電源を落とす。

情報処理室を出る直前、ふとユウは室内を見渡した。人の気配は無い。

「まさか……ね」

誰もいない事を確認し、ドアを閉めて施錠。そのまま去つて行つた。

施錠され、誰も居ないはずの情報処理室。その奥の机の下。そこに一人、気配を殺し、息を潜めて隠れていた者がいた。

「ふう、危なかつた。まさか勘付かれるなんて、私もまだまだね」

潜伏者はユウが座っていた席に移動し、電源が落ちた黒いディスプレイを眺め、その顔に笑みを浮かべる。  
まるで新しい玩具おもちゃを手に入れた子供のような、無邪気な笑顔。

「奈々瀬ユウ……ね。ふふつ、面白そつな口じゃない」

そう言つて潜伏者は予備の鍵を使い、情報処理室から立ち去つて行つた。

その手に一つのフラッシュメモリを持ちながら……。

shift 2-2 「策士、動く（後編）」（後書き）

ユウ「最後に出てきた人がすつぐく気になります」

HAL「気にするな。すぐに会える」

ユウ「そうですか。ところで僕の黒さ、何とかなりませんかね？」

HAL「スーパー口ボット系の熱血展開が好きなら別に構わないぞ」

ユウ「どうみち最後はそうなるでしょう」

HAL「次回からクラス代表決定戦に入る」

ユウ「いよいよ戦闘シーンですか？ また難産なんですね？」

HAL「詳しく述べ言えん。期待せずに待っていてくれとしか言えんな」

お知らせ

2011/5/14

一部改変。

8/29 改稿しました。

## Shift 2 - 3 「秘策」（前書き）

話の分量を見誤りました。orz  
戦闘を期待していた読者の皆さま、本当に申し訳ありません。

あと、何時の間にかお気に入り登録数が100件になつていきました。  
処女作であるにもかかわらずこれほど多くの読者の皆様に愛読して  
頂き、感謝の気持ちで一杯です。  
更新頻度は作者の力量ゆえに低いですが、これからもこの作品を愛  
読して頂けると嬉しいです。  
感想を頂けるともっと嬉しいです。

では、本編をお楽しみください。

## shift 2・3 「秘策」

時間は嵐のよつと過ぎ、翌週の月曜日。セシリ亞と一夏の対決の日が来た。

昼休み、最早恒例となつた一夏とコウの食事会。その席でコウは一夏に尋ねる。

「どうしたんですか一夏、喉に小骨が突つかかったような顔をして」「コウ、先週言つたよな。笄なら俺を導いてくれるつて。言つたよな？」  
笄の奴、ISの事について何も教えてくれないんだぜ？ どういう事だ？」

「ずすい」と顔を近づけ、一夏はコウを問い合わせる。  
一夏の隣にいる笄は申し訳なさそうに顔を逸らしている。  
対するコウは涼しい顔で、

「僕は笄なら君を導くだらうとは言いましたが、ISの事を教えてくれるだらうとは一言も言つてません」

コウの返答に一夏は呆然とし、ハッとしたと思つたら今度は疑惑の目を向けてきた。

「コウ、まさか俺を騙したのか？」

一夏の視線にコウはやれやれ、と首を横に振り、

「騙すなんてとんでもない。じゃあ逆に聞きますけど、君はI.S.について説明された場合、正しくその意味を理解できますか？」  
P.I.  
Cや武装の特性、対I.S戦の戦術理論 etc. . .」

「……すまん。俺が悪かった」

自分に非があれば素直に謝る。一夏はそういう男だ。  
ユウは水を飲んで一息つき、再び話し始める。

「いくら知識を詰め込んだ所で、君が理解しなければ無いのと一緒にです。それに結局専用機が届きませんでしたから、実践も無理でしたしね。

ついでに言えば、I.S.がいかに強力と言えど、扱うのは生身の人間です。君自身が強くなるというのは決して無駄ではないはず……」

「……まさかそこまで考えててくれたのか？」

「さあ？」

実際は籌と特訓させたかっただけだ、なんて決して言つ訳にはいかない。

ユウはそれより、と話を切って、一夏に対しごつ告げた。

「一夏、大事な話が有ります。この後屋上に来て下さい。一人きりで話がしたい」

「ああ、分かつた」

『はあ！？！？！？』

一夏は普通に返事を返したが、ある女子は顔を赤らめ、ある女子は鼻血を噴き、ある女子はカメラや集音機の準備に取り掛かるなど、食堂はしばらく騒然となつた。

篝は魂が抜けたようにその場に呆然と座る始末。原因の一人は結局どうしてこうなつたのか知らぬまま食堂を後にしたのだった。

10分後、二人の姿は屋上にあつた。他に人影は無い。扉の奥にはおびただしい数の女子生徒がいるのだが、当の一人は特に気にしていない。

「で、大事な話って何だ？」

「放課後のクラス代表決定戦の事です」

ユウがそう言い放つた瞬間、扉の奥の気配が綺麗に消えた。まあ、十代女子とはそういう生き物だ。

ユウは苦笑しつつ、声を小さくして一夏に語りかける。

「一夏、ミス・オルコットに負けたくはないですよね？」

「当たり前だ。負けて奴隸になるなんてまっぴらゴメンだぜ」

真剣な顔で答える一夏。悲痛と言つても良いだろう。

一夏の答えを聞いたユウは、一夏同様真剣な顔をして切り出した。

「なら、彼女との戦い方を教えます」

「なつ……あるのかー?」

ユウの一言に一夏は目を見開き、信じられないと言った表情で聞き返した。

ユウは頷き、小型端末を取り出して話を進める。

「ええ、見てください。これまで集めた彼女に関する情報です」

端末の画面にはセシリアと彼女のIIS、ブルー・ティアーズの情報がびっしりと映し出されている。

「まさか……一週間ずっと集めてたのか?」

「そうです。幸い君のIISの情報はまだ向こうに全く入っていませんから、情報という面では君の方が有利。経験は情報と戦術で覆しましょう」

「確かにこれはありがたいけど、俺はまだIISなんて口クに触つてもいいんだぜ? 僕に戦術云々なんて……無理だ」

ユウの口元に満ちた言葉を聞いてなお、一夏は悔しそうな表情を浮かべる。  
しかしユウは右手の人差し指を立て、一夏に告げた。

「問題ありません。君でも彼女に勝てるとつておきを用意しました」

「…………え!?」

一夏は有り得ないといった表情をユウに向けた。

「良いですか？一夏。」

」

ユウは一夏の方に顔を向け微笑み、口を一夏の耳元に近づけ、説明を始める。

それは天使の導きか、悪魔のさやきか。答えは神のみぞ知る……。  
一通り説明をし終えたユウは、口を一夏の耳元から離した。  
ユウの目に映つた一夏の顔は、説明前とほとんど変わらない、厳しいものであった。

「ユウ、こくらなんでもこゝまで巧く行くとは……」

「信じる信じないは君の勝手です。勝手に戦つて負けたとしても僕は君を咎めたりはしません。……犬扱いくらいはしますが」

ユウの手厳しい言葉に一夏はため息をつく。

「そんな齧しみみたいな事言われたら信じるしかないじゃないか

「お気に召して頂き恐悦至極に存じます」

ユウはやつまつて執事のように恭しく一礼し、その姿を見た一夏はただただ苦笑するしかなかつた。

再び時間は過ぎ去り、放課後。第三アリーナ・アピッチー一夏、第、  
ユウの姿があつた。

「……来ないな」

「……来ませんねえ」

「…………」

上から順に一夏、ユウ、篠の順だ。  
何が来ないかと言つと、一夏の専用機が未だに来ないのだ。

「IJのまま専用機が来なかつたら、不戦敗になるかな?」

「なつ……けしからん!! 戦いもせずに敗北を認めるなど、男として恥ずかしくは無いのか……」

「ぐおつ…? ゆ……よせ篠……く、首が……」

「千冬さんの事です。何が何でもIJに専用機を引っ張つてきます  
よ」

一夏が吐いた弱音に篠が激怒、そのまま一夏の胸倉を掴み、締め上げる。

ユウは一人のやり取りを特に気にすることもなく、あくまでマイペースに振る舞つてゐる。

「おつ、織斑くん織斑くん織斑くんつー」

一夏が篠に意識を飛ばされやつになつた瞬間、ペットに山田先生が現れた。

篠は山田先生が現れた瞬間、自分の行為を自覚し、頬を紅く染めて

神速の如き速さで手を引っ込めた。

篇から解放された一夏は酸素を求めてぜえぜえと喘いでいる。

コウは何やら考え込んでいたが、駆け寄つて来た山田先生に対して落ち着くよつと言葉を掛ける。

「山田先生、とりあえず落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「は、はいっ。すゞゞはゞゞ、すゞゞはゞゞ」

「そ」で息を止めて

۱۰۵

## 「お腹に力を入れて」

「んつ」

「お腹に力を入れたまま浅く呼吸。はいっ、ひい、ひい、ふうう」

「ひい、ひい、ふう〜〜」

「もう二つか……」

パン！！

唐突にゴウの背後から出席簿が叩きつけられた。紛れも無く千冬である。

「」

「田上の人間に何をさせている、馬鹿者」

ユウはあまりの痛みにうずくまる。威力を嫌という程熟知している一夏は顔を引き攣らせ、篠は顔を背け、当の山田先生は自分が何をしていたのかよく分かっていないようだつた。

ユウは涙を流しながら振り向き、弁解を始める。

「何つて、予行演習ですよ。いずれ必要に……」

パン!!

「山田先生にはまだ早い……あ。」

『.....』

千冬さんの一言に場の空気が凍る。

ユウは背後から負のオーラが漂うのを感じた。振り向くと、田の前には体を震わせて今にも泣き出しそうな山田先生が立つている。

「山田先生、その……」

「.....」

今度は千冬さんが山田先生に対してもう一つするが、山田先生の無言の圧力がそれを許さない。

「女性を泣かせるなんて、織斑先生は最低ですね」

ユウの非難の声に対し、千冬はユウを睨みつけた。その殺氣たるや、

軽く四回は殺せるのではないかとこゝろのものだ。

「元はと言えばお前のせいだつ。それより時間が無い、早く何とかしろ」

「ほじねー、分かりましたよ」

コウはあくまで涼しい顔で千冬の要求に応える。  
おもむろに山田先生に近づき、耳元で囁いた。

「山田先生、後田良く効くと噂の恋愛成就のお守りを差し上げます  
から、どうか気を落とさないで下せー」

「…？ それ、本当ですか！？」

山田先生は田を光らせながらコウの両肩をがつしつと掴む。  
コウは苦笑しながら何度も頷き、山田先生を引き剥がしながら言つた。

「それよりも今は一夏に伝えなければならない事があるんじやない  
んですか？」

コウの一言で山田先生はハツとして、慌てて一夏に告げる。

「そそそ、そりでした！ 織斑君、専用機が届きました！」

山田先生の声と共に、ピットの搬入口が重厚な扉を立てながらゆつくりと開いていく。

扉の奥に、一機の白いエリが鎮座している。純白のような純白の中  
に感じられる圧倒的な存在感は、そこらの専用機とは比べ物になら

ない。

「『』れが織斑君の専用『』、『白式』です。」

「びやく……しき……、『』れが俺の『』……」

「織斑、体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとファイシティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。分かつたな？」

一夏は山田先生から聞かされた『』の名を反芻し、感慨深げに白式を見つめるが、千冬さんはお構いなしに一夏を急かす。

一夏は千冬さんの言葉に頷き、白式に触れた。

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。あとはシステムが最適化する」

一夏は千冬さんに言われたとおりに白式に体を預ける。すると白式の装甲が一夏の体を包んでいき、装甲が合わさり閉じていく。20秒程で全工程が終了し、一夏は感触を確かめるようにゆっくりと体を動かしていく。

「『』のハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける。……第」

一夏は千冬さんの問いに答え、その後顔も向けずに第の名を読んだ。ハイパーセンサーによって360度全方位が見えているから『』その芸当だ。

「な、なんだ？」

「行つてくる」

「あ……あ。勝つてこい」

篝は一夏の言葉に吃驚しながらも、すぐこの表情を引き締めてやうげた。

一夏は篝の言葉に首肯で応える。

「……コウ」

「僕がひきつ事は何もあつません。好きなように戦つと良一

「俺はお前を信じる。田代<sup>たしろ</sup>と一緒にひきつと勝てる」

「過信と確信は全く別の別物ですよ

「分かってる。じゃ、行つてくる」

一夏はコウの指摘に苦笑しながら応え、ピット・ゲートに進み始める。

ゲートが解放され、一夏は飛び立つ。戦いの空へ

## shift 2・3 「秘策」（後書き）

ユウ「お氣に入り登録数が100件になつたつて聞いたんですけど、冗談ですよね？」

HAL「いや、確かに100件になつていたぞ」

ユウ「おめでとうござこませ」

HAL「なん……だと？」

ユウ「？ 何か？」

HAL「お前がそんな事言う方が信じられない」

ユウ「失礼な。素直に祝つて何が悪いんですか？」

HAL「辛辣がお前のモットーではないか」

ユウ「ほう……セコまでも言つなら遠慮は要りませんね？」

HAL「俺が悪かった（下ト座）」

ユウ「まったく……人の厚意は素直に受け取るものですよ」

HAL「やうだな。読者の皆様にも御礼をしなければな

ユウ「ならせつと次的话を書いて下さー。それが一番の御礼です」

「ハレ」やつぱつお前は辛辣だ

「ウ「次回から戦闘開始です。 わあ……」

「イ「わあ、一夏はセシリアに勝てるのかー?」」期待ー。」

「ウ「姉さんー?」

8/29 改稿しました。

皆さん大好き！ アツアツの戦闘シーンが始まるよ～

プロローグ編以来の戦闘シーン。やっぱこれは戦闘シーン。  
原作と違つて一夏がやや強いです。

一応キャラ崩壊に注意して下さい。多分それほどでもないと思いま  
すが。

あと、お気に入り登録数100件突破記念の特別企画は、最近忙し  
いのでやらない方向性でいきます。

期待していく下さった読者の皆さん、申し訳ありませんが200件  
突破まで……

ユウ「そんなに行くとは思えませんがねえ」

……じゃあ150件で。

ユウ「今ハーダル落としましたね？」

本編をお楽しみください。

## Shift 2-4 「一夏 vs セシリ亞！ クラス代表決定戦開始！」

アリーナ内には既にセシリ亞が待機していた。

彼女が操縦するISは鮮やかな青色で、その外見は特徴的なフイン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さが感じられる。

一夏は、白旗から送られてくる情報とユウが授けた情報の再確認を行う。

戦闘待機状態のISを確認。操縦者セシリ亞・オルコット。  
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り

ディスプレイに表示される情報は、ユウから貰った物と全く同じだつた。

(アイツ、どうやって情報集めたんだ？)

「あら、逃げずに来ましたのね」

「…………」

セシリ亞は腰に左手を当て言い放つ。彼女の表情からは自信や余裕といった感情が読み取れる。

しかし、一夏の関心は別の所にあった。

彼の瞳に映るのは、セシリ亞が左手に持つ、一メートルを超す長大な銃器  
データによると、六七口径特殊レーザーライフル《スタートライトmk.2》。

一夏の脳裏にユウの言葉が再生される。

「ブルー・ティアーズの主兵装であるライフルは貫通力がありますから、絶対に当たらないようにしてください。当たり所が悪ければ最悪絶対防御が発動してしまいますから」

アリーナ・ステージの直径は200メートルで、発射から目標到達までの予測時間は0・4秒。

既に試合開始のブザーは鳴つており、不意打ちを仕掛けてくる可能性は十分にある。

「最後のチャンスをあげますわ」

セシリ亞が左手を人差し指を立てた状態で一夏に向かながらそう提案する。

右手のライフルの銃口は未だに下がつたままだ。

「チャンスって？」

一夏はライフルから気を逸らさずに、セシリ亞の言葉に応える。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくなれば、今ここで謝ると誓つのなら、許してあげない事もなくつてよ」

警戒、敵IIS操縦者が射撃用スコープ展開。ライフルのセーフティロックの解除を確認。

一夏はIISのアラートを冷静に受け止めつつ、コウの策を再確認する。

「戦闘開始直前に彼女を怒らせるように挑発してください。怒りは集中力の低下を招き、集中力の低下は射撃精度に響きます。多少は攻撃の激しさが増しますが、命中精度が落ちれば回避は容易い。なに、あいつた輩は適当にあしらえれば勝手に燃え上がってくれますよ】

(「)のタイミングだな。気は進まないが、勝つためだ……)

「なあ、イギリスには騎士道つてあつたよな？」

「？　ええ、それがどうかなさいまして？」

「なら失望したぜ。決闘つてのは真剣勝負だ。相手をバカにするなんて論外。そんな事騎士道でも武士道でも基本だ。つまりお前は決闘だの何だの吹つ掛けておきながら、その実決闘のけの字も知らないお嬢様だったって訳だ。失望せずにいられるかよ」

「ツー？」

「お前のそれはチャンスじゃない。決闘相手に対する侮辱だ。お前なんかと決闘なんてできるか。さつさと<sup>くに</sup>祖國に帰つて紅茶でも飲んでろ」

一夏の罵倒を受けセシリアはわなわなと震えだす。どうやら効果は抜群だつたらしい。

「……わたくしの厚意を踏みにじるとは

警告！ 敵IIS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「泣いて縋り付いても許しませんわ！」

ライフルの銃口が瞬時に一夏に向き、先端を輝かせる。

(来る！)

直後、耳をつぶざくような独特な音と同時に、一筋の閃光が目標へ駆け抜ける。

「くっ！」

一夏はスラスターを全力で噴かせ、閃光をかわす。

「かわした！？ 偶然ですわ！」

セシリアは顔を不快に歪め、一射目、二射目と次々一夏に放つ。だがしかし、一発も一夏に当たるどころか、かすりもしない。

(バカな！？ わたくしは悪夢でも見てますの！？)

セシリアの脳内は怒りと驚愕で乱れに乱れ、完全に冷静さを失っていた。

一方、一夏はセシリアの射撃をかわす事で、集中力と冷静さをさらに増していた。

有り得ない。一夏はISを操縦した事なんてほとんど無いはず。  
それがなぜ、代表候補生の射撃を避けていられるのか。

周りを見ると、山田先生は啞然とした表情で見入り、織斑先生は嬉しいですオーラをこれでもかと周囲にバラ撒いている。  
唯一、ユウだけは特にこれといった反応を示していない。まるでこれが当然と言わんばかりに。

「ユウ、なぜ一夏は攻撃をかわしていられるんだ？」

ユウなら答える。そんな気がしたので尋ねてみた。

「ミス・オルコットが本調子ではないからですよ」

答えはあっさり返ってきた。しかし本調子ではないとはビリビリいう事だろうか。

「彼女は代表候補生だぞ？ そんな都合良く失調するものなのか？」

私の問いに、ユウは行動で答えを示す。ユウはディスプレイの、ある場所をズームさせた。

ディスプレイに映し出されたのはセシリア・オルコットの顔だった。

「？ どういう事だ？」

「彼女は今、どんな顔をしていますか？」

ユウに言われるまま、セシリアの顔を凝視する。彼女は不快そうに眉を寄せていた。

この表情から読み取れる感情、それは……

「怒りと……驚き?」

「そうです。彼女は正直だ。故に感情が顔に出てしまつ。彼女は今、怒りと驚愕で混乱の極致にいるんでしょ?」

ユウはリアルタイムで彼女の思考を説明する。まるで初めからいつなる事が分かっていたかのように。

私の脳裏に戦闘開始直前の光景が再生される。そして気付いた。

「まさか、あの罵倒はお前の指示か?」

「これほど上手くいくとは思つてませんでしたけどね」

私は思った。「この男を敵に回したら絶対に負ける」と。  
ディスプレイを戻し、戦況を見る。どうやら一夏はまだ被弾していないようだ。  
なぜだらう。一夏が負ける所を想像することができない。

「幕、君が祈つていれば一夏は絶対に勝てますよ」

ユウは私にやう言つて、踵を返しピシットを出していく。さあ。

「待て! ビニに行く氣だ?」

「次の対戦相手を祝福するつもりはありませんから」

ユウが振り返つて言った言葉に、私は自分の耳を疑つた。次の対戦相手だと?  
まさか信じているのか? 一夏が勝つ事を。

そう声に出して訊く事ができず、私はただ、ユウを見送ることしか

できなかつた。

## Interlude out

一夏はセシリアの攻撃を避ける最中、ふと自分が武器を取り出していない間に殴付いた。

(「いや武器を出したこと……）

【武器を取り出すなら必ず近接武器を取り出してください。挑発は怠り無きよ。ただし攻撃はしない事。一撃を入れるチャンスは必ずやつてもお。それまではとにかく回避に集中し、被ダメージを減らす事】

「ウの言葉を思い出し、武装欄を開く一夏。  
しかし、欄を見た一夏の思考が一瞬止まる。  
当然だろ？。何せ白式に搭載されている武装は近接ブレード一本しか無かつたのだから。

「なんつー偶然だよ……」

一夏は呆れながらも近接ブレードを呼び出し、展開する。  
すぐさま右手に光の粒子が形を成し、片刃のブレードになつた。  
「中距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑むつだなんて……  
笑止ですわ！」

「そのセツフは俺に一発でも当つてから言つただなー。」

一夏に上手く返され、セシリ亞は悔しそうに歯ぎしりする。  
……が、すぐにその顔が笑みへと変わる。

「ならば、どうぞおきを使わせていただきますわ」

セシリ亞がそういった瞬間、背部のフイン・アーマーが分離し、直線機動で一夏へと向かう。

「行きなさい、『ブルー・ティアーズ』！」

セシリ亞の命を受けたブルー・ティアーズ（以下ビット）の先端に光が宿り、次の瞬間、BTレーザーが一夏目掛けて打ちだされた。

「ツ！？ くそつ！」

一夏はビットから次々に放たれるレーザーを死に物狂いでかわしていく。

だが、操縦経験の少ない一夏では技量的に全てを捌く事は不可能。かわしきれなかつたレーザーが命中し、シールドエネルギーを削つていく。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリ亞が左手をタクトのよひに振るう。それに合わせてビットの射撃が一夏を襲う。

一夏は射撃をかわそうとするが、やはり被弾は免れない。しかし、一夏は冷静だった。

(やつぱり、コウの言つた通りだ)

「ブルー・ティアーズ……ビットの攻撃は必ず君の反応が一番遅い所から来ます。ああいつた武器は死角から狙うのが定石なので当然と言えば当然なんですが」

タネが割れた以上、時間を掛けるわけにはいかない。いくらビットの攻撃が読めていても全て回避する技量は無い。速攻で一撃を引かなければ一方的にやられる。

一夏はビットの攻撃を回避しつつセシリアを見やる。彼女は余裕の笑みを浮かべ、その場に佇んでいる。

素人目に見ても隙だらけだ。

(やるなら今しかない！)

回避に専念していた一夏が、突如機体を翻しセシリアに突撃する。

「なつ！？」

あまりにも突然の事に、セシリアは反応できなかつた。

慌ててビットを引き戻すが間に合わない。いつまでも無く反応の遅れが致命的だつた。

「隙だらけだぜ！」

「まだですわ！」

セシリ亞はライフルを構え、一夏に向けて撃とうとするが、

「遅い！」

一夏はセシリ亞の懷に飛び込むと、ブレードでライフルを弾く。次の瞬間、弾かれたライフルの銃口からレーザーがあらぬ方向へ飛んでいった。

一夏は勢いのままブレードを振りかぶり、

袈裟切りに振り下ろした。

「！」は、俺の距離だ！――！

Shift 2-4 「一夏 vs セシリアー クラス代表決定戦開始!」（後書き）

和花「す、す」「……織斑君がオルコットさんと対等に戦つてゐる」

HAL「しかし一夏の戦闘技術は原作と全く変わつていないぞ」

ユウ「僕のアドバイスのおかげですね」

HAL「ブルー・ティアーズの情報、どこから仕入れたんだ?  
学園のデータベースじゃ十分じゃなかつただろ」

ユイ「そこは私がちょっとハッキングして……」

HAL「お前か……」

ユウ「前半は一夏の優勢でしたが、はたして後半も上手く行くんで  
しょうか」

HAL「さあな」

和花「次回もお楽しみに!」

8/29 改稿しました。

## shift 2-5 「狙撃手の本気、田代の覚める白、決闘の行方」（前書き）

先週は忙しくて更新できませんでした。

楽しみに待っていた読者の皆さま、申し訳御座いませんでした。

別にアサシンクーリード？が楽しくて徹夜で進めていたからとか、そんなやましい理由なんて物は一つもありません。

ユウ「それで執筆を怠つたと、そういう事ですか？」

……一週間ぐらいい更新しなくなつていいじゃない。不定期連載だもの。

ユウ「開き直るのはやめなさい」

本編をお楽しみください。

ユウ「……はあ」

## Shift 2-5 「狙撃手の本気、目覚める白、決闘の行方

一夏は両手に手応えを感じた。堅い物に刃が食い込み、断ち切つていく手応えを。

感触を堪能すること無く、ブレードを一気に振り下ろす。

「はあああああ！！！」

「さやあつー！」

斬撃の衝撃でセシリ亞が吹き飛び、その後、一瞬の静寂がアリーナを包み込んだ。

セシリ亞はゆっくりと、緩慢な動きで体勢を立て直す。そして自身の左腕を見て……固まった。

左腕を覆う装甲に傷が入っている。紛れも無く一夏に付けられたものだ。

「切ら、れた……？　このわたくしが？　有り得ない、有り得ないですわ」

セシリ亞がぶつぶつと呟く。ハイパーセンサーによって一夏もその呟きの内容を知ることができる。

事実を受け入れたくない、認めない、そんな内容だった。

「いい加減認めろよ。その傷はお前の油断や驕りが生んだ物だ。俺を侮っていたお前の落ち度だ。これが本物の決闘だったら、お前は死んでるかもしないぜ？」

一夏の言葉にセシリ亞は何の反応も返さない。

怪訝に思つ一夏だつたが、セシリ亞の顔を見て息を呑んだ。

真一文字に鋭く結ばれた口が、怒りではない別のナニカを灯した日  
が、そこにあつた。

「わたくしが敵を、ましてや殿方を懐に許すとは……一生の不覚」

今までとは全く違つフレッシャーを感じ、一夏は全身から嫌な汗が  
噴き出るような錯覚を覚えた。

「……どうやく本氣になつたつてワケか」

「最早容赦は無用。全力で貴方を……ハチの巣にしますわ！」

「……」

セシリ亞が瞬時にライフルを構え、引き金を引く。回避されず許され  
ない、完璧な早撃ち。

今までの雑さを感じさせない正確な一撃は、一夏の左肩を撃ち抜い  
た。

「ぐあつ！？」

撃ち抜かれた左肩の装甲が吹き飛び、衝撃で一夏の体がよろけた。  
絶対防御は発動しない。白式は問題無いと判断したのだろう。

（ヤバい。正確さはともかく、なんつー速さだ。これがあいつの本  
気かよ）

「行きなさい！ 貴方達の獲物は……あれですわ！－」

セシリ亞は続けざまにビットを繰り出す。

一夏を見据えるその目はまさしく狩人。ビットは彼女の獵犬といったところか。

だが一夏とてただ食われる訳にはいかない。

「それはもう効かねえよ！」

一夏は後ろを振り返り、回転の勢いでブレードを横に薙いだ。ブレードの軌道にビットが吸い込まれ、切断、爆散した。一機撃墜。

「！？」

セシリ亞は驚愕に目を見開いた。

「その武器の特性はもう分かつてるんだ。そんな子犬で俺を潰せると思つなよ？」

Interlude 織斑千冬

「はああ……すじいですねえ、織斑君」

リアルタイムモニターを見ていた山田先生がため息混じりに呟く。頬が若干紅潮し、目がキラキラと輝いて見える様な気がするが、私の気のせいだろう。

それよりも一夏だ。とてもISの起動が一回目とは思えない。

最初はボロボロにやられるだろうと思っていた私だが、これは嬉しい誤算だ。

素直に認めたくはないが。

「ふん、あいつは私の弟だ。これくらい当然だわ！」

「えつー？』

私の言葉に山田先生は、驚いたように振り返り、私の顔を見つめてきた。

そして、意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「どうした？」

「織斑先生、本当は嬉しいんですね。口元がニヤけてますよ。」

「……なつー？ 何を言つている！ そんな事は無い！ 断じて無い！」

すぐさま否定して、顔を山田先生から背ける。顔が熱を帯びるのが分かる。今、私の顔は赤くなっているのだろう。

「あー、照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

からかわれているのか……面白くないな。

「…………」

ぎつぎつぎつぎつ。

私は山田先生にヘッドロックを掛けた。

「いたたたたたつー！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はつ、はじつ。わかりました！ わかりましたから、離しあつづつあ

セシリアはさすがに敏捷で山田先生を放置し、私はモニターを見つめる。  
……勝てよ、一夏。

#### Interlude out

「豆々しい、早く墜ちなさい。」

セシリアは苛立つたぶつけのビットに命令を下す。

「見えてんだよ。」

彼女がビットに命令を下すと同時に、一夏はセシリアに突撃した。ビットが一夏を取り囲むように動き、レーザーを放とうとする。一夏は回転しながらブレードを薙ぎ、上方のビットを切断する。一機目撃墜。

残り一機のビットからレーザーが放たれ直撃するが、構わずには突撃する。

セシリアは焦ってビットを呼び戻すが、

「遅いぜ！ もうつた！」

一夏は振りかぶったブレードを振り下ろし右側のビットを切断。二機目撃墜。

その勢いのまま、回転蹴りを繰り出し最後のビットを叩き壊す。四機目撃墜。

これで彼女を守る物は無くなつた。ここまで接近すればライフルも使い物にはならない。

今なら確實に一撃が入る。その一撃で勝てる。だが一夏はこれで終わると思えなかつた。

コウの言葉が脳裏をよぎる。

「ビットは四機ではなく六機あります。見た目に騙されないようにして下さい。おそらく、四機のビットが撃墜された後、奥の手として使ってくるでしょうね」

コウの言葉通り、セシリ亞は腰部のスカート状のアーマーにある突起を外し、

「わたくしが一度も攻撃を許すと思つて？」

一夏に向けて突撃させた。

五機目、六機目のビットは射撃型ではなく、『ミサイル弾道型』だ。このタイミングでは回避は間に合わない。

「…? しまつ」

爆音と閃光が一人を包み、遅れて爆発が一人を襲つた。

AペリットとBペリットを繋ぐ通路。そこをコウは歩いていた。

先程聞こえてきた爆音からセシリアが弾道型ビットを使つたのだろうと推測し、

「閉幕は近い……か。一夏、君の勝利は僕が保障しよう。だから

」

全力で戦え。そう言つて通路の奥に消えていった。

一方、Aピットでは、

「一夏つ……！」

モニターを見つめていた筈が、思わず声をあげた。

いくらエリは安全性が高いからと言つて、至近距離で爆発に巻き込まれればひとたまりもない。

千冬も山田先生もモニターを注視している。

「ふん」

黒煙が晴れた時、千冬は鼻を鳴らした。しかし顔には安堵の色が窺える。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「はあ、はあ……至近距離での爆発は心臓に悪いですわね」

セシリアは爆発の直前、スラスターを後ろに噴かせて爆発の衝撃を和らげていた。

黒煙から一いち早く脱出し、未だ漂い続ける黒煙を注視する。

「あれを受けてタダで済むとはおもえ……ッ…？」

黒煙が晴れた時、彼女は信じられない物を見るような田で空中に佇む敵を見た。

そこにあるのは純白の機体。だが、見た目は先程のそれとは全くの別物。

ダメージがリフレッシュされた装甲は、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な、どこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

この現象について、彼女は一つしか思い当らなかつた。

「まさか……一次移行！？」

ファースト・シフト

一夏は初期化<sup>フォーマット</sup>と最適化<sup>フィットティング</sup>が終了した皿をテイスプレイで確認すると、まるつきり別物に変わった機体を見て色々と納得していた。

（ユウの奴、最初は時間稼げってしつこく言つてたけど、こうこう事か）

そして、劇的に変わつたであらう武器　近接特化ブレード・『雪片式型』を見て、一夏は薄く笑みを浮かべた。

かつて姉が振るい、自らをIOS操縦者中最強の地位へと押し上げた、自分が知る限り最強の武器、雪片。

その名を冠する武器が自分の手の中にある。今の想いを声に出さずにはいられない。

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

一夏は誓つ。この力で、家族を守りたい。

(もう、守られるだけの関係は終わってしまったよ。今度は )

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？ 貴方、何を言つて 」

「どうあえずは、千冬姉の名前を守るわー。」

一夏の独り言にセシリアは困惑する。一夏は苦笑し、雪片を構えなおした。

元世界最強の弟、それが不出来じゃ格好が付かない。いや、  
「とこいつか、逆に笑われるだろ」

「だからさつきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

セシリ亞は弾道型ビットを再装填。再び一夏田掛けて撃ち出した。

一夏は慌てず、雪片に一瞬だけ視線を送り、再びビットを見据える。  
(「マイツの使い方ならもう分かつてる。行けるー。)

ガギン ！

一夏は直感のまま、雪片を振り抜く。その直後、両断されたビット  
は慣性のまま一夏の横を通り過ぎ、爆発した。

一夏はその余波を背中で感じじるよりも早く、セシリ亞に突撃を仕掛

ける。

「「おおおおおお...」」

### Interlude セシリア・オルコット

来る。白き剣士が、淡い光を纏つた刀を構えて。  
その姿は雄々しく、気高く、そして美しさすら感じさせる。

ビットを全て破壊され、ライフルはその長大さ故にこの間合いで  
役立たず。

唯一の近接武器は展開が間に合わない。

私を守る僕達は全て蹴散しやべらされてしまった。

回避はできるだろううが、しても無駄に試合時間を長引かせるだけだ  
わう。

剣士との距離が縮まつていぐ。もう一弾も無い。

目が合つた。強い意志が宿つた、綺麗な瞳めをしている。

ふと、両親の姿が脳裏をよぎった。

父は母の顔色を窺うばかりの情けない、弱い人だった。  
ISが発表されてからは、また一段と弱々しくなった。  
こんな情けない男とは絶対に結婚しないと固く誓つた。

母は女尊男卑社会になる前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていた。

厳しい人だったが、憧れの人だった。

過去形なのは、二人は三年前に、事故で他界してしまったからだ。

二人がいなくなつてから、私は毎日を生きるのに必死だった。  
金の亡者たちから身を守るために、あらゆる勉強をした。

ISの適性テストでA+を出してからは国から国籍保持のため、様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るため、私は即断した。

そして、稼働データと戦闘経験値を得るために日本を訪れ、そして出会つてしまつた。強い瞳をした、強い男性に。

酷くゆっくりと、スロー再生で下段に構えられた刀が振り上げられる。

さつきまでの怒りは無い。むしろ清々しい。

これほど強い相手に負けるのならば、何も言つ事は無い。

今まで張っていた意地がどうでも良くなつた。

今まで心を守ってきたプライドが氷解した瞬間、

ドクン

不意に、心臓の高鳴りを感じた。何か熱く、切ない物が込み上げて来るような感じがする。

ナニ力に取り憑かれたかのように、剣士から目を離す事ができない。それは否応なく心を縛りつける呪縛の鎖。私を締めつけていく甘美な鎖。

私は理解してしまった。これから先、この男から一生逃れる事ができないことを。

ならば認めてしまおう。私は声を出さず、口を動かすだけで言った。

私の、負けですわ

それは、心の殻を完膚なきまでに破壊する服従の言葉

Interlude out

試合終了のブザーが、アリーナ内に鳴り響いた。

『試合終了。勝者 織斑一夏』

Shift 2-5 「狙撃手の本気、目覚める白、決闘の行方」（後書き）

HAL「一夏が勝ったか……」

ユウ「セシリ亞は一夏に惚れたようですね。良かつた良かつた」

HAL「今更だけどお前ハーレム作らないのか?」

ユウ「僕には心に決めた人が居るんです。それ以外は要りません」

HAL「殊勝な事で」

ユウ「EIS学園は恋愛フラグの宝庫ですから、避けるのが難しいんですね」

HAL「それで一夏になすりつけるのか。それは友達としてどうよ?」

ユウ「一夏が幸せになるんです。良い事です」

HAL「あつた。ヒジリで次はお前と一夏の勝負だな」

ユウ「負ける要素など微塵もありません」

HAL「油断してたらやられると?」

ユウ「これは油断ではありません。余裕です」

HAL「そういえばお前はそういう奴だったな」

コウ「次回もお楽しみにー。」

8 / 29 改稿しました。

## PV10万突破記念企画（前書き）

PVが10万を突破しました！（ドンドンパフパフ～！）

今週は本編の更新は有りません（オイ

## PV10万突破記念企画

HAL「ユウ！ PVが10万を突破したぞ！」

ユウ「えつー？ そうなんですか？ もめでとうございます」

HAL「遂にここまで来たか……長かった」

ユウ「地震とかあって大変でしたね」

HAL「今まで暖かく見守つてくださった読者の皆様、本当にありがとうございます」

ユウ「礼ならいへりでも出来ます。もっと他に何か無いんですか？」

HAL「あるぞ」

ユウ「おおー で、何をするんですか？」

HAL「読者の皆様が参加できる企画を考えた。

名付けて『ワルキュークカスタムプロジェクト』！」

ユウ「ほう……で、どんな企画なんですか？」

HAL「名前の通り、読者の皆様にオリジナルの第一世代型HS、  
ワルキュークを自分色に染めてもいいプロジェクトだ」

ユウ「なかなか面白そうな企画ですね。で、そのカスタム案をどう  
するんですか？」

HAL「外伝の話で使わせて頂く！」

ユウ「それは投稿し甲斐がありますね」

HAL「では早速、投稿規定を発表する」

ユウ「規定違反にならないように気を付けて下さいね」

## ワルキュー・カスタム・プロジェクト

受付期間 7月2日〆切

### 投稿規定

指揮官機、または格闘、射撃、戦闘支援のいずれかに特化した、  
オリジナルの第一世代型 I.S.『ワルキュー』のカスタム機を募集  
する。

なお、ワルキューについては『オリジナルキャラ及びオリジナル  
I.S.設定』を参考にする事。

何に特化した機体なのかを明記する事。

明記しない場合は作者が勝手に判断して使う場合があるので気を付  
ける事。

武装案オノリーでも可。ただしどのタイプの機体に取り付けるかを明記する事。

明記しない場合は作者が（以下略

簡単にいいので、機体説明や武装の説明を入れる事。

入れない場合は作者が（以下略

機体名称には「ワルキュー」を入れる事。

ワルキューさえ入つていれば特に指定はしない。

機体性能、及び武器性能がチートの域に入っていると考えられる場合、

作者が勝手に性能を制限する場合があるので気を付ける事。

単機で何でもこなせる機体にしない事。

所謂「ぼくのかんがえたさいきょうのわるきゅーれ」にしない事。

ただし、指揮官機は例外的にある程度の汎用性を認める。

投稿数に制限は設けない。ただし受付期間を過ぎた場合、選考の対象にならない可能性があるので気を付ける事。

投稿、及び質問は感想板またはメッセージで受け付ける。それ以外では受け付けないので気を付ける事。

作品には指揮官機、格闘機、射撃機、戦闘支援機を各一機ずつ出す予定なので、

是非参考にしてほしい。

HAL「とまあ、 irgendが。あと、受付期間はあくまで日安なので、

一日ぐらい遅れても問題は無いから、バンバン投稿して欲しい」

ユウ「それにしても、他作品と比べて規定が多い気がするんですが……」

HAL「要は違反しちゃうと勝手に調整して使わせてもらいつといふ事だ。

まあ、余程の事が無い限りそういうこと思つがな

ユウ「だそつなので、戻込みせずに是非投稿して下さーね」

HAL「皆様の素晴らしい妄想を期待している」

ユウ「とにかく一機も投稿されなかつた場合はどうするつもりですか？」

HAL「全部俺が考える」

ユウ「……だ、 そうです」

HAL「カラーーリングや形状は自由だ。規定が守られてさえいれば、どんな機体になつても構わない。

成層圏を狙い撃てる機体にしても良いし、歩く武器庫にしても良い。

金ぴかでも引いたりしないから、是非投稿してくれ。と頼つかして下さいお願いします」

「マイ「皆さんの応募待つてま～す」

「ゴウ「通常の『』意見、『』感想もお待ちしております」

「HAL「作品の質の向上のため、是非書いてくれ。質問にも答える範囲で答えるわ」

「ゴウ「とにかく外伝書く気なんですか?」

「HAL「別枠で連載する予定だが、何か?」

「ゴウ「本編があまり進んでない気がするんですが……どうなれるつもりで?」

「HAL「なぜ黒い笑みを浮かべながらにじり寄つてくるんだ?」

「ゴウ「遅々として進まない本編を<sup>なにがし</sup>我われでは困るんですよ」

「HAL「せ……善処しよう」

PV10万突破記念企画（後書き）

外伝は別枠で連載……の予定。

多分本編より更新頻度は低いです。——

まだキャラクターの考案中ですので内容についてはまだ何とも……。  
ただ、自分は百合が好きなので多分百合になると想います。  
何で女子同士ってこんなにドキドキするんだ……。

お知らせ

受付期間を延長しました。

## Shift 2-6 「決闘後の一人」（前書き）

また話の分量をミスりました。orz

PV10万突破記念企画については現在進行形でカスタム案募集中です。

受付期間を7月まで延ばしました。奮ってご参加ください。

今すぐ応募して、HSマイスターの称号を手に入れよう！（嘘です）

## Shift 2-6 「決闘後の一人」

試合終了のブザーが鳴り、勝者が告げられた瞬間、アリーナの観客席は騒然となつた。

当然だろ。素人が代表候補生に勝つなど前代未聞。ましてやそれを成し遂げたのが世界で一人しかいないISを扱える男なのだから。

「静かにしろ！ 連絡事項がある」

だが、その無秩序な賑わいはたつた一声で、まさしく冷水を浴びせられたかの如く静まり返つた。

アナウンスしたのが千冬だつたので当然と言えば当然だが。千冬の言葉に生徒たちは耳を傾ける。

「奈々瀬対織斑の試合は、アリーナの使用時間の都合上、明日に延期する。繰り返す」

落胆の声が上がらなかつたのは千冬の指導の賜物だろ。顔までは落胆の色を隠せはしなかつたが。

「織斑とオルコットはピットに戻れ。観客席の生徒は直ちに退場するように。以上」

アナウンスが終了するや否や、生徒たちは蜘蛛の子を散らすように散つて行つた。

誰だつて織斑先生のお説教は受けたくないのだらう。

一夏は自分が勝つたといつ余韻を噛み締めていたかつたが、お説教されては敵わない。

すぐ」ピットに戻ろうとしたが、ある事をまだしていないのに気が付き、セシリアに近づく。

「良い試合だった。ケガとか無いか？ 手加減できなくて悪かった」

一夏はやつれてセシリアに右手を差し出した。

「…………」

だがセシリアは一夏を無視し、そのままフランと上のKDRBピットに戻つて行つた。

「……やっぱり負けた事がショックだったのか？」

一夏は自分で答えを推測し、自分で勝手に納得した。まさかこの試合に勝つた事で自分が好かれたなど全く気付かず。

### 第三アリーナ・Aピット

「一夏、よくやつた」

「お、おつかれ」

ピットに戻つてきた一夏を最初に出迎えたのは篠だった。見た感じ喜んでいる雰囲気は無く、普段通りだ。

(あれ？ 勝ったのに喜んでない？ なんか勝つて当然つて感じだな。ああそうか、こういつ時こそ気を抜くなつて事か。さすが篠、

その姿勢には痛み入るぜ）

一夏はこんな時でも適当に解釈して納得した。

幕に続いて山田先生と千冬が一夏に近づいてくる。

「すういです！　すういですよ織斑くんつ！…」

「う、どうも……」

山田先生は目をキラキラと輝かせながらずい、と寄つて来る。一夏はエスを付けているため、必然的に山田先生を見下ろす形になる訳で

（い、いかん！　む、胸が……）

急いで目を逸らす一夏。一夏の行動に首をかしげる山田先生。その行動をハイパー・センサーで見てしまった一夏は、さらにダメージを受ける事になった。

……主に理性に。

「その、なんだ……素人にしては悪くないが、これで満足せずに精進しろ」

「……はい」

照れ隠しのためか、そっぽを向きながら言つ千冬だが、肉眼でも分かるくらい嬉しいですオーラを放つていた。

それを感じ取つた一夏は特に反論すること無く、素直に従つた。せつかく気分が良いのに悪くする理由はない。

一通り言葉を交わしたが、一夏は何か欠けているよつたな気がして、周りを見渡した。

そしてある人物がいない事に気が付いた。

「あれ？ ゴウは？」

「ああ、ゴウなら試合中にここから出でていったぞ。次の対戦相手を祝福するつもりは無い」と呟いてな」

「次の対戦相手？ まさか分かつてたのか？ 僕が勝つって」

「やうとしか思えん」

「やうか……試合の前に礼を言いたいんだけどな」

一夏の言葉に千冬は肩をすくめる。

「礼？ 応援の礼か？ お前も律儀な」

「あー、そうじゃなくて、アイツのアドバイスで勝てたから、その礼を……あれ？」

千冬に対する一夏の一言で周りの戦勝ムードが完全に消え、教師陣の一夏を見る目が残念な物になつた。

「……そうですよね。当然ですよね。それでもしない限り織斑君は勝てませんよね」

「……やはりそうか。よく考えれば、策を弄するなど直情的なお前には無理だったな」

山田先生、千冬の順に心に突き刺さるような言葉を一夏に投げかける。

これらの言葉が実体ダメージを持つていれば、一夏は心臓を滅多刺しだつただろう。

唯一筆が何も言わなかつた事が救いか。

「まあ、それでも勝ちは勝ちですから……」

「次からは自分の力で勝てるように訓練に励め。いいな?」

「……はい」

「一夏」

「ん? どうした筆」

「今日は仕方無かつたが、次からは卑怯な真似は許さんぞ」  
「……分かつた」

先程までの浮かれ気分はどこへやら。

決闘には見事勝利したが、男としては色々と、ズタボロに負けた一夏なのであつた。

セシリ亞はフラフラと力無くBピットに辿り着き、程なくしてEIS

を解除する。

表情は未だに上の空で、先に到着して待っていたユウに気付く気配は無い。

「お疲れ様です、ミス・オルゴット」

「…………あら、何故貴方がここに？」

ユウに言葉を掛けられ、ようやく反応するセシリア。

表情は先程とは一変、どこか不機嫌そうな雰囲気を醸し出している。まるで行動の邪魔をされたかのようだ。

「貴女を慰めに来ました」

「必要ありませんわ」

ユウの言葉はぴしゃりと撥ね受けられた。ユウは苦笑しながら言葉を続ける。

「人の善意は素直に受け取るものですよ」

「敵の善意を受け取る気はありませんわ」

「貴女を敵だと思った事は一度もありませんが？」

ユウの言葉に、セシリアはうつ、と声を詰まらせた。表情はみるみる険しくなり、明らかに機嫌を損ねている。

「……貴方と口論しても勝てる気がしませんわ」

「それは何より。や、飲み物とタオルを受け取つて下れ。」

コウに促され、セシリ亞はしぶしぶ飲み物とタオルを受け取つた。  
そのまま飲み物を口にする。

「それより一夏はどうでしたか？ 惣れるくらい強かつたでしょうか？」

「ツー？ げほつ、げほつ……こきなり何を仰りますのー？」

コウの何氣ない一言に、セシリ亞は驚いて咽<sup>むせ</sup>ながらコウを見た。  
コウの目はまるで何でも見通す水晶のように澄んでいる。

「一、今日は偶然ですわ！ 今日は偶々調子が悪かつただけで……

そう。今日は偶々調子が悪かった。だから相手に好き勝手を許してしまつた。

といつのがセシリ亞の言い分だらう。

「確かに。顔が若干赤いですね。風邪ですか？ 熱は？」

コウは頷き、真顔で額をくつつけようとする。セシリ亞としては今誰かに触れられたら色々とまづいので、適当に誤魔化す事にした。

「うー、これは……そうー。さっきまで激しく動いてましたので、体が熱を帯びているだけですわー。」

「そうですか。じゃあ体の冷やし過<sup>すぎ</sup>ぎは気をつかって下さるね」

「……ええ、そうしますわ」

どうにか誤魔化す事ができたと思ったセシリ亞は、冷たい汗が背筋を伝うような錯覚を覚えつつも、とりあえず着替えに向かう事にした。

が、ピシトを出る直前、背後から声を掛けられた。

「ミス・オルコット

「……セシリ亞

「え？」

「セシリ亞で構いませんわ。これからは『友人として』の付き合いを希望しますわ」

「……明日は血の雨でも

「失礼な。貴方のような殿方は嫌われますわよ？」

コウの言葉に、セシリ亞は不機嫌そうに返す。だが、コウに背を向けていたせいで、コウの口角が一瞬上がったのを見逃してしまった。

「じゃあ一夏のような男ならどうです？」「

「…? いつ、一夏さんは関係ありませんわー……あ。」

セシリ亞は言い切つてから気付いた。今自分は何て言ったのか。  
『一夏さん』と言っていたのではないか。意識してしまったら止まらない。

脳内で『一夏さん』が何度もリピートされ、繰り返す度に脈拍が早まり、顔が熱を帯びてくる。

「そうですか。ああ、僕の事はユウで構いませんよ」

「わ、わたくしは別に……って、へ？ そ、そうですか。ではユウさん、わたくしに何か？」

弄られると覚悟していたセシリアだが、ユウは特に気にした風ではないのでほっと胸を撫で下ろした。

「明日は僕と一夏、どちらを応援するんですか？」

ユウの質問に考え込むセシリア。最初に脳裏に浮かんだのは一夏だつた。できれば彼に勝つてほしい。

ついでに最後にこの男に一泡吹かせてやりたい、そうセシリアは思いい、

「それは秘密ですわ」

そう答えてユウを残してピットを出た。

一方答えを受け取ったユウは、最初は二〇一〇顔で、次第に二ヤニヤし始め、ついにはククク、と笑い始めた。

「セシリアは演技が下手だな。バレバレだよ。やっぱり恋する乙女は見ていて飽きないな。さて、セシリアは墮ちた。次は鈴だな。彼女は最初からポイント高いから、ちょっと焚きつけられよあれよと墮ちてくれるだろ？ 楽しみだ」

ユウの笑みは果てしなく黒かった。

## shift 2 - 6 「決闘後の一人」（後書き）

ユウ「ねえ、僕は悪役なんですか？ 悪役なんですね？」

HAL「何を取り乱している。別に良いじゃないか、恋のキューピットみたいで」「…」

ユウ「結論から言えばそつなりますけど、過程が黒過ぎます…」

HAL「世の中綺麗事だけじゃ生きていけないぜ」

一夏「アンタ一体どんな人生送つてきたんだよ…」

HAL「そんな事は関係ないだろ。それより次はユウvs一夏だ。  
一夏、ブレード光波飛ばしてユウを驚かしてやれ」

一夏「出来るのか…？」

HAL「いや、無理だ。そういう事を言つた訳ではない。

ユウに勝つためには計算外の行動を取れと言つたのだ

一夏「アイツの計算外って、何すればいいんだよ…」

HAL「さあな。ま、精々頑張れよ」

ユウ「貴方が言つ事じゃないですよそれ…」

和花「PV10万突破企画は現在進行形でやっているんで、是非参加して下さい！」

「やつこえよ、受付期間が延びてましたね。じつこの事ですか？」

HAL「じつこの事も何も、伸ばして悪い事は一つも無いだらう。

「やつせ集まりなさうだからグダグダやる気なんでしょう。  
ただでさえ今の連載だけでも厳しいのに外伝なんて始めたら  
色々とマズイですよ？」

HAL「……やれるだけやつてみるわ」

8/29 改稿しました。

## shift 2-7 「ユウサ一夏！ 激突する日」（前書き）

Q・先生、前回は「次はユウサ一夏だ」とかほざいておきながらこの体たらくは一体どういう事ですか？

場合によつては外伝なんて無かつた事にしても良いんですよ？

A・計画性つて大事だね。勢いだけじゃこの業界やつてられ……つてちよつと待つてそのプロット破かないでエエエ……！

……次こそ戦闘シーン頑張ります。そして外伝は必ず書く（キリッという訳で、来週あたりに外伝の予告を短編で出やつと思います。皆見逃すなよ！

## shift 2 -7 「ユウサ一夏! 激突する白

時は進み、翌日の放課後。場所は再び第三アリーナ。

「白武や零落白夜についての必要最低限の知識は教えた。後はお前の好きなように戦え」

「ああ。行ってくれよ、千冬姉」

一夏は再びAピットで準備を整えていた。昨日と違い、この場にコウはない。

「一夏」

「筹か、何だ?」

準備を整える一夏の背後から声が掛けられる。声の主は筹だ。

「勝てとは言わない。だが、せめて一矢は報いて見せり」

「分かつてゐる。ただやられるだけなんて、俺の性に合わない。絶対アイツに、ギャフンて言わせてやる」

「その通りですわ、一夏さん。わたくしも応援しますから、必ず一撃を入れて下さいな。あ、わたくしの事はセシリ亞で構いませんわ

「うおつー?」

篝の背後からいきなり掛けられた声に、一夏は驚き、目を疑つた。

昨日敵だつたはずのセシリ亞が何故この場にいるのか。

「おま

」

「セ・シ・リ・アですわ

（名前で呼ばないと威圧感放つとか、何処のナルシストだよ！？  
それになんか猿から名前に大幅ランクアップしてゐし！？）

「えつと……セシリ亞さん、何故ここに？」

「先程も言つた通り、一夏さんの応援に参りました」

一夏の恐る恐るの質問に、セシリ亞はそう答えて一夏に近づく。  
しかし、篝の隣でピタリと止まつた。篝から殺氣にも似た威圧感が  
放たれたからだ。

「生憎だが、応援の数は足りている」

「そんな事無いぜ篝。応援は多い方が助かる」

「一夏さんがいてくれと仰るのなら、仕方ありませんわね」

（ふふん　一夏さんにとつて貴女だけが特別と思わない事ですわ  
ね）

「…………」

（イギリス女め、これで勝つた気になるなよ……）

ふふん、どう機嫌な顔をしつつ篝を見遣るセシリ亞とは対照的に、

セシリ亞を見る筈の表情は険しい。

心なしか一人の眼から火花が飛び散っているようなエフェクトが見える。

そんな一人を苦笑しながら見ていた一夏は、徐おもむろにゲートに向かい始める。

「それじゃ、行つてくる」

「お気をつけで」

「ふん、精々ボコボコにやられて来い」

「おいおい筈、それ酷くないか?」

「知るか! もうあとに行け!」

筈はそう言つてそっぽを向いてしまった。

一夏は筈の態度にあはは、と苦笑し、一通り笑うと表情を引き締めた。

「筈、どうしても伝えたい事がある」

「……どうした、改まつて」

一夏の雰囲気が変わったのを感じた筈も、表情を引き締めた。

「もし」との試合、俺が勝つたら……俺が勝つたら

「

ドクン。

心拍数が跳ね上がるのを感じた。

一夏はこちらに背を向けているので表情までは分からぬ。しかし、背中から並々ならぬ強い意志を感じる。

それはまるで、死地に赴く兵士のような雰囲気。

どこかへ行つてしまいそうなその雰囲気に、私は心の何処かで不安を感じた。

「もし」の試合、俺が勝つたら 結婚してくれ、篇」

本来ならば紡がれる事など有り得ない言葉が脳内でリピートされる。こんなの都合の良い妄想だ。そつ切つて捨てようとしても頭から消え去らない。

胸が苦しい。組んだ腕に力が入る。いつもでもしないと、一夏が続きを発すればすぐにでも抱きついてしまいそうだ。

一夏が口を開け始め、それと同時に期待が膨らんでいく。

Interlude out

「メシ奢つてくれ」

「…………は？」

一夏の言葉に篠は呆然とした。

「いや、だから俺がこの試合勝つたらメシ奢ってくれって言ったんだ。

まあ、絶対勝てないだろ?けど。でもこれくらいの報酬あつても良いだろ?

その方が頑張れるし」

篠は、ゆっくりと、時間をかけて一夏の言葉を咀嚼していく。そして言葉の真意を理解していくにつれ、篠の顔から表情が消えていく。

「……分かった」

「ー。本当か!? 言つてみる」

「ただし、お前が負けたらお前が私に奢れ」

「ええー!?

「それくらい当然だわ。誰が鍛えてやつたと想つてるんだ」

「ああー……えっと……仰る通りです、はい」

思いもしない篠の逆襲に、一夏はがっくりと頃垂れる。しかし、男に「詰め無い。やつぱり無じとは限らぬ、一夏は従つしか無かつた。

「…………」

哀れ、墓穴を掘った一夏の選択肢は『死に物狂いで戦う』だった。ピット・ゲートが解放される。最早考え直す余裕はない。

(……やつてみるかー)

加速の圧力を全身に感じながら心に誓つ。勝てば良いと。しかしそれは、賭け馬は自分自身、勝率0%の、賭けとして成立しない賭けだった。

一夏がアリーナ内へ飛んで行つた後、ピットに残された一人は何と無しに顔を見合させ、ほぼ同時にため息をついた。

「残念でしたわね」

「全くだ」

「しかし、先程のやり取りでひとつ、気付いた事があるのですけれど」

「……何だ？」

「一夏さんは、実は手料理を要求していたのではなくて？」

「……………？」

セシリ亞に言われて篠はハツとした。

(しまつた……確かに私の手料理なら報酬に値する。一夏め……なぜハツキリと言わなかつたのだ)

(一夏さんの言動を理解できるわたくしの方が、一夏さんにふさわしくてよ)

だが篠はまたもやハツとし、表情を一ヤケ顔に変えた。  
篠の表情の変化にセシリ亞は眉を顰め、篠に理由を尋ねた。

「どうかなさいまして?」

「ああ、一夏が負ければ、私が一夏に手料理を要求すれば良いではないか」

篠の一言に、今度はセシリ亞が衝撃を受けた。

(しまつた! その手がありましたわ!)

形勢逆転。まさしくその一言が当てはまつた瞬間だった。

結局の所、一夏が勝とうが負けようが得をするのは篠といつ事だつた。

どちらも都合のいい解釈だが、恋する乙女の思考回路は、自分に都合の良いように繋がつているのである。

一夏がアリーナに入ると、既にユウが待機していた。

「ようやくですか。待ちましたよ」

「悪い悪い、色々あつてな……」

一夏の言葉に対し、ユウは一夏を追及する事は無く、そうですかと言つてあつやうと引き下がつた。

一段落ついた所で、一夏は改めてユウを観察する。

ユウが纏うEISは、色は白、装甲は丸みを帯びていて威圧感を感じる事は無いが、

装甲の面積が他のEISよりも広く感じられ、周囲に配置された4つの非固定式のバインダーがその印象をより一層助長している印象を受ける。

(同じ色なのに白式とは全然違つた)

しかし、一夏が最も驚いたのは、ユウの格好である。

「制服？ EISスージじゃないのか？」

ユウはいつものようにEIS学園の制服を身に着けている。

教科書にはEISを身に付けるならばEISスージを着るのが最も良いと書かれていたはずだ。

EISスージは肌表面の微弱な電位差を検知する事によって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、EISはその動きに合わせて必要な動きを行う。

つまり、EISスーツを着なければEISは全身に装着された鉄の塊と同じように、唯の拘束具にしかならない、という事になる。

「ああ、その事ですか。僕のEISは特殊ですから、EISスーツが無くともちゃんと動かせるんです」

「え、と感心する一夏に、ユウはもう一つ、と付け加えて、「操縦者、僕の安全を考慮してこの制服の強度を上げてますから、安全面は問題ありません。心配しないで下せ!」

「それはつまり、俺は本気を出しても良いってことだな?」

「本気を出しても君が勝つ事など有り得ませんがね」

ユウの挑発に一夏は眉を顰めた。

「後で吠え面かくなよ?」

「君こそ、ピットの一人に格好悪い所を見せないよう、死に物狂いで戦う事ですね」

一夏は雪片式型を呼び出し、下段に構える。  
対するユウは両手にビーム・ガトリングガンを呼び出し、銃口を一夏に向ける。

決闘前の、静寂の時間が訪れる。一人は今か今かと開戦の時を待ち、同時にその一瞬に対応すべく集中力を高めていく。

〔試合開始3秒前……2……1……〕

試合開始のブザーが鳴った。その瞬間、二人の体が同時に弾け飛んだ。

ユウ「どうして今回は第vsセシリアな感じになつたんです?」「

HAL「いや、なんか一人が勝手に動いて……」「

ユウ「そして僕は主人公であるはずなのに影が薄くないですか?」

HAL「安心しろ。次は必ずお前が活躍できるから」

ユウ「一夏相手に勝つても全然嬉しくないです」

一夏「ちよつ……それ酷くないか?」「

HAL「次回はユウが一夏を蹂躪する○ H A N A S H I (笑)  
だ

全く……ハーレムを作れないくらいで弱い者いじめなんて、  
最低最悪の主人公だな、お前は

ユウ「今の言葉の何処に真実があるのか教えてください。」  
……小一時間ほど

一夏「俺はお前には負けねえ! あいつらが応援してくれる限り!」

HAL& am &gt; ユウ（無駄にイケメン面するなよリア充め……）

和花「ワルキユーレカスタム案は現在進行形で募集中です。  
締め切りが近いんで、駆け込むなら今ですよ~」

HALL「通常の御意見、御感想も隨時募集中だ！」

ユイ「ヨロシクね～」

8/29 改稿しました。

## shift 2・8 「レッスン」（前書き）

先週は訳あつて更新できませんでした。すみません。

あと、活動報告にも書きましたが、今月は忙しいのでもしかしたらこの一話しか上げられないかもしません。ご了承ください。

## Shift 2-8 「レッスン」

開始直後、一夏はユウに向けて最短軌道 つまりは一直線にユウに突撃した。

零落白夜はシールドエネルギーを食らう。長期戦はきわめて不利。故にシールドエネルギーに最も余裕のある、試合開始直後に一撃を当てるのが定石。

一撃デカいのが当たればなし崩し的に勝てる。多少の被弾はお構いなしだ。

一夏のそんな考えは、加速直後に霧散する事になる。

「なつ！？」

ユウが開始直後、一夏と同じ方向 後ろ向きに加速したためだ。しかもご丁寧に一夏と同じ速度で、だ。

ユウは驚く一夏などお構いなしに、両手のビーム・ガトリングガンの引き金を引く。

大量のビームが一夏目掛けて吐き出される。

「くそつ！」

一夏は突撃を諦め、回避行動に移る。とにかく距離を取り、密度の薄くなつた所へ動いていく。

「随分と回避が上手になりましたね、素人の割には」

「最後は、余計、だろツ！」

ビーム・ガトリングがバラ撒くビームは、一発の威力はそれ程でも

ない。

しかし、とにかく数が多い。一丁でさえ密度が濃いのだ。

「一丁」となると密度は倍、その激しさは集中豪雨と言えるだらう。

しかしあんな事に、命中精度はそれほど高くない。

狙つて撃つてこると云つよりはバラ撒いていると言つた方が良いかもしれない。

(手加減されてこるのか?)

一夏の脳裏に一つの考えがよぎる。

そう、コウがこんな無計画に弾をバラ撒くはずが無い。

「舐められたるのか、俺はー。」

「それはちょっと違います。測つているんですよ、君の実力を

「舐めた真似をー。」

コウの答えは一夏を納得させるどころか、逆に怒りを増長させる結果となつた。

どちらにせよ手加減されてこる事に変わりはないのだから。

「挑発ですらないのにこの始末……ダメダメです」

「ハハセえー。」

コウはビーム・ガトリングを機械的に連射しながら、失望したように首を横に振る。

その行為がまた一夏の怒りを煽つた。

「はあ、失望しましたよ一夏。これでは」

ユウがべらべらと話している最中、唐突にビーム・ガトリングの連射が止んだ。

ビーム・ガトリングは便利な武器だが、弱点が存在する。それはこの武器がエネルギー充填式である事だ。

一度撃ち切れば再チャージに時間をする。

「今だ！」

一夏は「じじ」とばかりにユウに向けて突撃する。

再び零落白夜を発動させ、固まつて動かないユウに向けて雪片を振り下ろす。

「もらつた！」

この瞬間、一夏は完全に一撃を確信し、ほくそ笑んだ。

だが、危機的状況に置かれながらも、ユウの顔に焦りは無い。ほんの一瞬だけ、口角がほんの僅かに上がったが、一夏は気付かない。

雪片が全力で振り下ろされた。しかし一夏の手に手応えは無い。

「何ッ！？」

「敵の策にまんまと乗せられてしまいますよ？」

「があつ！？」

後ろから声が聞こえ、次の瞬間、一夏の体は背中からの衝撃と共に加速した。

ハイパーセンサーで蹴りを繰り出したコウの姿を確認したと同時に、一夏は地面に叩きつけられた。

「たかが弾切れ程度で隙が出来たと勘違いされでは困りますね。……ああ、すみません。まさかこの程度の策も見破れないような愚か者ではない、と思い込んでいた僕が悪かったみたいですね」

ユウは追撃せず、一夏を見下ろして言った。否、見下して言った。

(「こつ……といとん舐めやがつて!」)

一夏は起き上がり、再びユウに突撃した。最早冷静さなど欠片も無い。

「安心して下さい。今度はちゃんと受け止めてあげますから」

「ぞけんじや……ねええええ!……」

一夏の大上段の踏み込みに対し、ユウは両腕のビームサーベルをトンファー状に出し、交差させて一夏の攻撃を防

「え……!?」

がずに受け流した。

「怒りで我を忘れ、攻撃が単調になつている。おまけに敵の言葉を素直に信じるなんて、全くもって人が良いですね、一夏」

「ぐがッ!?!」

一夏はまたもや後ろから蹴りを食らい、地面に叩き落とされた。

「なんと言つか、終始奈々瀬君ペースですね」

「しかもさつひと終わらせる訳でもなく、こんな弄ぶような真似を……一体何を考えているんだあいづは」

真耶は残念そうに言葉を漏らし、千冬の方を向き……凍りついた。目線はモニターの中のユウを見つめているのだが、その目が凄まじく怖い。

絶対零度、ゴルゴンの田すら生易しいと思える程の眼力。

「そ、そあ……私には何とも」

真耶はただ、ユウに同情することしかできなかつた。

「紳士と思つておりましたのに、とんだ捻くれ者ですわね」

「……私の知らない間に何があつたんだ?」

一方、ピットにてる幕とセシリ亞もまた、ユウの戦い方に啞然としていた。

勝てる実力があるのならさっさと勝つてしまえば良いの。そうすれば一夏はあんなに傷つかなくても良いの。

一人の見解は、この時ばかりは見事に一致していた。

### Interlude 織斑一夏

もう何度地面に叩きつけられたか分からない。

突撃しては攻撃をかわされ、背後から蹴られる。その繰り返し。

こんな事さつさと終わって欲しいと思った。

だけど蹴り程度じゃシールドエネルギーは全然減らない。

もう嫌だ。もうこんな惨めな思いなんてしたくない。

逃げたい。逃げたい。逃げたい。

「一夏」

不意に上から声を掛けられる。ゴウの声だ。

「僕だって本当ほんなん事したくないんですよ」

「……どう、意味だよ」

俺が質問すると、ゴウはふう、と憂さげに息を吐き、俺を真っ直ぐ

に見据えた。

「実際に戦つて今の実力を測定しました。」この際なのでハッキリと言います。君はセシリアに勝ったのが奇跡としか思えないほどの素人です」

「……否定は、しない」

コウの言つている事は正論だ。俺がセシリアに勝てたのはコウの口添えのおかげだつて事も自覚している。

「ですが、才能・資質はずば抜けている。成長速度も異常と思えるくらい速い」

「……何だつて？」

驚いた。そんな事まで見抜けるのか。

「今君に不足しているのは、知識と経験です。知識はまだ覚えればいい。ですが……」

コウは一度言葉を切り、一息ついてから再び話し始めた。

「経験は訓練だけでは不十分でしょう。何より実戦の方が効率が良い。ですから」

コウが言わんとしている事をようやく理解できた。  
やっぱり俺はこいつの事、憎めない奴だと思つ。

「僕が直接、君を鍛えます」

「……そつか

なんてバカバカしい。どうして今まで気付かなかつたんだ。  
俺がこいつに勝とうだなんて、最初から無理だつた。  
こいつがすぐに俺を倒さなかつたのは、遊んでいたからじゃない。  
そもそもこいつはそんな無駄な事なんてしないだろう。

「……なあ」

「何ですか？」

「こいつは本気で俺を鍛えようとしている。

「俺は本当に……強くなれるのか？」

「……それは君次第です」

「なあ……俺も本気で行く。絶対に強くなる。

Interlude out

一夏は徐に立ち上がり、雪片を正眼に構える。

一夏の眼は怒りも不安も一切無く澄み切り、これ以上無い清々しさを感じさせている。

(やれやれ、やへやへ……か)

「ウもまた、両腕のビームサーべルを構える。

「では、第2ラウンドと行きましょうか！」

「おうっー。」

一瞬の間を置いて、一人はほぼ同時に動き、相手に向かって突進した。

Schrift 2-8 「レッスン」（後書き）

HAL「見事に躊躇の話だつたな」

和花「奈々瀬君鬼畜だね」

一夏「このアーティメ」

ユウ「ちよつとちよつとちよつと……」

まるで僕が弱い者苛めをしてくる小悪党みたいじゃないですか！」

HAL「違つか？」

ユウ「違います！ ちゃんと理由があるじゃないですか！」

HAL「お前、実はツンデれなんだろ？」

ユウ「あー？」

一夏「さすが作者だ。俺もそう思つてた。

弾が言つてたのとぴつたり当てはまるしな

ユウ「いや、僕にそつちの趣味は  
」

和花「奈々瀬君、もしかしてあつちだつたのー？  
……そうだよね。あんなに可愛いんだもん。

誘われないほうが可笑し  
」「

「君達、ちょっと……頭冷たうか？」

「すまん、俺が悪く」

(少々お待ち下さい)

「それで、次回は『』――夏の反撃です」

和花「試合の行方は如何に!? 次回もお楽しみに!」

一夏「なあ、あれ、大丈夫なのか?」

「じゃあ一夏、君も同じくして差し上げましょうか?」

一夏「全力で遠慮させて頂ぐ!」

8/29 改稿しました。

## shift 2・9 「イレギュラー・アタック」（前書き）

えへ、実に一ヶ月ぶりの更新になりました（汗）  
読者の皆様、お待たせしてしまい本当に申し訳ありませんでした。

夏休みに入ったんで、おそらくこれから更新速度は上がるかと……。  
すみません外伝が有ったのを忘れてましたorz

## shift 2・9 「イレギュラー・アタック

「はあああああ……！」

交錯する直前、一夏は雪片を袈裟掛けに振り下ろした。しかし、斬撃はコウの体をかすりもしない。

「甘い……シーッ！」

コウはまたもや一夏の後方に回り込み攻撃を加えようとしたが、一夏の行動に目を見開いた。

「何度も……やらせるかあー！」

一夏は袈裟切りが空を切ったと見るや否や、その体を回転させ強引に横薙きを繰り出してきた。

雪片とビームサーベルがぶつかり合い、刀身が火花を散らす。

「ツー？ 跳りじゃないのかよー！」

「まだ跳つて欲しかったんですか？ とんだMですね、君はー！」

「うっせえー！」

お互に力を込め、鎧迫り合いの状態から距離を取る。

(もう合はせてくねば……スイッチが入ると凄まじいな)

(まさかサーベルで来るなんて……絶対に入ると思ったのに)

距離を置いて先程のやり取りの感触を確かめつつ、次の動きに入る。

「俺は迷わないぜ！」

先に動いたのは一夏。雪片しか攻撃手段を持たない故に行動パターンはいたってシンプル。

『近付いて斬る』

ただそれだけ。しかし、そのシンプルさゆえに迷いは一切見当たらぬ。

対するコウはサーベルを仕舞い、ビーム・ガトリングを再び取り出した。

「充填の時間なんていくらでも有りましたからね」

そう言って後退しつつ、一夏にビームの弾幕を浴びせる。

「つおおおおお……！」

一夏は減速する事無く、出来る限り被弾面積を減らし、コウに近づいていく。

しかし、コウもまた一夏と同じ速度で後退を開始し、一夏とコウの距離は一向に縮まらない。

(まだだ！ まだ進める…)

一夏は多少の被弾などお構いなしに、コウに向けて突進する。コウは一夏と同じ速度を保ったまま後退を続ける。

普通の空ならば無限に続くであろうこの状態は、しかし長くは続かなかつた。

ここはアリーナなのだから。

(まづい……後退できない)

ユウの背後に壁が迫り、ユウは後退を止めざるを得なくなつた。ユウと一夏の距離が詰まる。

「はあああああーー！」

(来るー)

一夏が大上段に雪片を構え、全力で突進していく。

一夏の攻撃を受け流すため、ユウは右へよけ

「今度は逃がさねえ！」

一夏は雪片を大上段から逆胴へ構えなおし、横へ薙いだ。

(しまつたーー？)

ようとしたが出来ず、バインダーでの防御を余儀なくされた。バインダーのビームバリアが展開されるが、一夏はそれに応じて零落白夜を発動させる。

ビームバリアと零落白夜の刃が激突し、一瞬拮抗した。

次の瞬間、零落白夜がビームバリアを切り裂き、続いてユウをも切り裂かんと刃を進めるが、結局刃がユウを完全に捉える事は出来ず、浅く装甲を切り裂くに留まつた。

ユウは一夏から飛び退き、一夏は壁を背にユウと向き合つた。

## Interlude 織斑一夏

ダメだ。あと一歩の所で届かない。

せっかくユウが鍛えてくれてのに、何も出来ずに終わっちゃ申し訳が無い。

どうする……どうすれば一撃を入れられる?

今のは結構良かった。でもユウに一度通じる保証は無い。それにそろそろシールドエネルギーも危なくなってきた。零落白夜が一回使えるかどうかって所か。もつ一か八か……だな。

……白式、頼む。ほんのちょっとで良い、俺に力を貸してくれ。もうお前しか頼れないんだ。

眼を瞑つて白式に頼み込む。我ながら情けないと思つが、もうこれくらいしか手はない。

『…………』

白式からの返事は無い。はは……そんな都合のいい事が

『いいよ』

「……え…?」

驚いて田を見開いた。田の前には白いロングの髪を靡かせた、白いワンピース姿の小さな女の子が立っていた。

そして驚くべき事に、周囲の空間が完全に停止している様なのだ。

まるで意識だけ完全に別次元にいるような感じだ。

『ほんのちょっとだけ、力を貸してあげる。上手に使ってね』

女の子は後ろ姿のまま、振り返りもしない。けれどこの声はある女の子の物だと理解できる。

女の子は言つべき事を言つたのか、すぐに姿を消し、次の瞬間

「う、あ……なんだこれ？」

頭の中に何かのイメージが流れ込んできた。

これは……零落白夜……？　しかし決定的に何かが違う。

流れ込んできたイメージを理解した瞬間、俺は戦慄した。  
まさか零落白夜にそんな使い方があるとは思わなかつた。  
俺が知つてゐる限り、千冬姉はこんな技一度も使つた事が無い。

……」れならコウと互角に戦える。

### Interlude 奈々瀬ユウ

一夏の雰囲気が変わった……。何か掴んだのか？  
そろそろ終わらせようかと思つていたから、これは好都合だ。  
見せてもらひうぞ、今日の集大成を。

「そろそろ終わりにしましょう

僕はそう言つて前二つのバインダーに格納されているビームソードを両手に構えた。

「ああ、いいぜ」「

一夏も雪片を下段に構える。そしてお互に集中力を高めていく。

先に動いたのは僕だ。もづビーム・ガトリングなんてちやちな物を使う気は無い。

一夏が突撃してきた所をいなして一撃を放てる。それで終わりだ。だが、いつまで経つても一夏が動く気配が無い。迎撃か、賢明だな。しかし、武器の数はこちらが有利。

こつちは一本、あつちは一本。たとえ一本防がれても一本目がある。こつちが負ける要素など有りはしない。……少なくとも僕が知っている限りは。

一夏との距離が詰まる。一夏はまだ動かない。  
20メートル、15メートル、まだ動かない。

……おかしい。なぜ動かない？ 何を待っているんだ？

あと10メートル程の距離まで来た時、一夏が動いた。  
下段の構えで零落白夜を発動させた。

「当たれええええ！」

一夏は下段に構えた雪片を上段の構えに変えて振りかぶり、袈裟掛けに振り下ろした。

まだ僕との距離が10メートル程離れている状況で、そんな攻撃は

無意味だ。

そもそも届かない攻撃など攻撃ですら無い。

「失望したよ、いひ……ッ！？」

いや、違う！ 今回のはただの零落白夜じゃない！？

雪片によつて振り出された光の刃が唸りを上げながら近づいて来ている。

「刃が……飛ぶだつて！？」

バカな！？ 刃が飛ぶなんて聞いてないぞ！？

ビームソードじゃ分が悪すぎる！ とにかく回避だ！

体を捻つて右に回避する。ちつ、少し掠つたか。

慣性で回転しながら体勢を整えると、田の前には雪片を上段に構える一夏の姿が……あれ？

「うおおおおおおーーー！」

一夏は雪片を遠慮なく、躊躇なく振り下ろしてきた。  
くつ、こんなタイミングで回避なんて出来る訳が

### interlude out

雪片の刃がユウの体に触れる寸前、試合終了のブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者 奈々瀬ユウ』

「……あれ？」

一夏はユウに雪片を突き付けたまま、呆然と固まつた。ギャラリーも皆口を開けたまま呆然としている。

「エネルギー……切れ？」

ユウは目を白黒させ、ボソリと呟いた。

「……あ。」

一夏が確認すると、案の定シールドエネルギーが尽きていた。

「……エネルギー管理も口クに出来ないなんて、やっぱり素人ですね」

ユウがやれやれといった感じで棘のある言葉を放つ。

「ぐつ……しつ、仕方ないだろ！ その……俺だって！」

一夏はユウの言葉に対し反論しようとするが、ユウはでも、とそれを制止し、言葉を続けた。

「惜しかったんですけど、最後のあの攻撃は見事でした」

ユウはそつと右手を差し出した。

「……あ、ああ。次は絶対一撃入れてやるからな！」

そう言って一夏はコウと握手し、互いの健闘を讃え合つた。

翌日、朝のS.H.R。ショートホームルーム

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですねー。」

「…………どうしてこうなった?」

山田先生が心底嬉しそうに話している一方で、一夏は頭を抱え、机に突っ伏して現実逃避していた。

## shift 2・9 「イレギュラー・アタック（後書き）

千冬「なん……だと……？」

HAL「いいねえ～、その表情。それが見たかったのよ」

ユウ「言い方が変態染みてますよ？」

HAL「んんっ！ 失礼した」

千冬「一夏のあれは一体何だ！？」

HAL「ふつふつふ。アレが一夏の必殺技、名付けて『零落白夜・飛刃』だッ！」

ユウ「元ネタがB EACHの月 天衝でしたつけ？」

HAL「思いつきで入れてみた。後悔はない」

ユウ「絶対コレ他の人もやつてますってー一番煎じ臭しかしませんー」

HAL「案外原作でこんな技が使われるかもな

千冬「私でさえこんなのが使えるとは知らなかつたぞ……」

一夏「よつしゃー、コレで中距離も恐くないぜッー。」

HAL「もう都合良く行くと思つなよ？」

一同『！？』

8/29 改稿しました。

### shift 3・1 「口演の授業風……話へ」（記書き）

今回の話は長めにならなければこもった。しかもわれほど進まないことこの。

進行速度を速めると話が薄っぺらくなったりやうがしないでもない  
ので、初心者としては難しい所です。

いや、言い訳だな、これは。

どうぞ本編をお楽しみください。

## Shift 3・1 「日常の授業風景?」

Interlude 奈々瀬ユウ

一夏がクラス代表になる15時間前。

僕は自室へ戻る最中、頭を駆け巡る一つの疑問について思考していた。

そう、一夏の零落白夜についてだ。

最後の最後で一夏が放つた、斬撃を飛ばす零落白夜。

一夏があんな攻撃ができるなど露ほども思っていなかつた。

「いや、思い込んでいたのか?」

僕は零落白夜を刃状にして飛ばす事が出来るという情報を持っていない。

この世界で千冬が用いた話は聞いてないし、前の世界でも一夏が用了たという表現は何一つ無かつた。

しかし、前の世界ではISは完結していなかつた。  
もしかしたらいざれ使えるようになるのかもしねり。それが早まつただけとも考えられる。

「しかし……情報の信頼性に欠ける。決め付けるのは早計か?」

ふと顔を上げると、目の前には1036という数字が書かれたプレートがあつた。

あれこれと考え事をしている内に部屋に着いてしまつたようだ。

「まあ、これは追々調べていくしかないな

僕は思考を切り替え、田の前のドアをノックした。

そして15時間後、一夏がクラス代表に選ばれる事になる。

## Interlude out

織斑一夏は現在の状況を理解できないでいた。何故自分がクラス代表なんていう面倒な役になってしまったのか。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合でユウに負けたんですが、何でクラス代表になつているんでしょうか?」

とりあえず先生に詰くしか情報を得る手段が無いので、一夏は手を上げて質問した。

「それは

「僕が辞退したからですよ」

山田先生が答えるよりも早く、ユウが一夏の質問に答えた。ユウはそのまま話を続ける。

「昨日も言つたように、君は他のIDS操縦者に比べて経験が圧倒的

に不足しています。経験を早く積むためには実戦が一番だとも言いました。クラス代表者は何かと試合が多いですから、君にはぴったりだと思いますよ?」

「だけど」「

「そ・れ・に、君には親友を売つとした前科がありますよね?」

「ハグリード?」

「これでおあいこです。後腐れが無くて良いじゃないですか?」

「『ハグリード』と言つ包められた感があるが、メリットをくめなため一夏は何も言い返せなかつた。

この後セシリアがしゃしゃり出てきてさりに籌もふーふー言つて紆余曲折あつたが、結局千冬が一喝して満場一致でクラス代表は一夏に決まつたのだった。

一夏だけ最後まで不満そつだったが、所詮民主主義などそんな物である。少数派は圧倒的多数派に淘汰される運命なのである。以上。

時間は進み、もうすぐ4月のカレンダーが仕事を終える頃。

「ではこれよりEUSの基本的な飛行操縦を実践してもいい。織斑、オルコット、奈々瀬。試しに飛んでみせ!」

IS学園の授業は本格化し、ISを用いて授業する機会も増えた。当然専用機持ちの実践も増え、コウ、一夏、セシリアの三人はフル稼働している。

ただ、一夏はまだISに扱い慣れていないため、ISの展開にすら時間が掛かっている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

コイツのようにな、と千冬はユウを指さしながら一夏を急かした。一夏は右腕を突き出し、左手でガントレット状になった白式を掴み、集中する。

(来い、白式)

次の瞬間、一夏の体が光に包まれ、白式の展開が完了した。

「よし、飛べ」

全ての専用機持ちがISを展開させたのを確認した千冬は、改めて飛行の指示を出した。

それを聞いたユウとセシリアの行動は早かつた。セシリアを先頭にユウが続き、その遙か後ろを一夏が追いかけるという形になった。

「何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズが一番低いんだぞ。織斑はともかく、奈々瀬はわざとセーブしてるだろう?」

「でも本気出したらすぐ天井にぶつかりますよ?」

「お前の頭の中には急制動という言葉は無いのか? 次に手を抜い

たらグラウンド10周だ

「うう……分かりました」

千冬にお叱りを受け、ユウは不満顔で頭を搔いた。やがて一定の高度まで上がり、三人は上昇を止めた。

「なあユウ、『前方に角錐を開拓させるイメージ』って、どんなイメージなんだ？　イマイチ感覚が掴めないんだが……」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を摸索する方が建設的でしてよ」

答える前にセシリアに割り込まれたユウだが、特に気にする訳でもなく考え込む。

「やはりセシリアさんの言い分をお勧めしますね。IFSは割とイメージに頼る部分が多いですから。それでもダメなら……ロボットアーメを見て下さい。多少は勉強になります」

「分かった」

ユウは苦笑しながら答えたが、一夏は真剣な表情で頷いた。

田の前では一夏が通信回線で早く降りて来いと幕に怒鳴られ何とも言えない表情をしている。

Interlude 奈々瀬ユウ

「そう言えれば」の後、一夏は地面にクレーターを作る事になるが……どうするかな。

結局、一夏一人でも穴を埋める事が出来たんだから、別に一夏をフォローする義理はない。

……でも本気でやれって言われたしなあ。

ちょっと凄い所を見せつけられれば”あの”織斑先生でもきっとキャラにしてくれるだろ？。よし、フォローしよう。

「織斑、オルゴット、奈々瀬、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

セシリ亞は一夏にウインクしながら地上に向かっていった。  
そして完全停止も難なくクリアしたらしい。さすがに代表候補生ともなればこれくらいのお茶の子をこせいだら。

「つまいもんだなあ」

一夏が感心したようにつぶやいてくる。

「違います一夏、君が下手なだけです」

……なんて口に出しては言わない。それが大人のルールゆえに。

「一夏、先にどうだ？」

「分かった。ふう……よし！」

一夏が地上に向かつて急降下、もとい突進していった。

急降下と完全停止のポイントは、どこでブレーキを掛けるかだ。スピードが上がれば上がるほど、ブレーキポイントの見極めはシビアになつていく。

今の一夏はスピードを出す事に集中するあまり、ブレーキポイントを完全に無視している。

これじゃ衝突するのは当たり前だ。

僕はすぐに一夏を超えるスピードで急降下する。ちなみに僕の飛行イメージはやつぱりスラスターやらバーーニアだつたりする。だって一番イメージ掴みやすいし。さすがガダム。日本が誇るロボットアニメだ。

すぐに一夏に追いつき、横に並ぶ。ブレーキポイントまであと少し……！」だ！

「ストップ！－！」

「ツー？」

僕の声に一夏は驚き、反射的にスピードを緩めた。けどそれだけでは不十分だ。慣性を殺しきれず、激突の運命をなぞるだろ？

「暴れないで下さいねっ！」

「うおつー？」

僕は一夏を抱きかかえ、4つのバインダー全てを使って逆噴射する。まだ不十分か？ なら縦のベクトルを横に変換するか。

機体各所のスラスターをフル稼働させ、緩やかな曲線を描くよう軌道を修正する。

速さは殺しきれなかつたが、少なくとも地面に激突する事は無くなつた。

そのまま地面に滑るように着地し、機体を回転させて安定させる。着地地点から6メートルほど地面を滑り、機体が二回転した所でようやく止まった。

一夏を抱きかかえてから5秒間の出来事だ  
二ん　ついで出来ました

.....

あれえ？ 何で誰も何も言わないのかな？

「あ、あの……終わつましたけど。」

... ፳፻፲፭

…… も？

『わやああああああああーーー』

ぐうつ！？ 久しぶりに聞いたぞ、この超音波ヴォイス。相変わらず耳に優しくないな。

「奈々瀬くんカツコいい〜！」

「ステキ！ 王子様みたい！」

「さすが織斑君の本妻！　これは結婚も近いわね！」

「えー？」

待て待て待て！　最後のは何だ！？　いつ僕が一夏の本妻になつたつて言うんだ！？

それから簞とセシリ亞！　なんで僕に向けて殺氣を放つてるんだ！？　僕にも一夏にもそんな気なんて無いに決まっているだろう！？

「…………墜落する工事」を抱えて完全停止、しかも多少ズレはしたが地表にピタリ……か。ピタリ賞は出せんが、褒めるくらいはしてやろう。ただ……

おお、織斑先生がデレた！　ただ……何か？

「王子様を気取りたい気持ちは分からぬでもないが……早く織斑を下ろしてやれ。その内恥死するぞ？」

何だそんな事……何イ！？　恥死だと！？　そんなバカな！？　僕はすぐに視線を下ろし、一夏の方を見る。

「頼む……早く下ろしてくれ。色々と恥ずかし過ぎて死ぬ

一夏は顔を真っ赤にし、田をあらぬ方向に向けてしかも田尻からキラリと光る物が見えた。

うん、お姫様抱っこして悪かった。でもその顔は……男としてどうかと思つぞ？

「すみません。でも地面とキスするよりはマシでしょ？」

「……何も言えないのが恨めしいぜ」

一夏、小さじ事は気にするな。女々しいと思われるぞ？

## Interlude out

「じゃあ次は織斑くんが奈々瀬くんをお姫様抱つ

「よし、続いて武装の展開に移る。織斑、武装を展開しそう。それくらいは自在にできるようになつただろう」

「は、はあ

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし、では始める」

織斑先生のナイスカットインにより、一人の女子生徒の野望は密かに潰えたのだった。

一夏は集中し、雪片を開けさせた。一夏は満足げだが、織斑先生とは求めているレベルが違つてしまひ

「遅い。0・5秒で出せるよになれ」

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは一夏よりも早く、スター・ライトマークを展開させた。射撃準備すら完璧させていた。さすが代表候補生だけある。

「さすがだな、代表候補生。ただし、奈々瀬を撃ちたい気持ちは分からんでもないがそのポーズはやめろ。ちゃんと銃身を正面に展開出来るようにして」

セシリアが展開させたスター・ライトマークの銃身はコウの眉間にピタリと合わせられ、かつロックオンまで完了していた。

「申し訳ありません。次は注意される前に引き金を引きますわ」

「直せ。いいな?」

「…………はい」

「わざとセシリアが怖い事を言った気がするが……何かの[冗談だろ]う。そう言いたいコウなのであった。

「ではセシリア、近接用の武装を展開しろ」

織斑先生は続いてセシリアに近接武装の展開を要求した。

「えつ。あ、はいっ」

いきなりでビックリしたセシリ亞だが、すぐさまスター「ライト」を収納し、近接用の武装を展開させる。  
しかしながら武装が現れない。

「くつ……

「まだか?」

「す、すぐです。　　ああ、もうつー『インター・セプター』!」

セシリ亞は武器の名前をヤケクソ『氣味に叫んだ。すると小型のブレードがセシリ亞の手に現れた。

武装の名前を呼ぶという手法は初心者用だ。代表候補生が使うには拙すぎる。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待つてもううのか?」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません!　ですから、問題ありませんわ!」

「ほつ。織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが?」

「あ、あれは、その……」

墓穴を掘ったセシリ亞は織斑先生に指摘され、一夏を睨みつけた。

(コウ!　何とかしてくれ!)

(僕は戦い方を指定したりなどしませんでしたが?)

元はと言えばユウの作戦のせいなのだが……と言わんばかりに一夏はユウに視線を送るが、ユウはアフターケアなど知らんとばかりに顔を逸らした。

「さて、最後は奈々瀬だな。武装を開けろ！」

「はい」

コウはぐする一夏を無視し、すぐさま武装を開いた。わせたのだが……

(じりしてまた固まるんだ！？)

またもや織斑先生を含む全員が呆然としている。

「あの……展開終わりましたけど……」

コウの声に織斑先生がいち早く復活し、続いてやれやれとため息をついた。

「さすがだ奈々瀬。お前の技量には心底驚かされる。だが……」

「……だが？」

（またもや織斑先生がテレた！？）  
な……（まさか一日に一度も拌めるとは

「ウの心の声に、それは違う！」  
と普段の織斑先生なら言つていた

だろ？ ただ、今日は動搖して調子が狂っていた。仕方があるまい。

「誰が武装をフルオープンしろと言った！？」

コウが右手にビーム・マグナム、左手にビーム・ガトリングガン、さらに両腕のビームサーベルをトンファー状に展開させ、拳銃の果てに4つのバインダーに一本ずつ収められている2本のビームソードと同じく2本のビームサーベルを隠し腕を使って展開させていたのだから。

「文脈から察するに射撃武装を展開した後近接武装も展開しろとか言われそつだつたんで、纏めて展開しました」

「普通のHISはそんなに多くの武装を一片に展開出来るはずが無いんだが……」

織斑先生は眉間に指を当て、うんうん唸つている。  
確かにこの光景は異常だな、とコウは苦笑した。

「なんて言つた……色々とやり過ぎました。すみません」

「……もうこい。今日の授業はここまでだ。頭が痛い。山田先生、  
後は頼む」

「は、はい……大丈夫ですか？」

「大丈夫だと言つている。……後でアイツを問い合わせねば……」

何やらブツブツ咳き、織斑先生は頭を押さえながらふらふらと校舎の方に去つていった。

「え、えーと……」それで授業を終わります

山田先生の合図で、生徒たちは呆然としたまま解散を始めたのだった。

### shift 3・1 「日常の授業風景?」（後書き）

一夏「どうも今回は最後の方のキレがユウらしくないな

和花「たまにはそういう日もあるって事ですね」

ユイ「ユウはね、女の子の日が近付くとあんな風になるんだよ?」

一夏&和花「女の子の日…?」「

ユウ「冗談はよして下さいよ姉さん!

それと二人は簡単に信じ込まないでください!」

HAL「さて、次回はいよいよあの娘が登場するぞ!」

ユウ「次回のタイトルは『月夜の出会い』です。

久々にタイトル復活ですね」

一夏&和花「次回も見逃すな!」

8/29 改稿しました。

## Shift 3・2 「月夜の出会い」（前書き）

えーと、前話の投稿は別に間違つてボタン押したとか、そういう訳じゃないんです。

ちょっと調子が良かつたんで投稿したんですけど、なんか全然気付かれなくてビックリしました。

今は夏休みなんで、週末の22時その他、調子が良ければ火曜か水曜の22時にも投稿出来そうです。

連絡遅れてしません。

では、本編をお楽しみ下さい。

## shift 3・2 「月夜の出会い」

夜。とある一人の少女が、IIS学園の正面ゲートの前に立つていた。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

左右それぞれを高い位置で結んだ、肩に掛かるか掛からないかくらいの艶やかな黒髪が夜風に靡いている。

彼女が持つボストンバッグと比べて、彼女の体は不釣り合いなほど小柄だ。

顔立ちは日本人に似ているがよく見ると違う、鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ

そつとつて少女は上着のポケットから一枚の紙切れを取り出す。  
くしゃくしゃになつたそれは彼女の大雑把かつ活発な性格を如実に示していふと言えるだらう。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

何とも不親切な事に、紙切れに詳細地図は載つていなかつた。

少女は紙切れを不満と共に上着のポケットにねじ込んだ。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ

ぶつくせ言つながらも、足は動き続けていふ。どうやら行動派らしい。

(誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人)

地図を持つていないうが、とりあえず敷地内を歩きながらきょろきょろと人影を探す。

しかし、現在の時刻は午後八時過ぎ、どの校舎も灯りが落ちているし、当然生徒は寮にいる時間だった。

(せめて到着時間くらい配慮しなさいよ。これだから政府の連中は……)

少女の我慢が限界に達し、本気でISを用いて空を飛ぼうと考えた矢先、10メートル程前方のベンチに座っている人影を確認した。月は雲に隠れ、暗がりのためシルエットしか分からないが、IS学園の白い制服は夜でもよく見える。

しかも良く目を凝らしてみると、下はスカートではなくズボンだ。すぐ少女の頭の中に図式が現れる。

スカートではなくズボン　＝　IS学園に一人しかいない男子生徒  
＝　織斑一夏

(まさかこんな所で会えるなんて……ラッキー！)

少女は予期せぬ再会の予感に、胸の鼓動が速まっていくのを感じた。

(あたしつてわかるかな。わかるよね。一年ちょっと会わなかつただけだし)

久々の再開を前に、少女の心は期待と不安で入り混じる。

(大丈夫。大丈夫！ それにわからなかつたら、あたしが美人になつたからだし！)

しかし少女は持ち前の超ポジティブ思考にスイッチを入れ、止まつていた歩みを再開する。

同時に、幼馴染との感動の再会が脳内で組み立てられる。

「いち  
」

1メートルの距離まで詰まつた時、少女は幼馴染の名前を呼ぼうとした。

緊張のため声が裏返つてしまつたがそんな事は些末事だ。  
もつと大きな問題が少女の心を塗りつぶした。

「……何か？」

ベンチに座っていた少年が彼女の方に顔を向けた。  
声は彼女が知る幼馴染とは似ても似つかない。

雲が晴れ、月明かりが一人を照らす。

「アンタ……誰？」

月明かりに照らされた少年は、銀髪のショートカットにスカイブルーの瞳、体型はスマートで、声と同じく少女の知る幼馴染とは似ても似つかない。

(え、えつと……何コレ？ 何で一夏じゃないの？)

少女はただひたすら困惑した。一夏以外に男子がいるなど聞いてい

ない。

対する少年は少女を一瞥し、少し考えた後、声を発した。

「こんばんは」

「へ？ あ、こんばんは……じゃなくて！」

「じゃ、行きましょうか？」

「え？ 行きましょうか？」

「本校舎一階総合事務受付……で合ひてますよね？」

少年は勝手に歩いていく。少年の話の進め方に置いてけぼり感を感じた少女は、少年の後を追いかがりながら問い合わせる。

「え？ う、うん……っていうか何勝手に話進めてんのよー…」

「それじゃ順を追つて説明しましょうか。まずそのボストンバッグ、今の時期そんな物を持ち歩いているのはIIS学園への転入生か……誰かの頭を入れて持ち歩くような変質者くらいです」

「前者で当たりだけど……後者は絶対有り得ないから」

もはや少女の緊張感は吹き飛んでいる。ツツコミが冴えるのも当たり前だ。

「あはは、そうですね。次に時間帯ですけど、今の時間帯に出来く寮生はそういうませんから、ボストンバッグの件と合わせて転入者と考えられます」

「アンタはどうなのよ？ なんでこんな時間にあんな場所にいたの？」

「クッキーが焼き上がるまで時間がありましたし、今日は月が綺麗なので夜の散歩を……ね。それにここは男の居場所がほとんど無いですから」

「そう！ それよ！ アンタ本当に男なの！？ IIS学園に入学した男は織斑一夏ただ一人つて聞いてたんだけど！」

少女は声量が自然と上garのを感じた。人違ひなんていつ以来だろう。

今更ながら恥ずかしさが込み上げてくる。まさか赤の他人を幼馴染の名前で呼ぼうだなんて。

これでせうに抱きつこうものなら恥ずかし過ぎて死ぬ所だった。

少年はあちゃー、とばつの悪い顔をして頭を搔いた。

「あー……、僕の場合は秘密裏だつたものですから。メディアにも取り上げられませんでしたし」

「本当は男装趣味の女じゃなくて？」

「違います！ 僕は男です！」

少年は”女”的部分にやけに反応してきた。どうもあからさまな気がしてならないが……。

「それより、貴女はその織斑一夏と因縁浅からぬ関係、とお見受け

しますが？」

「…………」

少女は口をつぐみ、話を続けるよう促す。別に因縁という程深い関係では無いといつぱり心の中だけすることにした。

「先程一夏の名前を口にしようとした。それだけで親しい間柄だと察しがつきます。それに、この時期の転入……貴女は最初はIS学園に入学する気は無かった。しかしメディアで織斑一夏の名が取り上げられ、かつてIS学園に転入するという情報も入ってきた。だから政府に無理を言ってIS学園に転入させてもらつた……こんな所ですかね。どうやら貴女は一途で健気な人らしい」

「…………やつよ」

全て合っている。転入までの経緯も、少女の心情も。

「ねえ、アンタも一夏の事を名前で呼ぶからには、それなりに親しいんでしょ？」「うう、うう」

「一夏とは小学校の頃ちょっとだけクラスが一緒だったんですね。すぐ離れ離れになりましたけど」

成程、と少女は思った。少女は一夏と小学校高学年から一緒にいた少年に入れ違いになつたのかもしない。

「アイツ……一夏は元気？」

「ええ。それに、女子たちとも仲良くやつてますよ」

「ツー？」

少年の一言で少女の心は凍りついた。そう、H.S学園に男子は田の前の少年を含めて二人しかいないのだ。

一夏は羨妬目に見てもカッコいい。性格も良い。そしてISを扱える。女子からすればこんな優良物件そろは無いだろう。

「……一夏は、誰かと付き合ってるの？」

「傍田から見た感じですけど、アタックを掛けている女子が数名。……ただ、一夏本人は恋に関する自覚が無いですから。進展はほとんど無いみたいですね」

「……そ、う」

少女の意を決した質問に対する答えは、彼女が思つた程深刻ではないようだ。まだ望みはある。

「そうそう、一夏は一組のクラス代表になりましたから、貴女もクラス代表になれば何かと接する機会が増えるかもしれないですよ？」

「えー？」

少年からもたらされた情報は意外な物だった。クラス代表になれば一夏と接する機会が増える。しかし

「この時期にクラス代表を譲つてもらえると思ひません？」

弱気な少女の問いかに、少年は歩みを止めた。

少女が怪訝に思い、少年の前方を確認すると、灯りの点いたカウンターが見える。

「いや、あそこが総合事務受付らしい。」

少年は振り返り、少女を見た。目が合う。スカイブルーの瞳は全てを受け容れるような深さを持つており、吸い込まれそうな錯覚を覚える。

「何弱気な事を言つてるんですか？ 貴女程の実力者、今的一年生にはそういうませんよ。 中国の代表候補生、鳳鈴音さん？」

少年の口から出た名前に、少女、凰鈴音は目を見開いた。

「なんであたしの事、知つてんのよ」

「一夏と別れてからは手紙のやり取りをしてたんですね。貴女の事も書いてあつたんで、もしかしたらと思いまして」

「代表候補生だつて事は？」

「僕は一夏のようにTISに疎くはありません。各国の代表、及び候補生の名前等は把握しています」

鈴音の直感は告げている。この男、出来る。

「アンタは知つても、あたしはアンタの名前も知らないんだけど」

「…………そうですね。失礼しました。僕の名前は奈々瀬ユウです。これからどうぞよろしくお願ひします」

少年、奈々瀬コウは思ひ出したよひ三分の怒龍を口にし、右手を差し出した。

「良い名前ね。案内してくれてありがとう」

鈴音は礼を言いながらコウの握手に応じた。

「ただ案内しただけです。それよりも……これから落とすターゲットは手強いですよ？ 勿論恋敵も」

「分かってるわ。でもあたしに手を貸した以上、もちろん今後も協力してくれるわよね？」

鈴音の提案にコウは苦笑し、それでも「期待に添えられるかわかりませんが」と言つて承諾した。

「ではこれで。また明日」

「ええ、おやすみ」

鈴音は総合事務受付に、コウは寮に、互いに背を向けて歩き始める。

二人の出会いを知る者はまだいない

Schrift 3・2 「月夜の出金」（後編）

HAL「セレ、今回『登場頂くのは鳳鈴音嬢だ』」

鈴「よろしくね！」

コウ「ちゅうよぢょ、ちょっと待つて下さー」

HAL「なんだ？」

コウ「なんて言つか……」の出金には後々影響がありそうな気が……

…

鈴「何？ 何の話？」

HAL「お前は何を言つているんだ？」

コウ「僕が凰さん『フラグを立てたんじゃないかつて事ですよ！』

鈴「フラグ？ 何それおいしいの？」

HAL「コウもち着け！ 安心しな。

男としてのお前に一夏ほどの魅力は無い

コウ「もち着けじやなくて落ち着けですよ。

あと『男として』の部分がすいへ気になるんですが……」

鈴「おー！」

HAL「ござれわかる」

ユウ「何ですかその意味あり氣な『ちよつと待ひなさい』...」

……何ですか凰さん

鈴「あたしゲストよね!? 何で放置プレイされてんのよ...」

HAL「すまん、小さくて気が」

鈴「今何て言おうとした?」

HAL「……何でもない。ユウ、どうやらゲストは既に少し錯乱しているようだ。控え室へお連れしなさい」

ユウ「分かりました。では凰さん、こちらへ」

鈴「ちよつ、あたしの出番つてこれだけ!?

待つて! まだ何も言つて」

HAL「現実は残酷だ。レギュラーの座を奪つるのは厳しいぞ、鈴」

和花「テレビ番組じゃないんですけどこれ...」

ユウ「次回は...あれ? タイトル決まってないんですか?」

HAL「大人の事情だ」

ユウ「これテレビ番組じゃないんですけど...」

和花「次回もお楽しみに!」

8 / 29

改稿しました。

## schrift 3-3 「騒乱の夜」（前書き）

更新予告始めました。

詳しくはHAN-HANの活動報告ページを「覗」下さい。

## shift 3・3 「騒乱の夜」

「とううわけでー！ 織斑くんクラス代表決定おめでとうー！」

「おめでとー！」

クラッカーが破裂音と共に乱射され、紙テープが一夏の頭に乗つていぐ。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自飲み物を手にわいわい騒いでいる。

「…………」

「良かつたじゃないですか一夏、こんな盛大に祝つてもうれて」

ユウは「うう」と言つながら、一夏にとつては小指の爪ほどもめでたくない。

(何なんだこのパーティーは)

一夏が壁を見ると、そこにはデカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が掛けである。

どうしようもない事実にただ心の中でため息をつく事しか、今の一夏には出来なかつた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

誤解を『えぬよいつひむくが、わつかから相槌を打つている女子は一組ではない。

辺りを見回すと、会場には一組の人数以上の女子がひしめいている。

「ん？ ねえねえ、このクッキーって誰が持ってきたの？」

女子の一人がテーブルの上に置かれたクッキーに気付いた。あまりに自然に置かれていたので今まで気が付かなかつたらしい。

「あ、それ僕が作ったんです。お口に合えば良いんですけど……」

手作りだと吉田の言葉に女子の九割が目を光らせた。

「本妻の手料理……織斑くんに相応しいか味見しなきゃね」

女子の一人がそう言って一人の女子を引っ張つて来る。

いや、本妻じゃないから、つていうかそのネタ引っ張るのやめて欲しいんだけど。

という吉田の主張は女子たちに黙殺された。

「グルメクイーン、のほほんさん！ よろしくお願ひします」

「あいあこわ~」

(のほほんさんってグルメクイーンだったの…?)

全員が心中で突っ込んだが、ただのノリだ。気にしてはいけない。のほほんさんはクッキーを手に取り、まずは香りを堪能する。

「うへん、香ばしいココアの香りがグ～」

「一度ココアが田についたんで、ココア味にしてみました」

(ふむふむ)

何故か全員がメモ帳とペンを取り出し筆記体勢に入っているのは氣にしてはいけない。

何故か新聞部副部長までメモしているが、やはり氣にしてはいけないのだろう。

のほほんさんは一通り香りを堪能した後、クッキーを口に運び……

「あむ～」

『ああ～…』

ちゅ～と齧つたつとかせずに一口で一気に食べてしまつた。

いや、だからやつて毎回リアクション取らなくて良いから、つて言つた大袈裟過ぎるでしょたかがクッキー一枚で。

ところがそのシッ！」はやはやり黙殺された。

「むぐむぐ……」

クッキーを咀嚼するのほほんさんを、女子たちは固唾を呑んで見守る。

「うへん

どうやら咀嚼を終えたらしい。のほほんさんの感想に注目が集まる。

『ウルルの世界』

『全軍ツ！ 突撃イイイイイイ！』

のほほんさんが感想を述べた直後、女子たちがクツキー目掛けて突撃した。

「美味しい！まるで専門店のクッキーみたい！」

「外はサックリ、中はしつとり……凄い！」

「アーヴィングの香りも甘さも上品だね」

「紅茶欲しくなるなあ～」

成す術も無く蹂躪されていくクッキー達。  
しづく  
だが彼らは歓喜の声を上げて逝つた。

(作った甲斐はあつたかな)

ユウが感傷に浸かっている間に、クッキーは女子たちによつて殲滅されていた。  
そんなに美味しかつたのかと、ユウは田尻に熱い物が溜まつていくのを感じた。

クツキー達は満足して逝つた。それは喜ばしい事だ。  
たとえ作つた本人が全く食べられなかつたとしても、それは喜ばし

い」となのだ。

(味見で食べたけど……せめて一枚くらい残してくれても良かつたのに)

『奈々瀬くん！ いや、奈々瀬先生！』

なんとなくセンチな気分になつてゐるコウに、女子たちから声が掛けられた。

何事かと振り返ると、そこには両手を握つて会わせながら頭を垂れる女子女子女子

(僕はいつから新興宗教の教祖になつたんだ！？)

心の中で突つ込むコウをよそへ、女子たちが口の願いを口にする。

『作り方を教えて下さい！』

「はあ！？ ……わ、分かり、ました……？」

ユウは女子たちの氣迫に氣圧され、田を白黒させながら首を縦に振つてしまつた。

『じゃあ今度の週末！ 是非お料理教室を！』

「いや、僕にも時間の都合が……」

『是非お願いします！ 奈々瀬先生！』

「……分かりました。何とかしてみます

押しに弱いユウ。否、女子の押しが強過ぎたのだ。  
どんなに空氣の読めない男でも、イエスと頷くより他は無いだろう。

「まあ、なんて言つか……頑張れよ」

「今更現れて何を言つて居るんですか一夏……」

今更ながら現れてユウを慰める一夏。だがユウは知つて居る。  
一夏は明日からまた女難に苦しむ事になるといつ事を……。

「ほんばんは～！ 新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と奈  
々瀬ユウ君に特別インタビューをしに来ました～！」

どうやら今までクッキーに夢中になつていた新聞部が仕事を始めた  
らしく。

会場のボルテージがより一層高まる。

「私は一年の薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてまーす。は  
いこれ名刺」

一夏とユウは薫子から名刺をもらつ。

「あ、奈々瀬くん、クッキー美味しかったよ。御馳走様。それと週  
末のお料理教室も参加するからね」

「あ、あはは……お手柔らかに」

また一人厄介なのが来る……ユウはそう思つて冷や汗を流した。  
薫子はユウから離れ、一夏へのインタビューを開始する。

「ではすばり織斑君！ クラス代表になつた感想を、ビリビリー。」

「えーと……まあ、なんといつか、がんばります」

「えー。もつといこ「メンントちゅうだいよー。俺に触るとヤケドするぜ、とかー。」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！ ……じゃあまあ、適当に捏造しておつからいいとして」

薰子は畠山とする一夏を放つて、一夏に向けていたボイスレコーダーを今度はコウに向けてきた。

「じゃ、ユウ君の「メントもあうだい」

「あ、はー。一夏はシャイなだけで女の子にはすこしく興味がありますから、そこは履き違えないで下せこ」

「さすが本妻。夫を庇う発言、流石だわ」

「今の言葉のどこにそんな要素が含まれているんですか……」

「これは捏造いらぬわね」

「そう言わると余計不安なんですけどー。」

そんな事無いわよー。と、子供みたいな無邪気な笑顔で薰子は答える

た。

そして今度はセシリ亞にインタビューをし始めた。インタビューを受けているセシリ亞はコロコロと表情が変わつて、見ていて飽きないな、とコウは思った。

「じゃあ、最後に二人の写真ちょうどいい。それで、並んで並んで

そう言られて、右からセシリ亞、一夏、コウの順に並んだ。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は〜?」

いきなり出された問題に一夏は田を白黒させる。

「え? えっと……に」「

「37・375」

「わお、コウ君正解!」

カメラのシャッターが切られる。だが……

「なんで全員入ってるんだ?」

何故か一組の全メンバーが、青いハリネズミもかくやとこうつ速さで一夏の周りに集まっていた。

そのせいかセシリ亞と一組のメンバーがワイワイと言い争い、一夏がそれに巻き込まれる。

「やれやれ

コウは騒ぎから少し離れた場所で、壁に背をもたれて一息つく。  
そこへ薰子がやってきた。

「お疲れ様～」

「お疲れ様です。良い写真撮れましたか？」

「モチロン。あ、やうやく。たつちゃんから伝言

たつちゃん。その単語を聞いたコウの雰囲気は一瞬で切り替わる。  
無論悪い方に、だが。

「『いざれスカウトする事になるから、その時はヨロシク』だつ  
て」

「そんな……もう少し平和でいいわると思つたんですが……」

「あはは……少しほ同情するよ。じゃ、頑張つてね」

薰子はそう言って去つていった。冗談じゃない、もう田を付けられ  
たつて言つのか。  
頭を抱えるコウを傍田に、夜は騒がしく更けていった。

### shift 3・3 「騒乱の夜」（後書き）

ユウ「今日は散々でした……」

HAL「御愁傷様でいゝす（笑）」

ユウ「いきなり何ですかその言ひ草はー…？」

HAL「字面通りの意味だ」

ユウ「意味が  
」

? ? 「ふつふつふ、私から逃れる術など有りはしないわ

ユウ「うう、背筋に寒気が……それに誰かに見られてる気が……」

8/29 改稿しました。

Shift 3-4 「人の話はちゃんと聴け b よ千冬」(前書き)

外伝の執筆があまりにも進まなくて泣きたいよ。——

## shift 3・4 「人の話はちゃんと聴け b ボトム」

「織斑くん、奈々瀬くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

朝、ユウと一夏が席に着くなりクラスメイトが話しかけてきた。無論女子の、だ。

「転校生? 今時期に?」

一夏は怪訝な顔をする。四月のカレンダーはまだ役目を終えていい。なぜ入学ではなく転入という形になつたのか。一夏が気になるのはそこらしい。

それより一夏は女子と話す事に対して少しづつ慣れてきているようだ。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってぞ!」

代表候補生という単語に敏感に反応する女子が約一名。

「あら、わたくしの存在を今更?」

「ふーん。ユウ、何か知らないか?」

「一夏、せめてセシリ亞さんが言つてから質問して下さー」

「あつ、悪い」

「一夏、人の話は最後まで聞けと小学校で習つただろ?……」

「……今の篠ノ内さんの言葉には全面的に賛成ですわ」

何時の間にかやつてきて言い放った幕の言葉にセシリ亞は何度も頷き、一夏は「悪かった」と数分間平謝りをせられた。

良い子はちゃんと人の話を聞こう。

「で、ユウは何か知つてるか?」

「知つてるも何も、昨日会いましたよ」

「「「何つ（ですって）…？」」

がたたたつ。三人がユウを問い合わせんとばかりにユウに詰め寄る。ユウはまあまあ、と三人を落ち着かせた。

「で、どんな奴なんだ?」

一夏の質問に、ユウは一囁空を見やり、口を開いた。

「それはそうと一夏、クラス対抗戦の準備は進んでるんですか?」

「おー、今<sup>露骨</sup>に話題を変えただろ」

「いづれその意味が分かりますよ」

ユウに邪険にあじらわれ、一夏は不満気だ。そこへセシリ亞が割り込んだ。

「そう! そうですね一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦

的な訓練をしましょ。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持つてるのはまだクラスでわたくしと一夏さん、そしてコウさんだけなのでですから

セシリアは『だけ』の部分をえらく強調して言った。

セシリアの言葉に対し一夏は思に出したよつに再びコウに詰め寄る。

「コウ～。今回ばかりは手伝ってくれないか？」

一夏の言葉に、笄とセシリアの殺氣の籠もつた視線がコウを貫く。

(「(れだから)コウ(さん)は……」)

(またか……)

コウは一人の視線にため息をついた。

「確かに、そろそろ僕も手伝わねばと思います。零落白夜の件もありますし。しかし今回も時間的に……」

「時間つけて……ああ、お料理教室か」

コウの、「料理は前準備が大切なんです」という補足に一夏は納得して苦笑した。

一夏がクラス対抗戦に勝てば学食デザートの半年プリ パスが配られるというのに、コウのお料理教室に参加しようとは。女子はなんて現金なんだ、とコウは苦笑せずにはいられない。

「奈々瀬先生！ お題は何ですか？ 私ケーキが良いんですけど」

「あつ、私はプリンが良いー！」

お料理教室という単語を聞きつけたクラスメイト達が好き勝手に希望のお題を言つていぐ。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリー・パスのためにもね！」

クラスメイト達はさう一夏にエールを送つてくれる。

「兎を追つ者は一兎も得ず、といふことわざがコウの頭の中をよぎつた。

いや、お料理教室は確実に得られるか。

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

クラスメイトの一人がそんな事を言つた。だが、その情報が通用するには昨日までだ。

なぜなら

「　　その情報、古いよ」

教室の入り口から声がした。ユウが昨夜聞いた声となんら変わり無い。

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「やつよ。中国代表候補生、鳳鈴音。ファン・リンイン 今日は宣戦布告に来たつてわけ

（もういいや。お料理教室の事だけ考えよう。どうせ一夏田当てなんだし）

最早ユウに話題についていく気は無かった。

教室の喧騒をどこか遠くの事のように聞き流しながら、ユウは今週末のお料理教室をどう乗り切るか、ただそれだけをひたすら考えた。

### Interlude 奈々瀬ユウ

お料理教室の料理、何にするべきか。出来れば時間も手間も掛からない方が良い。

やはりシンプルにクッキーで行くか？

しかしクッキーでは少しシンプル過ぎないだろ？

昨日の「ココアクッキー」は盛況だったし、そんな事は無いとは思つが

……。

### パシーン

そもそも『お料理』教室なんだから、お菓子に限定する必要性はない。

だがやはり「ココアクッキー」が盛況だったわけで、文脈からしてクッ

キーの類を教えて欲しいと見るのが妥当だろ？

### パシーン

「とりあえずクッキーで行こう。全ての条件にマッチするのは今のところこれしかないし。

となると、後はどんな味で行くか。」

「奈々瀬」

「あ、はい」

「ん？ 今誰かに呼ばれたか？ 反射的に返事を返してしまったが… 確認するといざやから織斑先生らしい。」

「リリの答えは？」

「クッキーです」

パンツー！ 出席簿アタックの一撃で完全に意識が外に向いた。無意識に口をついて出てきた言葉が答えると捉えられたらしく。ガッデム。やってしまった。

「まだ昼には早いぞ。お前りじくない。何を考えていたんだ？」「

「……すみません。以後気を付けます」

言えるわけ無いだろ、週末のお料理教室の事を考えてましたとか。言つたら「トーラン」って一蹴されるに決まっている。  
とこうか千冬さん、見た目も実績も世界でトップクラスなのにビル

して家事が

パンツ！

「下らん事を考えるな。授業に集中しろ」

「……はい。すみません」

自分に非があれば素直に謝る。たとえ心を込めなくとも建前上は。单纯だがとても大切な事だ。

#### Interlude out

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みに入り、開口一番篠とセシリアが一夏に文句を言つてきた。

「なんでだよ……」

篠とセシリアは、午前中だけで山田先生に注意5回、織斑先生に3回叩かれている。

意中の男性にもう一人女がいたのだ。集中できなくなるのも仕方が無い。

「まあ、話なりメシ食いながら聞くから。とつあんず学食行いひが

「む……。ま、まあお前がそいつ言ひのなら、ここだらひ

「へ、そりですわね。行つて差し上げなこともなくつてよ

と、二二二一 夏はコウガになつたことに気が付いた。

「あれ、コウは?」

「奈々瀬くんなら、なんかブツブツ言ひながら教室を出でこつたみたいだよ」

「ふ～ん……珍しいこともあるもんだな。じゃ、俺たちは学食行くか」

この後学食でまた一騒動あるのだが、簡潔にまとめる

『一 夏の女性関係は面倒な事』の上ない

とこつ事だ。一 夏、面倒でも事情へりこせんと説明してお  
じづ。

教室を出て単独行動をしていたコウは、家庭科室に来ていた。

「あつたんだ……家庭科室」

そりや学校なんだから、あるに決まってるだろ。と、一夏がいれば答えるだろ。

ちなみに料理部の拠点もおそらく同じだと考えられるが、昼休みに入つても人気は無い。

「場所は……」ヒといいか。2クラス分入れば充分なんだし」

家庭科室の広さは、元々複数クラスでの授業を想定されていたのか、結構広い。

ユウは入口から教室の広さを測ると、続いて調理器具の確認に移る。

「やつぱり国立だけあって器具は豊富だな。ヒの入口に食器洗濯機、備え付けのオープンまである。こんな普通の学校にある訳無いじゃないか……」

さすがHS学園。如何なる面においても普通の学校を遥かに凌駕するクオリティだ。

これなら問題などあるはずが無い。

「十分十分。さて、あとは材料だな……」

「あつ、な～んはつけ～ん！」

いきなり声を掛けられ、ユウは声のした方を向いた。

「……驚かないで下をこよ、のほほんさん」

家庭科室の入り口にのほほんさんが立っている。

その他に女子が数名、のほほんさんの後ろから室内を見回している。

「「「めん」「めへん。それでそれで、なにしてるの~？」

「下見です。……お料理教室の」

「先生…。」「でやるんですか？」

のほほんさんの後ろにいる女子の一人が手を挙げて質問した。  
別にウソをつく理由は無いので、ユウは正直に答える。

「そうなりますね。でも、材料の調達が……」

「先生！ 私手伝います！」

また同じ女子が手を挙げて言った。その後、私も、私も、と、全員  
が手を挙げた。  
「どうやら手伝ってくれるらしい。

「じゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます。お料理教室のお題はクッ  
キーで行こうと思つてるんですけど

一通り説明すると、全員「わかりましたー」と言つて去つていった。

頼んでおいてなんだけど、本当に大丈夫か？  
と、少し不安になるユウなのであった。

Shift 3・4 「人の話はちゃんと聴け b サキタ」（後書き）

一 夏「おい作者！ 何で俺と鈴の絡みが」とくカットされてるんだ！？」

HAL「え？ だつて尺足りなかつたんだモン」

一 夏「アニメじゃないんだぞ！？ 読者が混乱するだろうが！」

HAL「大丈夫大丈夫、きつとみんなアニメくらい見てくれてる」  
A「

ユウ「それに、この作品の主人公は僕であつて君ではありません。最初の前書きにも僕主体で行くと確かに」

一 夏「だからつてこんな横ほ」

HAL「さつさと先に進めたいんだ。無駄口叩いてないでさつさと行け」

一 夏「これは30分アニメか！？」

鈴「…………あたしの出番は？」

ユイ「むしろ私の出番は？」

HAL「DA MA RE」

鈴&amp;ユイ「ハイ、黙ツテマス……」

8 / 29

改稿しました。

**shift 3・5 「複雑過激な女心」（前書き）**

昨日はエヴァの日だつたんで、多く分皆も生で見たかったんじゃないかな～と思つて更新しませんでした（笑）

久しぶりの河井さん暴走回です（笑）

では、本編をお楽しみください。

## shift 3・5 「複雑過渡の女心」

Interlude 奈々瀬ユウ

現在は夕食後、就寝までの自由時間。場所は寮の自室。

「ねえねえ、奈々瀬くん！ 見て見て！ この娘、可愛いよね～。これが男だなんて信じられないよね～」

備え付けのパソコンでR・18なゲームをしながら田を輝かせているのは、ルームメイトの河井和花さんだ。

当然ながら彼女は女で、かつR・18に満たないはずなのだが……何故平然とやってるんだ？

キラキラした田をこすりながら向ける河井さん。つん、何を言いたいのか良く分かるよ。

「また女装しちゃなんて言われてもしませんからね」

「ちえっ、ケチ」

「女の子がそんな言い方する物じゃありませんよ」

「奈々瀬くんのいけば」

「だからといって言い方を変えれば良いといつ物でもありません」

「いいもんいいもん！ 私、だつてお料理教室参加するもん！ 奈々瀬くんにどびつきつ可愛いエプロン着せちやつもん！」

「エヘヘ、田中。ただ、Hプロンは目前があるので結構です」

邪険にあしらわれたせいか、河井さんが押し黙る。

ちなみに僕はベッドに座つてお料理教室のレシピを作成中だ。  
河井さんの方に背中を向けてるので河井さんの表情を知る事はできない。

「なあ～なせくう～ん」

突然背中から河井さんの声が聞こえた。

ちなみに今のイントネーションはルンが「ふう～じけや～ん」と、ベッドにダイブする時の物と同じだ。

……ダイブする時の！？

慌てて振り返ると、田の前に某怪盗ジョーク顔でダイブする河井さんの姿が。

さすがに服は脱いでないのであしからず。

「なー？ ……わふっ！」

僕は勢いのまま河井さんに押し倒された。あれ？ 似たような状況が前にもあったよつな……。

「邪険にあしらわれるとな……なひばー キミの視線を釘付けにするッ！」

そつまつていきなり服を脱ぎ出す河井さん。  
待て、セリフが色々と可笑しい。それからそんな方法じゃ田を釘付けにするどころか思いつきり逸らされるぞ。

しかし今の僕にこの状況から逃れる術は無い。だって河井さんの足が僕の腰をホールドしてるんだよ？しかも何故か外れないし。何コレ、強制イベント？

「どう？」

河井さんが服を脱ぎ捨てた。下着の上から見え隠れする果実はそれなりの大きさだった。だいたいこくらい？「とか花も恥じらう乙女がそんなことして良いのか？　良いのか！？」

「あつ、奈々瀬くん顔赤いよ」

「もう気が済みましたか？　済んだのなら早く退いて下せこ」

さすがにずっと直視してると誤解されそつなので顔を逸らして両手をホールドアップの形にする。

だがしかし、僕は河井さんの思考を見誤っていた。

「……これで終わりだと思つ？」

「……へ？」

河井さんの目が妖しく光った。はつ！　今脳裏にひらめきの光が奔つた。

この状況はものすごくマズイ。そして時既に遅し。敵の謀略に嵌められた僕は成す術も無く陥落するのだ。

「花も恥じらう乙女の柔肌を見た以上、タダで逃がすと思つ？」

「…………」

いや、別に見たいなんて一毫もしていないし、むしろそつちが勝手に見せてきたんじゃないか。  
とは言えず。しかし沈黙をどう捉えたのか、河井さんは顔を近づけてきた。

「…………あの、一体何を」「

「え？ 何も言わないからオーケーだと思つて……」

「何が？」

「キス。」

「はあー！？」

びひしてそうなるー？ 思考パターンがひとつずれてると前々から思つてたけど、まさかここまでとは……。

「待つて下さー！ そんな軽々しくしないで下さー！…………それ  
に僕初めてだし」

「初めて！？ なら奪うしかないじゃないかー！」

最後の方の呟きを田代とく聞きつけた河井さんは、今まで以上に強引に唇を奪いに来た。

マズイ！ これは非常にマズイ！

僕は必死に河井さんのホールドから逃れようとするが動けない。  
ぐつ、どうして僕は河井さんのホールドから逃れられないんだ！？

呪いか何かか！？

「大丈夫、痛くしないから」

痛いキスつて何なんだよ！？ ヤバ、ロックオンされたし！  
河井さんの顔がだんだんと近付いてくる。  
くつ……このままじゃ犯られるッ！

「…………！」

突如部屋のドアが叩かれた。突然の出来事に河井さんの動きが止まる。

「…………どうやら来客みたいですよ？」

僕の言葉に河井さんはしばし考えた後、再び僕に顔を近付け始める。  
何故に？

「きっと間違いか何かだよ。こんな下品なノックする人なんて知らないもん」

下品つて……音だけで決め付けるのはよ

「…………！」

「奈々瀬ユウ！ 居るんでしょー！？」

ドアが再び叩かれ、外から声が聞こえた。この声は確かに

「……凰さん？」

「何？ もしかして奈々瀬くん……女がいるの！？」

「違います。どうやら僕のお密さんみたいです。……退いてくれませんか？ あと服もけやんと着て下さい。誤解されたら面倒ですか」

「う

はいはいと囁ひて河井さんはあっせつと退いてくれた。

「はあ……興がさめたわ」

あんた一体どこの武士だよ。

河井さんが服を着たのを確認してからドアを開ける。

「遅い。いつまで女の子待たせんのよ」

「……すみません」

ドアの前にはボストンバッグを抱え、尻に涙を浮かべた凰鈴音が立っていた。

聞いていた。

「つまり、約束を違えた一夏に失望して怒り、そんな自分に嫌気が差してどうすればいいか迷った拳句、僕の所に来た、という事ですね」

「…………」

ユウの確認に鈴は無言で頷く。その顔にはいつもの自信や明るさではなく微塵も感じられない。

「別に凰さんは悪くないと思こますよ？」

「でも…… アイツ、私の事嫌いになつたかも」

鈴から弱気な言葉が漏れる。重症だ。ユウはそう感じ取った。

「まだ幼馴染の域を出ませんから、致命的なミスだとは思えませんが……」

「え？」

「まだ仲直りのチャンスは残つてゐる、といふ事です」

鈴の顔から翳りが消えた。機会を逃さずユウは続ける。

「クラス対抗戦なら、仲直りをするには絶好のチャンスです。もしかしたら、トクベツになるチャンスも巡つて来るかも知れませんよ？」

トクベツ。その単語を聞いた瞬間、鈴はベッドからすべり、と立ち上がった。

「相談に乗ってくれてありがと。後は自分で何とかする」

そう言つて鈴はさつたと部屋を出て行つた。さすがは行動派、とコウは苦笑した。

「ねえねえ、奈々瀬くんは恋のキュー・ペッシュでもやつてるの?」

和花がさつきまで鈴が腰掛けっていた所に腰掛け聞いてきた。

「否定はしません」

コウの答えに和花はふうへん、と何度も頷く。そしてとんでもない事を言つた。

「でもそれじゃ、奈々瀬くんの命を狙う人がまた一人増える訳だね」

「…………？ それは一体どうこり…………！？」

少し考えてコウは気付いた。気付いてしまつた。一夏に女を押し付ける事が、自分の首を絞める事に繋がつてしまつといつ事を。しかしコウは諦めない。

(いや、誤解を解く機会は必ず来る)

まだコウには起死回生の一歩が残つているのだから。

「…………もう寝ましょーか」

「……そうだね。もう遅いし」

ユウの提案に和花が乗り、一人は同時に床についた。  
未だに和花が夜這いをかけてくるのではないかと心配なユウだが、  
今日も和花が夜這いをかけてくる事は無かつた。

そして時間は過ぎ去り、金曜の放課後。家庭科室。

「ハ、これは……」

ユウはとんでもないものを手にする。

shift 3・5 「複雑過敏な女心」（後書き）

HAL「今日はアンケートを取らうつと申つ」

ユウ「いきなりですね。で、どんな内容なんですか？」

HAL「クラス対抗戦の乱入者についてだ。詳細は以下を見て欲しい」

Q・クラス対抗戦の乱入者はどれが良いと思つ?

1・原作通りでおk。

2・せつかく原作にガンダムシリーズ載せてるんだから、設定はともかく有効に使おうぜ！

3・1とか2とか、片方だけなんてどんなイメージゲーだよ！両方出しちまえ！

HAL「回答は感想かメッセージで送つて欲しい。

回答期限は9月2日までだ」

ユイ「2と3については、一応参考までにどんなのが良いか、言つてくれると助かるなあ～」

HAL「なんだユイ、いたのか？」

「ゴイ」作者が本編で使ってくれないからね。こいつは出て来ない

8 / 29 一部改稿しました。

## shift 3・6 「平和とは長く続かない物である」（前書き）

前回のアンケート締め切りました。2で行きます。

外伝始めました。場所はこちら。

<http://ncode.syosetu.com/n2667>

w/

来週は大学の講義があるので更新できやうもありません。

## shift 3・6 「平和とは長く続かない物である」

金曜日の放課後、家庭科室。

ユウは授業終了後、すぐに隣の準備室で準備を始めた。

時間が経つにつれ、女子のざわめきが大きくなつてくる。

手伝いをしてくれた女子たちは優秀だったので、準備に時間は掛からなかつた。

コンコン、と家庭科室へのドアがノックされ、和花がドアを開けて覗き込んでくる。

「せんせー、そろそろお時間ですよー」

「はいはい、今行きます

ユウは和花に続いて家庭科室へ足を踏み入れようとして

「…………！」

すぐさまドアを閉めた。

Interlude 奈々瀬ユウ

はあ、はあ……落ち着け、落ち着くんだ。とりあえず状況を整理しよう。

僕は一夏のクラス代表就任パーティーで間違つてクッキーなんか作つて来たせいで、その味に惚れ込んだ女子（という皮をかぶつた狂徒、もとい教徒）にお料理教室を開いて欲しいと頼まれ、仕方なく、嫌々ながら（それでも準備に怠り無く）引き受けた。生徒数はおよそ2クラス分60人くらい。およそ2クラス分60人くらい。（大事な事なので2回言いました）

さて、改めて人数を確認してみよう。

僕は再びドアを開けた。明らかに60対以上の視線が僕を貫く。こっち見んな。

パツと見、当初予定していた数の倍くらいはいる。

よく見るとリボンの色が違う。2・3年生も結構参加しているようだ。

よく若造の料理教室に生徒として参加できるな。恥は無いのか？

プライドは無いのか？

そういえば一夏と篠、セシリ亞、鈴は見当たらぬ。どうやら参加していないようだ。

「……どうしてこんなに？」

「奈々瀬くん、ごめん」

手を合わせながら申し訳なさそうに前に出てきたのは黛先輩だった。アンタ一体何したんだ。

「ちょっとと話したら何故かこんなに集まっちゃって」

「ちょっとと話したら何故かちょっとと集まる数とは思えませんが？」

そう、ちょっとと話しただけで集まる数ではない。噂話がよほど広ま

らない限り……ん？ 噺話？ ……あ。

「……しまった。I-J-HはI-S学園だった」

そう、I-J-HはI-S学園。情報の流通速度は電腦世界でさえ遠く及ばない。

たとえわずかでも情報が漏洩すれば瞬く間に学園全域に広まる。それがI-S学園。

「どうかした？」

「何でもありません。それよりも、材料が足りるかが問題です」

材料は確かに60人分しか無いはず。足りるはずが無い。  
どう丁寧しようか悩んでいると、後ろから肩を叩かれた。  
振り返るとのほほんさんが心配するなつて顔をしている。

「な~ゆん、大丈夫。こんな事もあらつかと材料は多めに用意しておいたから」

「えー？」

よく確認すると、100人分くらいの材料が用意されている。  
うん、何とかなりそうだな。それよりこんなに用意して、余つたらどうする気だつたんだろう？

「よ、良かったわね。それじゃ  
がしつ。

「ま ゅ すみせんぱい？」

「！？」

そそくさと立ち去ろうとする黛先輩の両肩をホールドする。  
逃げる気かい？ダメだダメだ、全然ダメだ。

「どうぞ存分に取材なさってください。大好きなんでしょう？取  
材」

（生かして帰すと思ったら大間違です。埋め合わせをして頂かな  
くては……ね）

「…………（コクコク）」

「どうやら理解して頂けたようだ。黛先輩は無言で首を縦に振つてくれ  
た。

「時間が押しています。始めましょうか」

僕が振り返つて言つと、後ろのほほんさんと河井さんが頷いた。  
この一人は今日、僕のお手伝いをしてくれる。こうこう時はありが  
たい。

「えー、今日はお集まり頂きありがとうございます。講師を務めさ  
せて頂きます、奈々瀬ユウと言います。今日はよろしくお願ひしま  
す」

僕が挨拶をするとパチパチと拍手が起つ。別に要らないのに……。

「今日皆さんに作つて頂くのは、シンプルでお手軽なバターケッキ

ーです。意外に思つ方が居るかもしませんが、シンプルな分應用  
が利き、アイデア次第で　』

青年講義中。

結論。特筆すべき事は起こらなかつた。女子が暴走する事が無ければ、クツキーが爆発する事も無かつた。  
黛先輩が意外な統率力を發揮してくれたおかげで、人数の多さはあまり問題にはならなかつた。

今となつては問題が起こらない方が色々と不安だが、問題が無いに越した事は無い。

お料理教室は無事終了し、僕は晴れてお役御免に

『先生！ 次回も楽しみに待つてます！』

ならないようだ。……はあ。

Interlude out

「……で、目的の物は手に入らなかつた、と

「うん。予想外に人が多くて」

「それでは材料を多めに用意した意味が」

「まあまあ、責めてもクッキーは出で」ないわ」

「……しかしあじょ」

「その呼び方は止めてつづりも書かれてるでしょ」

「申し訳ありません」

「話を聞く限り、2、3年生を呼んだのは薫子みたいね。あの子がそんな浅慮な事するかしら?」

「……と、言いますと?」

「薫子は私たちの計画に気付いていたのかもしない。そう、ラクして美味しいと評判のクッキーを手に入れようという計画で……」

「まさか……妨害、ですか?」

「可能性は否定できないわ。薫子がそこまでするからには、余程美味しいんでしょ? 奈々瀬コウの手作りクッキー。口惜しいわ」

「もぐもぐ 「まつま」

「……本音? そのクッキーは?」

「余ったから持つてきた」

「あんなに早く出しなさい!」

「本音でさえ隠そつとすぬ……『いつや』る余程美味しいらしいわね。本音、一枚頂戴」

「これ？わたしの手作りだけど？」

.....」

時の流れという物は遠慮なる言葉を知らないらしい。

四月のカレンダーはお役御免となり、今は五月。

既にケラヌ戦役当日まで歩を進めていた

第一アーリーナ第一試合は、原作通り一夏と鈴という形になつてゐる。現在、ピットで一夏がこれまでにあつた事をコウに話している。

「……」

「……最悪じゃないですか。どうして君はいつも、痛い男になつたんですか？」

「知るか！」

鈴と仲直りしていない拳句、また怒りさせて試合に臨む一夏。もはや救いようがない。

「やれやれ。一回痛めつけられた方が良いんじやないですか?」

「マジでっ。」

「真剣で」

コウの言葉が死刑宣判のよつて一夏にのしかかる。  
じゃあ、頑張つて下せことと言つて立ち去るコウだが、去り際に、

「勝つても謝らないとダメですよ」

ヒトアメを刺し、一夏はハハハ、と乾いた笑いを浮かべた。

「こよいよ始まりましたね」

ピットでリアルタイムモニター眺めながら、真耶が誰こといつ訳  
でもなく言った。

「うむ」

傍に控える千冬が真耶に返事を返した。

現在リアルタイムモニターには、鈴と激しい近接戦闘を繰り広げる  
一夏の姿が映し出されている。

「せつかくだ。奈々瀬、凰のヒツ、『甲龍』ソロンロについて説明しin」

「何故僕が やります。是非やらせて下さい」

最初は渋つたユウだが、千冬に一睨みされ仕方なく説明を始めた。

「甲龍は中国の第三世代EISです。何らかの性能が著しく高いという訳ではなく、派手な武装も持っていないません。しかし、その性能バランスによる安定性と武装のエネルギー効率には目を瞠る物があり、操縦者次第ではオールラウンドに戦えるだけの戦闘力があると考えられます。

また、甲龍の第三世代型兵器は

「

ユウの説明の途中で観客からどよめきが奔った。

モニターには何らかの攻撃を食らって地面に叩きつけられる一夏の姿が映し出されている。

まるで見えない拳で殴つたかのような攻撃が、甲龍から発せられている。

「なんだあれは……？」

モニターを無言で見つめていた篝がつぶやく。  
その呟きに答えたのはユウではなく、同じくモニターを見つめていたセシリ亞だった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

律義に説明したセシリ亞だが、途中から篝はその言葉を聞いてはない。

モニターの中で一夏がダメージを受ける度、篝は表情を不安で歪め

ていぐ。

「……厳しいですね」

「いや……」

「勝負はこれからですね」

「え？」

真耶のつぶやきを千冬とコウが否定した。

「一夏の田はまだ諦めている様には見えません」

「何かを狙っている……といつ事か？」

コウの言葉の意味を幕が尋ね、ええ、とコウが返す。

「おぞらく『イグニッシュン・ブースト瞬間加速』だろう。出し所さえ間違わなければ、代表候補生クラスとも互角に渡り合える」

コウの代わりに千冬が幕の質問に答えた。いまいち理解できない幕にコウが補足を付け加える。

「ちなみに瞬間加速とは、その名の通り、一瞬でトップスピードを出す事によって相手との間合いを詰める技能です。ただし軌道は直線的で、それゆえ奇襲という形で用いられる事が多く、しかし一度使えば見切られてしまうという欠点があります」

「なるほど……」

モニターの中の一夏が瞬間加速で鈴との距離を詰め、零落白夜も用いて斬撃を放とうとする。

だが、一夏の斬撃が繰り出される直前、真耶が異変に気付いた。

「これは！？ 上空に熱源反応！ 大出力ビーム、来ます！！」

「何つ！？」

次の瞬間、強烈な音と衝撃がアリーナ全体に走った。

(……来たか)

コウは心の中でつぶやき、モニター越しにまだ見ぬ相手を見据えた。

## shift 3・6 「平和とは長く続かない物である」（後書き）

鈴「なんでまたあたし達の話がカットされてるのよーーー！」

あたしの努力はどこ行つたの！？ ねえーーー！」

一夏「それになんで戦闘シーンがダイジェストみたいになつてんだよ！」

俺の活躍は！？ 今回結構頑張つたんだぞ！？」

HAL「そんな物一々書いてたら話が進まなくなるだらうへ。俺だつて早く先に進めたいんだ。我慢しなさい」

鈴「我慢しちつて！？ そもそもあたしの登場シーン自体少ないじやない！」

HAL「まあ落ち着け。次良い所見せれば、もしかしたら一夏と良い関係になれるかもしねんぞ？」

鈴「えつー？（赤面）」

笄&amp;セシリ亞「「！？ 待つた！ 納得行かん（行きませんわ）！…」「

一夏「俺は仲直りできるなら万々歳だぜ」

一同（ダメだコイツ、早く何とかしないと……）

ユウ「……そりゃ、主人公、僕ですよね？」

まさか説明キャラになつたりしませんよね？」

HAL「安心しろ。お前は不動の主人公だ」

和花「次回もお楽しみに」

## Shift 3・7 「最強の盾、最強の矛（前編）」（前書き）

この前の金曜日は外伝の更新をしたのでこれからは更新しませんでした。

是非外伝も見てね

それはさておき。今回のお話の乱入者については、アンケート通り  
ガンダムシリーズから出しました。

そうです。題名が既にネタバレです（笑）

知ってる人は知っている、あの超有名な風神雷神です（笑）  
無論弱点も原作通りです（笑）

## Shift 3-7 「最強の盾、最強の矛（前編）」

「「...?」「

突如アーナ内に走った爆音と衝撃に、一夏と鈴の動きがピタリと止まる。

ステージ中央からは、何らかの衝撃で巻き上げられた砂煙が上がっている。

「お、おい！ 一体何が起ったんだ！？」

状況が分からず混乱する一夏に、鈴からプライベート・チャネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よー。すぐヒューリックに戻つて!』

一夏はその言葉に尋常ならぬ狂気を感じ、すべひヒューリックに戻るつとするが……

ステージ中央に熱源。所属不明のエリと断定。ロックされています。

「なつ  
」

敵は見逃す氣など無いようだ。しかも乱入者は、ISと同じ物で作られていると言つアーナの遮断シールドを貫通させる事ができる程の攻撃力を持つており、しかもこちらをロックしている。

つまり、背中を見せれば後ろから刺される、と言つ事である。

『一夏、早く!』

「タイミングを逃した! 今背中を見せれば後ろから撃たれる!」

一夏はまだ初めての相手との回線の開き方がわからないため、普通にオープン・チャネルで鈴に言った。

「ならあたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「女を置いて逃げるなんて、そんなの男のする事じゃねえ! 僕も戦う!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからしじょうがないでしじょうが!」

鈴の言葉が一夏の胸にグサリと突き刺さる。そんな遠慮無く言わなくとも良いだろと一夏は思った。

ちなみに、一夏がプライベート・チャネルで返さなかつたので、鈴も普通に喋っている。

「別に、あたしも最後までやり合いつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて事態を收拾」

「あぶねえっ!..」

一夏は視界の端に浮かぶ光を見て本能的に鈴の体を抱きかかえてさらづ。その後、極太のビームが切ついた空間を灼きながら通り過ぎた。

「ビーム兵器かよ……。しかもセシリヤやユウのヒヒより火力が上

だ

ハイパー・センサーの簡易解析でその熱量を知った一夏は戦慄した。まともに当たれば火傷では済まないだろう。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！ 放しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな。 つて馬鹿！ 殴るな！」

「う、いのちにいのちにいのちにいのちに…」

鈴は顔を真っ赤にしながら一夏の顔にグーパンチを連打する。お姫様抱っこされてたらそれはそれは恥ずかしい事なのだが、一夏は本当に女心に疎い男である。

「だ、大体、どこの触つて 」

「！ 来るぞ！」

砂煙の中から再びビームが一夏たちを襲う。

その一射で吹き飛ぶように砂煙が晴れていいく。

次第に人型のシルエットが浮かび上がり、色と形が明確になつていく。

砂煙が完全に晴れた時、一夏と鈴は目を見開いた。

「ーーー機……だとーー？」

「何なのよ、ーーー？」

一夏たちが見据える先には、一機のI.Sが一夏たちを見据えていた。

片方のI.Sは青色で、右腕に長大なビームキャノンを引っ提げて射撃体勢を取っている。

どうやら先程の砲撃はあの青いI.Sから放たれたものだろ？

もう一方のI.Sは赤色で、右腕に円形のシールド、左手に小型のビームガンを持ち、何とも奇妙な事に、背中に円盤がいくつかくついている。

そして両方のI.Sに共通する点、それは『全身装甲』だ。

通常のI.Sは部分的にしか装甲を用いない。何故か。必要無いからだ。防御ならばシールドエネルギーだけで事足りる。それに装甲が増えれば可動域が狭まり、近接戦闘では致命的だ。防御特化型I.S等が物理シールドを搭載する事は珍しい事ではないが、まるで全身が機械で出来ているかのように肌の露出が1ミリも無いというのは、一夏たちは聞いた事は勿論、見た事も無い。

そして何より、あの一機のI.Sからは感情という物が一切感じられない。

頭部にただ一つしかない四角いセンサーレンズは、まるでこれから排除する敵の品定めをするような、そんな冷たい視線を一夏たちに送っている。

「お前ら、何者だよ」

「…………」「…………」

当然の「」とく、謎の乱入者達は一夏の呼びかけに応じる気配すら見えない。

『織斑くん！ 凪さん！ 今すぐアリーナから脱出してください。すぐに先生たちがE.Sで制圧に行きます！』

山田先生が割り込んできて一夏たちに言った。いつもよりずっと冷々しさが増している……気がする。

「いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

一夏は確信している。あの一機から逃れる可能性は、限りなくゼロに等しいという事を。

何より、遮断シールドを突破するほどの攻撃力を持つ青色のE.Sを誰かが抑えなければ、観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性がある。それだけは何としても阻止しなければならない。

「いいな、鈴」

「だ、誰に言つてんのよ。そ、それより離しなきこつてば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

一夏が解放すると、鈴は自分の体を抱くよつた格好で離れた。

(おひおい、そんなにイヤだったのか……)

あまりの行動の速さに一夏は心の中で頃垂れた。

『織斑くん！？ だ、ダメですよ！ 生徒さんにもしもの事があつたら』

途中で青いE-Sがビームを撃つてきたため、山田先生の言葉は途中までしか聞けなかつた。

しかし極太とはいえ、単発のビームを避ける事はそれほど難しい事ではない。

一夏と鈴は散開して回避した。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

一夏と鈴は横並びになつてそれぞれの得物を構える。

「あたしが青いのをやるわ。一夏は赤いのを。それでいいでしょ？」

「やうだな。多分コウもそいつだろ？ しな」

二人はお互い武器の切つ先を軽く当て、それを合図に自分が担当する敵に向かつて突つ込んだ。

「もしもしー？ 織斑くん聞いてますー？ 凪さんも！ 聞いてますー？」

E-Sのプライベート・チャネルは声に出す必要は全く無いのだが、そんなことを失念するほど真耶は焦つていた。凛々しさなど欠片もない。

周囲から見た時の痛む具合がまた残念な感じになつてゐる。

「本人たちがやると嘗つてゐるのだから、やらせてみてもいいだろ  
う」

「お、お、織斑先生！ 何をのんきな事を言つてるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライがある  
んだ」

千冬はせつて箱から白い粒子をスプーンでくつてコーヒーに  
入れている。

「……あの、先生。それ塩ですか？」

真耶に指摘され、千冬はパタリとコーヒーに運んでいたスプーンを  
止め、塩と書かれた容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ？」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてあります  
ど……」

「…………」

「あつー、やつぱり弟さんの事が心配なんですねー？ だからそん  
なミスを」

「…………」

真耶は直感で感じ取っていた。これは嵐の前の静けさ。良くない事が起ころる前兆だという事を。

真耶はすぐさま話を逸らすと試みる。

「あ、あのですね」

「三田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

遠慮なく、躊躇なく押しつけられるコーヒー（微塩）。せせら回避は叶わないよつだ。

真耶は涙田で「コーヒー（微塩）を貰ひ取つた。

「こ、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといー」

さすが天下のブリュンヒルデ様。我々に出来ない事を平然とやつてのける。やこに（以下略）

「先生、暢氣のなきにコメントをやつしている場合ではないと思ひますが？  
あと塩を用意したのは僕です」

コウがクスクス笑いながらカミングアウトした。コイシヒヤが眞の悪魔である。

「奈々瀬、あとで職員室に来い

田もくれずにやつ言い放つ千冬。体から立ち上るオーラが彼女の怒りを顕著に示していると言えやつ。

「先生！ わたくしHISの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいといひだが、これを見ろ」

千冬はブック型端末を操作し、第一アリーナのステータスチェックを表示させる。そこには

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉がすべてロッカされて あのHISの仕業ですの……？」

「そのよつだ。これでは避難する事も救援に向かう事もできないな

落ち着いた様子でセシリ亞の要求を受け流す千冬だが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないとばかりにせわしなく画面を叩いていふ。

「で、でしたら！ 緊急事態として政府に助勢を 」

「やつている。現在も三年の精銳がシステムクラッシュを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

田に見えて不機嫌になつていく千冬を見て危険だと悟つたセシリ亞は、頭を押さえながらベンチに座つた。

「はああ……。結局、待つてゐる事しかできないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しり」

「な、なんですって……？」

「セシリ亞さん、口調口調

ユウに指摘されセシリ亞はハツと我に戻った。千冬は咎めもせずに続ける。

「お前のヒトは一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんな事はありませんわ！」のわたくしが邪魔だなどと

「では連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　ビットをどうこう風に使う？　味方の構成は？　敵はどのレベルを想定してある？」  
連続稼働時間

「わ、わかりました！　もう結構です！」

「ふん。わかれればいい」

セシリ亞は千冬の指導を、両手を揺らして止めた。いわゆる所謂『降参』のポーズである。

「はあ……。言い返せない自分が悔しいですわ……」

さつき以上に深いため息をつきながら、セシリ亞は頃垂れた。

「織斑先生。これは私見なんですが……」

「今度は奈々瀬か。何だ？」

セシリ亞に代わって、今度はユウが千冬に意見を出す。

「敵の狙いは一夏と凰さんとの『決闘』だと考えられます」

ユウの言葉に千冬が怪訝な顔をする。

「それはどういう事だ？」

「確かに、避難も救援もできないこの状況は、中で戦っている二人にとつて危険極まりない事です。ですが、逆に考えれば、我々外野の人間に余計な行動をして欲しくない、と見る事もできます」

「なるほど。確かにそう考える事もできるだろう。つまり、我々が無闇に動かなければ織斑と凰以外に危険はない、という事か？」

「一夏たちがおかしな戦い方をしなければ、まず問題無いかと。それと、敵はこんな大規模な施設を一瞬でシステムハックするほどの手練れです。いかに精銳とは言え、学生如きのシステムクラックで容易に開くとは思えませんね」

「先程からのお前の発言を鑑みるに、織斑と凰を見捨てるのが前提のように聞こえるが？」

「そつは言つてません。ただ、このままの状況が続けば、間違いなく一夏たちはやられるでしょうね」

千冬が忌々しそうに舌打ちする。そろそろ我慢の限界が近付いてい

るらしい。

「……手があるならわざとと言え」

「僕が救援に向かいいます」

「……バカかお前は。さっきから救援には行けんと何度も

「1分で戦闘に介入します。さ、行きますよオルコットさん」

「……は？」

頭を抱える千冬を余所<sup>よそ</sup>に、ユウはセシリアについて来るよう促した。セシリアは話についていく事ができず、呆然と立ちつくしている。

「最初に行きたって言つたのは貴女でしきう？ なんなら待つても

「行きますわ」

「待て！」

ピットに備え付けられたモニタールームから出て行こうとする一人を千冬が止めた。

「仮に救援に行く手段があるとして、だ。お前たちが行くべきではない。お前たちでは連携の鍛度も、戦闘経験も不足している。大人しく教師たちに任せて

千冬の呼びかけに真耶は何度も頷いているが、ユウは振り返つて千

冬に告げる。

「失礼ですが、突入隊の武装構成は？」

「何？……通常のラファールと打鉄、ワルキューレだが？」

「その程度の火力ではあの一機に傷を付けることすら難しいですね」

「それはどういう事だ？お前たちなら戦えるとでも言つのか？」

「セシリ亞さんがないければ厳しい。あれらはそういう奴らです」

「……チツ、もっせと行け」

「ありがとうございます」

千冬は悩んだが、結局一人を行かせる事にした。これ以上の上策が無い以上は仕方が無い。

ユウとセシリ亞は一礼してモニタームから走つて出ていった。

(子供に頼るしか無いとは……何をやつているんだ私は……)

千冬は己の不甲斐なさに、苦虫を噛み潰したかのような顔をしてモニターのコンソールを叩いた。

真耶も千冬と同じく、悔しそうな表情を浮かべている。

だからこそ気付かなかつた。このモニタームから、ユウとセシリ亞以外にもう一人、姿を消した人物がいる事に……。

Shift 3・7 「最強の盾、最強の矛（前編）」（後書き）

一夏「原作より増えてる！？」

鈴「あんなのが出るなんて聞いてないわよ！？」

HAL「言つてたらお前ら速攻で逃げるだろ？が」

ユウ「大丈夫です。死にはしませんから」

HAL「そうそう、一夏には主人公補正（弱）があるから、なんとかなるだろ」

一夏「（弱）つてなんだよ（弱）つて！？」

HAL「サブ以上主人公以下の主人公補正（笑）の事だ」

一夏「ワケわからねえよ！？」

ユウ「一夏、どさくさに紛れて凰さんのお尻とか……」

一夏「触んねえよ！？」

鈴「そこ、なんで胸じゃないの？」

一夏「突っ込む所そこ！？」

HAL「お前ら喋くつでないでさつさと戦え」

*Schrift 3・8 「最強の盾、最強の矛（中編）」（前書き）*

やつぱつパラボイドティフンカーフト強こと強つさだ。  
……常識的な相手になら。

## shift 3・8 「最強の盾、最強の矛（中編）」

「うおおおおおおーーーー！」

ガギン！

雪片と円形のシールドが音を立ててぶつかり合つ。シールドは実体を持つているため、零落白夜を用いても効果はない。赤いエスはすぐさま左手のビームガンを連射して反撃してきた。

「ぐつー！」

一夏はビームの雨を掻い潜り、距離を取りながら相手を観察する。

（相手の武装は攻撃重視……とは言えないよな）

ビームガンは小型ゆえに威力・射程があまり無く、どうにも決め手に欠ける武装構成となつていて。

一夏が頭を回転させている中、赤いエスはビームガンを連射しながら突進してきた。

「その程度、なんとも無いぜー！」

コウとの試合がフラッショバックする。あの集中豪雨のよつた弾丸の雨を経験した一夏にとって、この程度の弾幕など慣れっこだ。

「もう一度だー！」

再び雪片とシールドがぶつかり合う。だが今度は先程のよつにはな

らない。

シールドの中心に光が灯る。そして次の瞬間

「なッ！？」

一夏の視界のすぐ左を光が駆け抜けた。

それが何なのか確認する間もなく、光が自分の方に寄つてくるのを感じた一夏は慌てて下方に回避した。

「つぶねえ！」

再び距離を取つた一夏が見遣ると、シールドからビームサーベルのような光の刃 正確にはビームバイクと言つ が伸びていた。

「あんな物までついてるのかよ……！？」

意外な隠し武器に驚く一夏だが、赤いISの次の行動に一夏は再び驚愕した。

赤いISが背中の円盤を切り離したのだ。  
いくつかの円盤が青いISに向かっていく。

「何だよ、あれ……」

この後一夏だけでなく、鈴もまた円盤の恐ろしさを知る事になる。

「ちよこまかと……いい加減当たりなさこよー。」

鈴は青龍刀を振り回して青いIISに突撃する。

……が、青いIISは苦も無く回避し、距離を取る。  
そしてビームキャノンを撃つてくる。

このやり取りを幾度となく繰り返していた。

（何なのよこいつ……逃げてばかりで……）

絶え間なく襲い来るビームを回避しながら鈴は舌打ちした。  
先ほどの砲撃のような威力は無い。が、代わりに連射性能が上がっている。

どうやら出力を調整する事で性能を変えているらしい。

「近付けないなら……近付かなくともいい攻撃をするまでよー。」

そう言って鈴は衝撃砲を展開し、見えない弾丸を発射する。  
別に近接攻撃ができなくとも、結果として倒せればいいのだ。手段  
は問わない。

「これなら……！？」

だが次の瞬間、鈴の目論見は脆くも崩れ去った。

見えない弾丸が当たる直前、青いIISの前に3基の円盤が三角形の  
形で滑り込み、電磁波を発生させて弾丸を弾いたためだ。

「ツ……まだよー。」

鈴は衝撃砲を連射する。が、その<sup>レリヤル</sup>近くが円盤が発生させるバリアによつて弾かれる。

「何なのよ……あれ……」

しかも青いエスエスといつてその効果は関係無いらしく、再びビームキヤノンを連射していく。

「あああもつひーー 何なのよあのチートはーー」

鈴は泣きたい衝動に駆られたが、一夏の手前、抑え込んでビームを回避し続ける。

近接戦闘は取り合つてもらえず、衝撃砲はあるチートなバリアで防がれる。

どちらか片方ならばまだやつようはあったものの、今の鈴に成す術は無い。

「鈴！」

そんな鈴の惨状を知つてか知らずしてか、一夏が近づいてくる。

「一夏ー!? 何してんのよー セカンド赤いの潰しなさいよー」

「交代だ。青いのは俺がやる。お前じや攻撃効かないだろ?」

一夏の言つてる事はもつともだ。このままではジリ貧は確定だらう。

「……勝算は?」

「ある。だから鈴は赤いのと相手してくれ。近付かなればまず負けないはずだ」

「わかった。青いのは距離を取るのを優先してるみたいだから、もしかしたら近接武器を持つてないのかもしれない。とにかく気を付けて」

「わかった。サンキュー、鈴」

そう言って一夏は青いISに向かっていった。

鈴は気持ちを入れ替えて赤いISOと対峙した。

「これから先は私が相手よ」

一夏はビームを回避しながら、青いHSに近付いていく。

「はああああああーーー！」

十分に近付き雪片を振るう。

ジジジ……バシン！

「ツ！？」

だが円盤が作る摩訶不思議なバリアによつて、その刃は呆氣無く止  
められてしまう。

「やつぱりそのままじゃダメか……ならー。」

再び肉薄し、今度は零落白夜を発生させて雪片を振るつ。

雪片は再びバリアに接触するが、今度はまるでバリアを焼き切るよう<sup>ム</sup>にその刃が青色のIISに向けて直進する。

「…………」

だが、青色のエハは寸での所でそれを回避した。  
さらり、お返しとばかりにビームの雨を降らせる。

(ダメだ。普通のスピードじゃ逃げ切られる。『イグニッシュン・ブースト瞬間加速』なら……)

一夏はエネルギーの残量を確認する。幸い、あと一回零落白夜と瞬間加速を併用できるだけのエネルギーが残っている。

(よし、行ける。あとはタイミングだ)

一夏が決行準備を整え、タイミングを計っていたその時だった。

「一夏あつ！」

アリーナのスピーカー大聲が響いた。キーン、とハウリングが響く  
その声は、簞の物だった。

「簞ー？ 何してんだお前…………」

一夏が中継室の方を見やると、簞がマイクを握つて立つていた。審判とナレーターは氣絶している。  
どうやら簞に伸されたようだ。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

またもやキーン、とハウリングが起る。一夏がハイパー・センサーで簞を見ると、彼女は肩で息をし、その表情は怒っているような、焦っているような、そんな不思議な様相をしていた。

「…………」

突然の館内放送に青いEISは興味を持ったようで、一夏から目を逸らし、じっと簞の方を見ている。

(今しかない!)

一夏は瞬時に突撃姿勢へと移行し、瞬時に加速する。  
青いEISは一夏の突撃に気付いたようだが、もう遅い。

「もうつた!」

一夏は、零落白夜を発生させた雪片を袈裟掛けに振り下ろした。円盤のバリアによる防御は意味を成さず、回避は間に合わない。必中の一撃だ。

「…………」

だが、青いEISに狼狽した様子は見受けられない。  
むしろ、いくつ自然な流れで、最善の手を打ってきた。

(なつ!?)

その一手に、逆に一夏がうろたえた。青いエスが打った手。それは

……

ザシューン！

青いエスの左腕が宙に舞い、ドスンと重そうな音を立てて地面に転がる。

（「マイッ……躊躇なく左腕を出しゃがつた！」）

青いエスは咄嗟に左腕を出してガードしたのだ。

左腕は失つてしまつたが、それによつて雪片の威力は減衰し、一夏が急所に刃を突き立てる事は適わなかつた。

（バカな！？ こんな事、普通の人間にできる訳がない！ こんな事ができるのは、よつぽどイカれた人間かロボットぐらゐしか……！？）

「がつーーー！」

唚然とする一夏に対し、青いエスは容赦なく蹴りを繰り出した。

一夏はそれをもろに食らい、地面に叩きつけられた。

青いエスはそのままトゲメとばかりにビームキャノンの砲口を一夏に向ける。

砲口が光を灯し、熱量を蓄えていく。

一夏には、その光景がひどくゆづくつと感じられた。

「「一夏あーーー！」」

箒と鈴の声が重なる。そして次の瞬間、砲口から破壊の光が放たれ

た。

(「ゴメン、簫、鈴、ユウ、千冬姉……俺じや勝てなかつたよ）

一夏は覚悟を決め、ゆっくりと迫りくる光の壁を直視する。

だが、その光が一夏を蒸発させる事は無かつた。

何故か。それは光が道半ばで爆発したからだ。

大きな音と閃光が一夏だけでなく、鈴や簫、そしてアリーナ中を襲う。

「ぐつ…… 一体何が……」

音と閃光が止んだのを確認すると、一夏は青いEISを見た。

一方、青いEISはあらぬ方向に視線を向けている。

一夏も青いEISが向いている方向を見ると、そこには……

天使が、居た。

Schrift 3・8 「最強の盾、最強の矛（中編）」（後書き）

HAL「チツ、あとちょっとで消し飛んだのに」

一夏「俺を殺す気だつたのか！？」

ユウ「良かったですね、主人公補正（弱）が付いていて」

鈴「ちよつと、あたしまるつきり役立たずじゃない…」

HAL「今日はすこぶる相性が悪かつたって事で……」

ユウ「とこつかもつこらな子確定」

鈴「チートのバカー！…！」

ユウ「…………行っちゃいましたよ？」

HAL「次回はユウとセシリ亞のターンだからな……。

鈴の見せ場終了のお知らせだ。」

セカン党の皆さま、本当に申し訳ありません」

ユウ「凰さん……不憫な子……」

## Shift 3・9 「最強の盾、最強の矛（後編）」（前書き）

長かったクラス対抗戦もいよいよ終わりです。

え？ 戦闘が呆氣無い？ 弱点突けば大抵そんな物です。ポケモンだつて弱点突けば一撃でしょ？ それと一緒SA

そしてビーム・マグナムの威力……（汗）

『初登場時は強力に見える』補正が存分に掛かつた結果である。

## shift 3・9 「最強の盾、最強の矛（後編）」

一夏と鈴が正体不明のH.I.Sと戦っている頃、コウとセシリ亞はペッジトにいた。

どうやら敵は観客席やアリーナの扉はすべてロックしていたが、ピット周辺のロックは怠つたらしく。

ロックされたドアに阻まれる事無くここまで来れた。

扉一枚隔てた向こう側にて、戦場がある。

扉一枚。されどその扉は厚く、炎をペッジト・ゲートと言ひ。

「1分で戦闘に入ると仰つてましたわね。何をなさるおつもりですか？」まさか、お一人でシステムクラッシュを行う気では

「

セシリ亞の質問に首を横に振るだけでコウは応え、懐から白いカードを取り出した。

否、白いカードに見えるそれは、待機形態となつていて、コウが持つ専用機、アルテミスだ。

次の瞬間、コウの体を包み込むように光が発生し、光が収まるときにはアルテミスを装着したコウが立っていた。

「セシリ亞さんもH.I.Sを展開してください」

「それはなぜ　わかりましたわ」

要領を得ないコウの言葉だが、直感的にセシリ亞はコウの言葉に従つた。

体を包み込む光を発した後、一瞬前まで制服だったセシリ亞の全身

にはブルー・ティアーズの装甲が装着された。それを確認したユウが口を開く。

「さて、介入する前に作戦を伝えます」

「作戦。そう聞いたセシリアの顔に翳りが出る。

「しかし私たちでは上手く連携できるかどうか

「連携？ そんな物は必要ありません。一対タイマン一で十分です」

「……え？ それはどういう事ですか？」

セシリアの脳内にはクエスチョンマークがいくつも並べられる。

「セシリアさんは赤い方のI-Sを相手してください。青い方は僕が抑えます」

「いえ、あの……ユウさんはあの映像を見て何とも思わないのですか？」

セシリアが指さす先には、円盤から発生するバリアによって衝撃砲を防がれている鈴の姿を映した、リアルタイム・モニターがある。不安な顔をするセシリアとは対照的に、ユウの顔に動搖は無い。

「貴女一人でも十分に戦えます。ビットとライフルを連射しているだけで結構です。僕が保証します」

「いえ、ですからブルー・ティアーズにあのバリアを抜くほどの火力は」

「セシリ亞さん。僕の言っている事はそんな次元の話ではないんです。やるか、やらないか。やらないのであれば、僕一人で行きます」

「~~~~つ、やります！ やればいいのでしょうか！？ それより、この扉をどうにかしませんと、介入も何もありませんわよー？」

ユウに急かされ、セシリ亞は半ばヤケクソ氣味に叫んだ。

セシリ亞の問いに対し、コウはニヤリと（見る人が見れば黒い）笑みを浮かべた。

「ではセシリ亞さん。ここで質問です。アリーナの遮断シールドは何で出来ているでしょうか」

「何つて……確かISのシールドと同じものだと授業で習いましたわ」

「ええ、そうです。ならば、ISのシールドと同じ感覚で処理する事ができる。そう思いませんか？」

「……一体何をなさる気ですか？」

セシリ亞は背筋を嫌な汗が流れるような錯覚を感じ、ユウに尋ねた。ユウはまるで新しい玩具を買ってもらった子供が、その玩具を使って初めて遊ぶ時のような、そんなキラキラした眼をしながらセシリ亞の質問に答えた。

「ISのシールドを抜く代表的な手段の一つ、それは……圧倒的な力という名の暴力。そしてISのシールドと遮断シールドの相違点は……貫通させても直接的に人を傷つける心配が無いという事で

す

そつとコウは右手<sup>ハンド</sup>にビーム・マグナムを呼び出し、ピット・ゲートに銃口を向けた。

「…………まさか…………」

「対人戦では怖くて使えませんでしたが……対象がモノなら遠慮は要りませんよね？…………行きます！」

コウの額にひらめきの光が走り、直感の赴くまま、コウはビーム・マグナムの引き金を引いた。

圧倒的な熱量を持つて解き放たれたビームは、ピット・ゲートを溶解、貫通し、その先の対象に当たつて爆発を引き起こした。

爆発の光が收まり、ピット・ゲートを見たセシリアは衝撃の光景を目の当たりにした。

「そんな…………有り得ない…………なんて威力…………」

ゲートには先程のゲームによって開いたと思しき孔<sup>あな</sup>があり、その孔は余熱によってエアが通れるくらいの大きさまで広がっている。

「うわ…………やっぱり威力有り過ぎだな。後でリミッター掛けなきゃ…………セシリアさん、行きますよ」

「…………！？　わ、わかりましたわ

セシリアはコウの後に従い、アリーナに躍り出た。

アリーナに舞い降り、介入に成功したユウとセシリアは、それぞれ一夏と鈴の元へ向かう。

「一夏、大丈夫ですか？」

「鈴さん、加勢しますわ」

二人はそれぞれ敵と味方の中間に身体を滑り込ませ、敵と相対する。

「…………」

「…………」

赤と青のエスは動じる事無く、新たな乱入者を見る。その視線にはやはり感情らしい感情は無い。

「ユウ……俺、生きてるのか？」

一夏はユウの背中を見ながらそう聞いた。

「…………ええ、まだ生きてます。君は悪運が強いですね」

「そりが、俺は　」

「一夏。泣いてないでさつと退いて下さい。今度こそ死んでも知りませんよ？」

「え？」

一夏は無意識に流していた涙に気付き、慌ててそれを拭う。

「ユウ……あいつら、多分無人機だ」

拭い終えてから、一夏はそうユウに言つた。

「左腕を見る限りそうとしか思えませんね」

「……遠慮なくやつてくれ」

一夏はユウにそう叫びると、後退を開始した。

「鈴さん、わたくしが来たからには、もつ心配ありませんわ。だから、  
退いて下さいな」

セシリアは優雅に腰に手を当てながらそう言い放つた。

しかし鈴はジト目でセシリアの提案を蹴った。

「はあ？ 何バカな事言つてんのよ」

「バカとは何ですのバカとは！？」

「赤いのは近接戦闘主体で来るわ。アンタ取りつかれたらボロクソ  
じゃない。あたしが壁になるから、さっさと潰しなさいよ」

「身も蓋も無い事を

「わかりましたわ。くろぐれも流れ弾に突

つ込んで自滅なさいな」よ

セシリアは背後にいる鈴の雰囲気を感じ取り、顔を引き締めた。

「そつちこひや、フレンドリー・ファイアは勘弁してよね」

鈴がセシリアの横に並んだ。セシリア同様、その顔は真剣さで引き締められている。

「それじゃあ……」

「第一ラウンドの……」

「スタートです!」

鈴、セシリア、コウの順にそつちこひや、敵に向かってその身を踊らせた。

「あああああああーーーー！」

鈴が青龍刀を振り回しながら赤いISに突撃する。

赤いISはシールドを掲げ、鈴の青龍刀を巧みに弾いていく。

「セシリア！」

「行きなさい！ ブルー・ティアーズ！」

鈴がタイミングを計つて赤いエスから離れると同時に、セシリアがビットを射出する。

ビットは後退する鈴を援護するようにレーザーを撃ち出していく。

赤いエスはレーザーに反応して円盤を射出し、それらは赤いエスを守るように形を成して電磁波を放出する。

「チツ、あんなか細いレーザーじゃ通るワケが……！」

悪態をつく鈴だったが、次の瞬間驚愕に目を見開いた。

ヒュンヒュン、ビシンビシン！

何故か。それはレーザーが円盤のバリアを素通りして赤いエスにダメージを与えたためだ。

「素……通……り？」

セシリ亞も驚くべき現実に目を瞬いた。脳裏に先程のコウの言葉がリピートされる。

「貴女一人でも十分に戦えます。ビットとライフルを連射しているだけで結構です」

「まさか、こいついう意味でしたの……」

セシリ亞はここに至りて、初めてコウが言わんとしていた事に気付いた。

非常に単純な話だ。コウは知っていたのだ。あの摩訶不思議なバリ

アの弱点を。

あのバリアはレーザーに対する防御力が皆無なのだ。

あのバリアは一見強力な物だ。実体武装も、強力なビームもおそらく通しまい。

しかし、セシリアの武装は、一部を除きそのほとんどがレーザーである。

あの赤いISは右腕のシールドを除けば丸裸同然、という事になる。だからコウはセシリアの参戦を強く望んだのだ。  
なぜなら、セシリアはあの赤いISに対しても武装の相性が最高だから。

セシリアがあの赤いISに対しての天敵となる事を知っていたから。

だとすれば、セシリアの役割は自ずと決まってくる。

（わたくしを活かして下さるコウさんのためにも……なんとしてもアレを撃ち果たして御覧に入れますわ！）

己の役割を自覚したセシリアにとって、赤いISはもはや敵ではない。ただの獲物に成り下がつた。

ビットが獵犬のように獲物の周りを駆け回り、不意を突いて獲物に噛みついていく。

セシリア自身が獵師となつて獲物に弾丸を撃ち込んでいく。

セシリアが参戦して、10分経つか経たないか。

鈴の存在が危うい物になるほど、セシリアは圧倒的だった。  
ボロボロになつた赤いISは呆氣無く動きを止め、地面に倒れ伏した。

「わたくしの手に掛かれば、こんなものですわ」

「向ひの理不<sup>可</sup>。あたしの苦労は向ひだったのよ……」

上機嫌なセシリ亞とは対照的に、鈴は頭を抱えて悪態をついた。  
何とも呆氣無く消化不良な戦闘だったが、コウの戦術がハマった結果である。

喜びこそすれ、嘆く事では決してない……はずである。

（コウちゃん。あとほお任せしますわ）

セシリ亞はコウにプライベート・チャネルでそいつを、未だ戦い続けるコウの方を見やつた。

青いエリと対峙するコウは、ビーム・ガトリングガンを両手に持つて連射している。  
しかし、その飛べが円盤から発せられるバリアによって防がれていった。

（ホントチートだよねえ……プラネットディフォンサー。セシリ亞がいなければ厳しかったよ）

どうやら円盤を用いたバリアはプラネットディフォンサーといひらしい。  
しかもコウはその弱点まで見抜いている。

何故かはさておき、その知識が役に立つた事は言つまでも無い。

今、ユウは攻撃よりも回避に重きを置いている。

プラネットディフェンサーを突破できる火力が無いわけではないが、どうせすぐに赤いＩＳは機能停止に追い込まれ、それに伴い円盤は力を失い落ちるだろう。

今青いＩＳにとつて、三枚の円盤は最後の砦に等しい。

無くなれば、比喩でも何でも無く、丸裸なのだ。

そうなれば、あとはビーム・マグナムの一射で事足りる。労が少なく済むなら、それに越した事は無い。

10分後、当然のように、その時はやつてきた。

セシリ亞からプライベート・チャネルを受け取ると、青いＩＳの正面を覆っていた電磁波が止まり、円盤が浮力を失い地面に落ちていく。

後に残つたのは、ただ攻撃する事しかできない機械人形ただ一体…。

「最強の盾、最強の矛と言えど、所詮は機械。この程度ですね」

ユウの言葉に憐みの情など一切、有りはしない。

ただ無感情に、ビーム・マグナムの銃口を敵に向ける。

「これで……終わりです」

ビーム・マグナムから破壊の奔流が撃ち出される。

狙いは頭部と右腕の中間。ビームは寸分違わぬ軌道で青いＩＳを擊ち抜いた。

唯一の武器であるビームキャノン、加えて右腕、頭部が蒸発し、も

はや鉄屑同然となつた青いEIS”であったモノ”は完全に機能を停止し、地面に墜落した。

「終わった……のか？」

赤と青のEISが動きを止めた後、一夏は三人のもとにゆっくりと近付いてきた。

「ええ。弱点を突けば呆氣無いものです」

「そうですね」

「今日は散々だつたわ……」

三人は三者三様に一夏の言葉に反応したが、皆安堵の表情を浮かべている。

「あ、ああ…………！？」

一夏は三人の奥で何かが動くのを感じた。

ハイパー・センサーで確認すると、赤いEISがぎこちなく動いているのが見える。

そして赤いEISはゆっくり立ち上がり、なんとシールドを構え、突進してきた。

三人はそれに気付かない。

「危ねえ！……」

「「「え！？」」「」

一夏は三人を左右に搔き分け、雪片を正眼に構えて赤いISの突進を受け止めた。

しかしそれで赤いISの突進を止められるはずが無い。

勢いに負けてズルズルと後退を強要される。

白式のシールドエネルギーがガリガリと削られ、一夏の視界が赤に染まる。

「再起動！？ そんなバカな！？」

ユウがそんな事を言つた気がしたが、一夏は目の前で悪足掻きを続ける敵に集中する。

「！」のおおおおおお！……！

赤く染まる意識の中で、一夏は両手が何か堅い物を両断するような手応えを感じ、その直後、意識を完全に手放した。

## shift 3・9 「最強の盾、最強の矛（後編）」（後書き）

HAL「風神雷神つてこんなに弱かつたつけ？」

ユウ「弱点突けばば」んなものです」

セシリア「これでわたくしの株がまた上がったとこワケですわね」

鈴「なによー セシリアばっかりー 『んなの不公平よー』

HAL「だつてお前のHAL、第三世代型のくせに大して強くないんだもん」

鈴「あたしの甲龍は安定性がウリなのー」

HAL「中國つて全然安定性無いよな。事故多発するし」

鈴「ぐう……ぐう……」

ユウ「作者、あまり虐めると可哀想ですよ」

HAL「ま、良じじゃないか。漫画版の3巻のカバー絵は鈴なんだから」

鈴（口イジり……（怒））

篇「あまりムキになるな。私のようにぶられていらないだけマジだ」

HAL&amp;・ユウ&amp;セシリア&amp;・鈴「「」」

……………あ。「」

一 夏「筆。俺さうんと氣付いた  
「付いた」

筆「一 夏あ（渴）」

セシコア「べべべ……」

鈴「あああああ……」

ハハ「やれやれ……じつやられたな

shift 3・10 「浮かび上がる影」（前書き）

最も大切なシーンを飛ばしたような気がするが……ま、いつか。  
飛ばして困るシーンなど一つもなかつたからな（笑）

あと、PVが20万突破しました。

読者の皆さま、本当にありがとうございます。  
これからも拙作をよろしくお願いします。

## Shift 3-10 「浮かび上がる影」

「う……？」

全身の強い痛みに呼び起され、一夏は目を覚ました。視線を周囲に這わせると、どうやら保健室らしい。

一夏はベッドの上に寝かされていた。

目覚めたばかりでまだ十分に動かない頭を働かせ、一夏は情報の整理を始めた。

(ええと、どうなったんだ……？ 確か俺は赤いISに突進されて、それから )

「気がついたか」

そんな声が聞こえるのと同時にカーテンが音を立てて引かれた。一夏は確認するまでも無く、来客は千冬だと確信した。改めて確認しても、やはり千冬である。

「体に致命的な損傷は無いが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

「はあ……」

一夏は何故自分の容態がそんな状況になつたのか理解できず、ふと窓の外に視線をやつた。

空はもうあかね色に染まっている。どうやら今は放課後らしい。

「全く、絶対防御をカットしてあの突進を受け止めるとは……結果として途中で白式がエネルギー切れになる事は無かつたが、よく死ななかつた物だ」

千冬の話を聞きながら、一夏は首を傾げる。絶対防御は普通カットできないシステム根茎だったはずだが……。

「まあ、何にせよ無事でよかつた。家族に死なれては寝覚めが悪い」

そう。千冬にとつて一夏は世界でたつた一人だけの”家族”である。だからだろうか。千冬が一夏に向ける顔は、いつもよりずつと柔らかだつた。

「ちふゅねえ  
千冬姉」

「うん？ なんだ？」

「いや、その……心配かけて、『ごめん』

一夏の言葉に、千冬はきょとんとした後、小さく笑つた。

「心配などしていなさい。お前はそう簡単に死はない。なにせ、私の弟だからな」

変な信頼の置かれ方だが、一夏はそれが千冬の照れ隠しの一種だとわかつっていたので、別段気にしなかつた。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻つていいぞ」

千冬は一夏にそつ抜けると、すたすたと保健室を出でていった。

「……奈々瀬か。盗み聞きとは悪趣味だな」

保健室のドアを閉めてすぐ、千冬は見向きもせずにそつ抜いた。ドアの近くには、コウが腕を組み、壁に背をもたれながら立っている。

「盗み聞きだなんて人が悪い。今丁度来たばかりですよ」

「ふん、どうだか。……一夏に会つてかなくていいのか？」

「どうせ死ぬ訳ではないですし、見舞客なんて他にも沢山居ますし。……そりでしょ?」

コウがそり尋ねたのは千冬ではない。千冬が振り向くと、コウの先に篠が歩いてくるのが見える。

篠は千冬に一礼し、自然な流れでドアに手を掛け、ふと動きを止めた。

「コウ、お前は入らないのか?」

「お一人の逢瀬を邪魔する訳にはこきませんから。でも、行きましょうか織斑先生」

「う……む。そうだな……」

篝は顔を真っ赤にし、その顔を見た千冬は非常に不安そうな顔をするが、ユウに引き摺られるよつとして保健室から離れていった。

そしてユウは……

（鈴が墮ちるのを見る事が出来ないのは残念だが……確定だからいいや）

千冬を引き摺りながらそんな事を考えていた。

この後、原作通り鈴が墮ちたのは言つまでも無い。

学園の地下50メートル。レベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間。

そこに一人の人間が居る。

織斑千冬と、奈々瀬ユウである。

機能停止した一機のエリはすぐさまこの空間に運び込まれ、解析が開始された。

それから一時間、千冬とユウは何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ていく。

「…………」

室内は薄暗く、お互に沈黙のまま映像に見入っていた。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウインドウが開く。ドアのカメラから送られて来たそれには、ブック型端末を持った山田真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらつてドアが開くと、真耶はいつもより幾分ぎびきびとした動作で入室した。

「一機のHISの解析結果が出ました」

「ああ。どうだつた？」

「はい。あれらは 無人機です」

遠隔操作(ヨコウジョウザイ)・コントロール・オペレーション)と独立稼働(ドクトリ・カクボウ)。世界中を駆けずり回つても決して見つかる事の無いであろうそれらの技術のどちらか、あるいは両方の技術がある一機の HIS に使われている。その事実は、すぐさま学園関係者全員に箱口令(カンヒョウリョウ)が敷かれるほど衝撃的なものだった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。赤い方は織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていましたし、青い方は奈々瀬くんの攻撃で蒸発してました。どちらも修復はおそらく無理かと」

「コアはどうだつた？」

「赤い方はこれまた織斑くんの攻撃で両断されて解析不可。青い方

は無事でしたが……登録されていないコアでした

千冬はうむ、と頷くと、コウに顔を向けた。

「奈々瀬。お前を連れてきたのは解析結果を教えるためではない事くらい解っているな?」

「動作方法とコアについてでしたら、僕をゆすっても何も出ませんよ?」

千冬は首を横に振った。

「聞きたいのはそっちじゃない。あの一機について、知っている事を話せ!」

千冬の質問に、コウは怪訝な顔をした。

「あの一機について……ですか?」

「知っているんだろ? でなければ独断でオルコットを戦場に連れ出すなんて真似、お前はしないからな」

なるほど、とコウは頷いた。

「……確かに。では知っている事をお話ししましょう。まずあの二機の名称ですが、赤い方はメリクリウス、青い方はヴァイエイトと言います。開発コンセプトは『最強の盾と最強の矛』。この一機はそれ対で運用される事を前提に考えられ開発された、第三世代型IISです。メリクリウスに装備されている円盤、これはプラネイティブインターフォンサーと言つて

」

「ちよ、ちよっと待つて下さい。じつして奈々瀬くんがそんなに詳しく述べてるんですか？」

真耶がユウの話に割り込み、疑問を口にした。

「当然じゃないですか。これらは元々アナハイムで開発されていたモノなんですから」

「ええつー?」

「奈々瀬、何故この一機が無人機としてここに現れたのか、心当たりはあるか?」

驚く真耶を余所に、千冬はユウに話を促した。  
ユウは目を閉じて考える仕草をした後、それではと言つて話し始めた。

「実はですね……数ヶ月前、この一機のデータが何者かによつて盗まれたのです」

「ええつー?」

「……山田先生、一々驚くな。奈々瀬、盗んだ者に心当たりは?」

再び驚く真耶に辟易しながら、千冬はユウに話を促した。

「風漬しに探すのも嫌になるほど多いに決まっているでしょう?  
最新鋭I-Sの機体データですよ? 喉から手が出るほど欲しいと思つている輩などいくらでも居ます」

「……そつか」

千冬は端から期待などしていなかつたのか、その顔に落胆の色は見られない。

「ただ、犯人を絞り込む事は不可能ではありますん」

「なに?」

「盗まれた時の一機の機体データの完成度は7割でした。プラネイトイフェンサーが動くかどうかといった所です。しかし今日現れ了一機を観察したところ、おそらくほぼ完成していたように思えます。だとすれば、データを盗んだ人物の近くに相当優秀な技術者が居ると考えられます」

「ふむ……そつか。」苦労だった。もつといいで

「わかりました。ではこれで失礼します」

そう言ってユウは一人に一礼して部屋を出でていった。  
部屋を出た後、ユウはしばらく歩いてぼそりと呟いた。

「まさかここまで完璧に完成させてくるなんて……。こんな事をする科学者なんて、この世界には一人しかいない。貴女なんでしょう？」

束さん。  
たまね

shift 3-10 「浮かび上がる影」(後書き)

鈴「だからビデオしてわたしのシーンばかり（以下略）

HAL「だつてこの物語の主人公は（以下略）

一夏「次は引っ越しの話だと。そういうやあれからひとつ経つたな」

和花「なん……だと……？」

### Shift 3-11 「これは呪いですか？ いいえ、ただの強制イベントだ

はい。いつものイベントです。河井さん暴走回（笑）  
多分暴走イベント（仮）はこれで最後だと思います。  
…………需要があれば続けるヨ？

大事なお知らせ

最近大学の方が忙しくてしばらく更新速度が大幅に落ちたりします  
が、まあ元々不定期連載と散々謳つているのでいつもの事だと思つ  
て笑つて水に流して下せえお代官様ア～（土下座）

## Shift 3-11 「これは呪いですか？ いいえ、ただの強制イベントだ

クラス対抗戦の乱入者事件から数時間後。

「ねえねえ、本当に出ていくの？」

「仕方ないでしょ。元々1ヶ月の約束でしたし」

I.S学園寮の1036号室で一人の男女が問答をしている。男はさつさと部屋から出でていきたいと言わんばかりに自分の荷物を纏めており、女はそれを手伝いながらも口では別れを惜しんでいるように見える。

「奈々瀬くんとはい感じに波長が合つてたんだけどなあ……」

「それは貴女の想いこみです。その想い込みで僕がどんな想いをしたか……」

「あ、あれは奈々瀬くんが可愛いから……ちょっとムラム

「女の子がそんな事言つんじゃありません……」

「……はい」

男の名は奈々瀬ユウ。女の名は河井和花と言つ。

この二人はルームメイト……否。元ルームメイトである。

『元』と言つのは、ユウが引っ越しす事になり、和花と別れる事になつたからだ。

誤解しないよう言つておくが、別に一人は付き合つてゐる訳ではない

いし、ただ部屋が別になるだけである。

和花が不安そうにユウ尋ねる。

「次のルームメイトとまくやつてけるかな……」

「貴女が欲望剥き出しに襲いかかつたりしなければ、まあ何とかなるでしょ?」

手を動かしながら平然と毒を放つ元・ルームメイトに、和花はあはは、ときのちない笑みで応えた。

「……もう少しオブリークトに包んで言つてくれないかなあ……」

「では訂正します。1日経つて貴女の下から逃げ出さなければ、そのルームメイトとはきっと友達以上の関係になれるでしょう」

「それはわたしが襲う前提で言つてるの!?」

「え? 違つんですか?」

「違つよー。」

目に涙を浮かべながら抗議する和花だが、ユウは全く意に介さず淡淡と引っ越しの準備を進めている。

しかしそもそも、何故ユウが急に引っ越し事になったのかと問いつと

ユウは部屋に戻るなりベッドに倒れ伏した。  
千冬に散々引っ張り回されたのだから仕方ないと言えれば仕方ないの  
だが。

「……今田は疲れた」

「奈々瀬くん、お疲れ様～。マッサージしようが

「……遠慮します」

ルームメイトである和花が、男がたわわな果実を揉むかのように指  
を妖しく動かしながらじり寄つてくる。

その姿に本能的な危機感を感じたユウはとりあえず断つてみたが……

「答えは聞いてないよ」

どうやらマッサージは確定事項らしい。和花は、疲れて動けずつつ  
伏せのままベッドに倒れ伏すユウの上に馬乗りになり、和むような  
微笑みを浮かべる。

……しかし惜しいかな。笑顔を浮かべて両手をウネウネワキワキといやらしくくねらせながら浮かべる和花の微笑みは、ユウにとって  
は捕食者が二ンマツと浮かべる狂喜の微笑みにしか見えなかつた。

体力も気力もほとんど残っていないユウに、自力で脱出する手段は  
無い。

つまり、今回ばかりは和花を阻む物など無い訳で……。

「それじゃあいっただつきま　　」

「ンンン。

訂正。一つ、強力なやつがありました。

二度ある事は三度ある、とは誰の言葉だつたか。じとねが諺ひことねだつたか。

とにかく三度目じとめの奇跡きせきが訪れたのは紛れもない事実なので、コウはオートでそれに乗つかる以外道は無い。

「はい。どちら様ですか？」

「すみません。わたしです」

コウがノックに対し返答すると、ドアの向むかい側わきから山田先生の声こゑが聞こえてきた。

室内の一人は顔を見合させ、すぐさま居住まいを正して来客を迎えた。

「山田先生、どうかなさったんですか？」

「はい。部屋割りの件なんですが、そろそろ一ヶ用経つので……」

「ああ、そうですね。この時期なら丁度いいです」

山田先生が全て言い終える前に、何の話題なのかおおよそ見当みあがついたコウは即答そくとうした。

コウの後ろで和花が目めを丸くする。

「え? 何の事?」

「元々は一夏の所に変更する予定だったんですけど、変わるのは一ヶ月後にするって事にしてたんですよ」

「やつなんですか？」

「はい」

和花は山田先生にも尋ねてみたが、山田先生からも同じ答えが返ってきたので、ユウを引っ摑んで部屋の奥に連れ込み、両手をユウの両肩に置いて聞いて質した。

「わたし何も聞いてないんだけど?」

「やつといえばユウのをすっかり忘れてました。1ヶ月つて早いですねえ」

へらへらと答えるユウ、和花はため息をついた。

「わっ……やつと慣れてきた所なのに。すぐ引っ越すんですか?」

「奈々瀬くんと河井さん、織斑くんと篠へなさん次第ですけど……」

和花が山田先生に尋ねると、山田先生はハーンと呟いて答えた。

「なら先に向ひの一人に聞いてきたらいいのです?」

「それもやつですね」

ユウの提案に山田先生は得心し、また後で、と言つて部屋を去つていった。

その10分後、山田先生が戻ってきて、

「織斑くんと篠ノ瀬さんは今日中で良いやうです」

との事なので、コウも今日中で問題無いと即答し、残るは和花の意見を聞くのみとなつた。

「どうしますか河井さん。わたしとしては一日でも早く健全な生活をして欲しいんですけど」

山田先生がそんな事を言つ。つまりは言外に「今日中に引っ越しさせてくれ」と誘導しているようなものなのだが……本人は自覚しているのだろうか。

和花はとくと、腕を組みながら唸つてゐる。

（「（）でわたし一人が駄々をこねると皆に迷惑がかかる。でも認めたら認めたで逸材が……」）

周囲から見ればくだらない事だが、本人にとっては真剣に考えるべき問題だ。……前者と後者が社会的にいつ合つかは別として、だが。悩む和花に、ユウが助け船を出した。

「心配しなくとも、しばらくはちょくちょく目に来ますよ。ほ

」

「先生、私も引っ越しは今日で良いです」

他の人が代わりに襲われたら申し訳ないです、とコウが続ける前に和花が山田先生にそう伝えていた。  
まさしく手の平返し。本当に欲望に忠実である。

「それじゃあ決まりですね。わたしは篠ノ瀬さんを手伝ってきますから、準備をしておいて下さいね」

山田先生はそう言って再び部屋から出ていった。そして話は畳頭に戻る

「これで全部ですね」

どうやら片付けは終わったらしい。ベッドのまくらといくつかのバッグが置いてあり、それ以外のコウの私物は綺麗さっぱり片付いている。片付けを終え、ベッドでくつろぐコウに、和花がそういうふうと手を合わせて言った。

「奈々瀬くん。一生のお願いがあるんだけど

「……何ですか？」

「女装して」

「全力でお断りします」

コウは当然の如く即答で拒否したが、和花はコウの答えを予測していたのか、ニヤリと口元を歪め、自分のベッドの下をゴソゴソし始めた。

「いいのかなあ～そんな事言つて」

「……………どうこう意味ですか？」

和花の自信過剰ぶりに、コウは背筋に悪寒を感じた。  
以前言つたと思うが、コウは「ユータイプである。厨一」がよく自慢する偽「ユータイプではなく、本物の「ユータイプである。つまりどういう事がと云つて、コウの直感は大抵的中する。それも嫌な物ほど。

和花はベッドの下からある物を取りだした。

「じゃん」

「！？ も、それは！？」

出てきた物を見て、コウは心臓を驚撃みにされたかのような衝撃を受けた。

「なんで……なんでそれがあるんですか！？」

「んふふ～、なんででしょ～」

ベッドの下から出てきた物。それはこいつぞやのコイお手製の超改造女子用制服だった。

「そんな……塵一つ残さず処分したはずなのに」

「でも確かにここにあるよ?」

そつ。確かに存在しているのだ。コウの手によつて、塵一つ残さないようイオン分解機を用いて確かに無に帰されたはずの代物が。ユウが驚愕に目を見開く中、和花がにじり寄りながら問いかけてくる。

「ねえ奈々瀬くん？　わたしがこれを皆に見せながらあの事の顛末を話したら……どうなるかなあ～？」

「ツー？」

コウはたじろぎ、一步後退する。それに合させて和花が一步前進する。

繰り返す事五歩。コウは部屋の隅に追いやられていた。  
逃げ場？　そんな物があつても逃げられるはずなど無い。  
手錠なんかよりも遙かに強い拘束力をコウに与えているソレが、和花の手に収まっている限りは。

「ホラホラ、早くしないと山田先生が戻つてきちゃうよ～っ！」

和花はコウを壁に押しつけながら耳元で囁いた。

時間とは残酷な物である。コウに思考の暇すら与えず、選択肢を极限まですり潰すのである。

コウの選択肢は三つ。

1、素直に女装する。

2、EISを使って証拠を消し飛ばす。

3、何らかの手段で和花を氣絶させ、記憶を消す。無論証拠は残さない。

選択肢が出そろつた時点でコンマ3秒。すぐさま選択肢の吟味に移る。

まず、1は選んだ時点でゲームオーバー。

2はその場凌ぎにしかならず、始末書を書かされる上、和花が誰かに言つリスクも考えると上策とは言えない。むしろ下策。

3は一番手っ取り早く、かつ最も安全な策である。……が、命を取られそうな状況でもないのに女性を傷つけるようなマネはコウとしてはできる限りしたくないことである。

「奈々瀬くぅ～ん。実はあ～……隠しカメラ付けといたんだよねえ～、この部屋にい～」

「…？」

それはもつねツトリと、ウザつたいくらい甘い猫撫で声で和花が秘密を吐露する。

和花の突然の告白にて、コウは慌てて周囲を見回した。が、それらしい物は見当たらぬ。

「場所わかるう～？ わからないよねえ～？」

ドヤ顔をこれでもかとコウに見せつけながら詰め寄る和花。「この女、欲望の為なら情け容赦なく獲物を追いたてるよつだ。

コウは新しくもたらされた情報を整理し始める。

まず、和花がウソをついている、つまり隠しカメラがある場合。  
心苦しくはあるが単純にプラン3を実行すればいい。  
それで苦痛から解放される。

逆に和花が真実を言っている、つまり隠しカメラがある場合。  
プラン3を実行したとして、短時間でカメラを探し出すのは難しい。  
しかも何かの拍子に和花の記憶が戻れば、それでジ・エンドである。  
選択肢は二つ。間違えればバッド・エンド。判断材料はいくつかあるが……

視覚……カメラ発見できず。見落としの可能性大。

和花の表情からはカメラ発見への不安を見出せず。

記憶……和花の行動を全て把握できてはおらず、隠しカメラ設置の  
可能性を否定できず。

直感……判断不能。役立たず。

ユウの直感は大事な所で役に立たない。だつて大事な所なんだもの。  
さて、この判断材料からユウが出した答えは

「…………」れつきりですよ？ 後には何も残さないで下さいよ？」

すとんと腰を下ろし、小動物のように丸まり、目尻に涙を浮かべながら、ユウは和花を睨みつけた。  
はい、墮ちました。ワロスワロス。

和花は口元を喜びに歪め、ユウに制服を渡した。

さて、読者の諸君には真実をお伝えしよう。

和花が出した制服、これは実は和花の手作りなのだ。言つておくが和花に瞬間記憶能力なんて物は無い。

和花の純粋な欲望がこの奇跡を体現したのだ。

そして監視力メラだが、そんな物は一つも無い。ただのハッタリである。

だがしかし、和花の純粋な欲望が（以下略

欲望の為なら何だつてする和花。<sup>あくじょ</sup>ユウにとつては悪夢の権化（笑）である。

5分後。

いつぞやのように、和花の目の前には女ですら目を輝かせて飛び付くような超絶美少女が、全身をモジモジとさせ、顔を赤らめながら立っている。

だがしかし驚く事無かれ。この美少女、男である。……一応。……

May be.

「相変わらず着替え早いね~」

「もう良いでしょう？ 山田先生が戻つてこない内に

ユウの全身を舐め回すように鑑賞する和花に対し、ユウはそわそわとドアの方に気を遣つていてる。

そのせいで和花の行動に気付くのが遅れてしまった。

「えい！」

「ぐがつ！？」

和花はユウをベッドに押し倒した。ユウは成す術も無くベッドに組み敷かれる。

「……女装だけの約束では？」

「そう。ここからは私の勝手。だから奈々瀬くん、わたしに付き合つ義理は無いね。別にあしらってくれていいんだよ？」

ジト目で訊くユウに対し、和花はユウの虚乳を鷲掴みにしながら答えた。

別にラツキースケベとか、そういう場面では決して無い。

ふと、和花が何かに気付いたようにユウに尋ねた。

「ねえ、女の子同士のキスはノーカンだと想つ？」

「そんなの知りませんし、キスする気なんて毛頭ありませんし、そもそも僕は男です」

「もし仮に、万が一奈々瀬くんが男だとしよう。もしさうだとしても、わたしこんなに可愛い男の娘ならキスの一つや二つ、してもいいかなって思う。ところかしたいね。よしょ！」

「勝手に納得して話を強制的に進められるのは、僕としては非常に不本意なんですが。というか婿に行けなくなるんで止めて下さい僕

には心に決めた人がつてこっちへんなああああ……」

本日一度めの貞操の危機。神の氣まぐれで出血大サービス。誤解しないよう言つておくが別に血が出る訳ではない。  
そしていつもいい所で都合の良い奇跡が

がちゃり。

「奈々瀬くん、河井さん、引っ越しの準備は終わった。」

ドアを開け、室内の惨状？を見た山田先生がピタリと動きを止めた。

惜しいかな。神は三度までしか奇跡を融通してくれないらしい。仮の顔はこの場合通用しないのであしからず。

「や、山田先生！？」  
「

「すすっす、すみません！部屋を間違えました！」

弁明しようとする一人に対し、山田先生はある意味正しい判断でドアを閉め立ち去るつとするが……

（（あの人を逃がすのは不味い……））

極限の状況下で研ぎ澄ました二人の直感が、山田先生の逃亡を阻んだ。

一人の非常に息の合つた連係プレーによつて山田先生はあえなく部屋に引き摺りこまれ、ドアが閉まり鍵が掛けられる。

「わ、わたしは女の子同士に興味なんてありません……」

「山田先生落ち着いて下さい！ 僕です！ 奈々瀬コウです！」

「……………え？」

目の前の超絶美少女から放たれる聞き覚えのある声に、山田先生は動きを止める。

考える事たつぱり一〇秒。山田先生が出した結論は、

「奈々瀬くんって、女の子だったんですね……」

「酷い！ 山田先生ならこんな女装、見破ってくれると思つてたのにーーー！」

やつまつとコウはかつらを取るが、山田先生はまだ気付かない。

「あ、ああ。そういう事ですか。髪が短くても十分魅力的だとわたしは思いますよ」

「山田先生もそう思います？」

「はー」

「いえ、あの…………そりじゃなくて…………」

不運な事に、むしろ勘違いは悪化している。  
そしてコウにとって最も不運な事、それは……

「やつだ山田先生！ 私服着せましょつよ私服ー！」

「それいいですね河井さん！ そうすればきっと自分の可愛さに気が付いてくれますよ！」

この二人が暴走スキル持ちであるといふ事だ。

「ちょっと……一人とも何を」

「何つて、制服脱がないと他の服に着替えられないよ？」

「ちゃんと素材を確かめないと、どんな服が合つかわかりませんから」

即興でファッショントリオーでもやるつもりなのだろうか。和花と山田先生がユウの服を剥ぎ取りに掛かる。

「待つて！ 止めて！ 本当に婿に行けなくなるから！」

「女の子同士なんだから、恥ずかしくないよ」

「それに、女の子がお嬢さんに行く訳が無いじゃないですか」

もはや留まる事を知らない女二人。

上から下から手を掛けられ、制服があつせりと剥ぎ取られる。

「次はブラウスだね」

「短パンを穿いてたんですか。女の子らしくないですわ」

続いて二人はそれぞれブラウスと短パンに手を掛け、剥いだ瞬間

『なんて言つたか、今まで聞いた事が無いよつたな、”女の子の悲鳴”をマーべラスに表したようなナイス悲鳴でしたね～。』（後日、某寮生談）』

「なあユウ。何があつたんだ？」

「…………」

一夏は隣のベッドに乗つかつていて、団子のように丸まつた掛け布団に尋ねた。

正確には本日付で一夏のルームメイトになつたユウに尋ねた。

しかし返事は無い。だが彼は屍ではない。

「しつかじビックリだぜ。悲鳴が聞こえて駆けつけてみたら、河井さんと山田先生が倒れてて、お前が部屋の隅でガタガタ震えながら命乞いをしてたんだからな。男物の制服姿で」

「…………」

「二人は記憶が飛んでるみたいで何があつたのかわからなって言つてたし。なあユウ、何があつたんだ？」

「…………

「……まあ、言いたくないなら無理に聞かない。話したくなつたら話してくれればいいや」

そう言つて一夏は追及を止めた。

ユウは一夏の親切心に感謝し、疲れのために襲い来る睡魔に意識を蝕まれる中、簞の「付き合つてもうつ」だか何だかの声を聞いたのを最後に、完全に意識を手放した。

Schift 3-11 「これは呪いですか？ いいえ、ただの強制イベントだ

一 夏&amp; 篇「あの悲鳴は一体何だったのか。」

HAL「敢えて詳しく述べるまい。想像にお任せするよ」

ユウ「だいたい同じような想像に行きつくような気が……」

ユイ「これで学園七不思議のひとつが出来上がったわけだねー。」

ユウ「やめとよ姉さん！..」

HAL「そして次からやつと一巻の内容に入るわけだな」

一 夏「また新たな悩みの種が増えるわけだな」

篇「お前が言つた」

## shift 4・1 「三人目の男子」（前書き）

皆さんお久しぶりです。学祭終わって一息付いたと思つたら、最終投稿日から一ヶ月くらい経つてビックリしたHAL-HALです。

唐突ですが、バトルスピリッツ（と書つかカードゲーム）にハマりました。

23日に発売されるヴァイスシュヴァルツポータブルとか買おうかなーとか思つてたりします。

とどのつまり何が言いたいのかと申しますとですね……「また更新速度（以下略）

「めんなさい。やっぱり執筆頑張ります（泣）

## Shift 4・1 「三人目の男子」

六月上旬。

あの悪夢のような引っ越しから半月ほどが経過した。

結局和花と山田先生の記憶は戻らず、単なる一人の衝突事故（発見当時のユウの行動に疑問が残るが）として寮生たちに認識された。真実を知っているのはユウただ一人なのだが、ユウは今も沈黙を保つている。

多くの女子がユウに真相を尋ねに行つたが、その都度、ユウは光の無い瞳めをしながら、

「その真相をお伝えする事はできません。僕が地獄まで持つて逝ります」

の一点張りであった。

ユウに話す気が無い以上、事件の真相が迷宮入りという形で収束を迎えるのは当然の帰結である。

今となつてはただの衝突事故に目を向ける人間などいない。

何故か。衝撃的な話題が飛び込んで来たからである。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

ホームルーム開始時に山田先生が放つた一言は、ここ最近の『ダブルママヤ衝突事件』を吹き飛ばすには十分だったようだ。クラス中が一気にざわつき始める。

だが、間を置かずしてそのざわめきは不意に中断される。

「当然と言えば当然だろ? なにせ教室に入ってきた転校生の片方は、  
”三人目”だったのだから……。」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

そう言つて転校生の一人、シャルルは純度100パーセント、嫌みの欠片も無い笑顔を振り撒きながら一礼した。

動作の一つ一つが洗練されており、それでいて仕草にウザさが全くない。女たらしで有名なフランスから来たとはとても思えないような紳士の動きである。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

礼儀正しい立ち居振る舞いに、男性とも女性とも取れるような中性的な顔立ち。髪は濃い金髪で、それを首の後ろで丁寧に束ねている。体つきは男性にしては細く、華奢と言つてもいいくらいスマートで、細い脚が相対的に長く見え、その格好良さを強調している。

第一印象は誇張でも何でもなく『貴公子』といった感じだ。

۱۰۷

- はい？

『也幸ああああああああ——』——!!

無論、男子に飢えた女子が鮮度の良い男子に食いつくのは自明の理と見えよ。

# 「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美系！ 守ってあけたくなる系の！」

地球は生まれて良かっただけだ。

川之園か……川之園か見ゆる、

最後のやつはもう分かり切つていいた事なのでスルーの方向で、女子一同がつんつんと深く頷いているのもスルーで。

このクラス本当に腐女子しか居ないんじゃね？ なんてツッコミはご容赦下さい。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬が何とも面倒臭そうな感じでぼやく。一般的な女子はまだいいとして、腐女子の相手など御免被ると言わんばかりに。

「み、皆さとお静かに。まだ自己紹介が終わつてませんから～！」

山田先生に言われ、はたと気づいた腐女子共。女に興味は無いがとりあえず聞いといてやるよといった感じで席についていき、ようやく教室にあるべき静けさが戻ってきた。

そしてもう片方の転校生に視線が集中する。

もう一人の転校生はシャルルと比べて小柄で、容姿だけなら綺麗と言つより可愛いの部類に入るであろう美少女だ。

コウと同じような銀の髪を腰近くまで長くおろしているが、整えられた感は無く、切るのが面倒で放つておいたらこんな感じになりましたと説明されるとしつくりくるかもしない。

しかし、トータルではかなりハイレベルな容姿を持っていると言えよ。

……ある一点を除けば、だが。

「黒……眼帯……」

誰かがそう呟いた。そう、左目に付けられた黒眼帯である。医療用の白くて四角いそれならまだ救いはある。だが、彼女が身に付けているのは、蛇と呼ばれた傭兵が付けていたような、あの黒眼帯である。

一同の視線がその黒眼帯に釘付けになつていて、中には目を輝かせている者が若干一名ほどいるが、そんなマニアックな人種、そうはいまい。

だが、ガチな黒眼帯を付けているからと言つて、彼女がそつち関係者とは限らない。

たとえ今開かれている真紅の右目から感情が一切読み取れないとし

ても、ただの軍事オタクだと言われば強引にでも納得できるかも  
しない。

「…………」

しかし、当の本人からは未だに何の挨拶も無い。

腕組みをして教室の女子達を下らなさそうに見下した態度に何かし  
らの悪意を感じる女子は少なくないだろう。しかし、彼女から放た  
れる威圧感が女子達に口を噤ませている。

しかしそれはほんの数瞬の出来事で、今、彼女の視線はある一点…  
…千冬にのみ向けられていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

まるで軍人がするように背筋を伸ばし、直立不動の姿勢をとつて素  
直に返事をする転校生 ラウラの行動に、一同は呆然とした。

返事をされた千冬の方はと言つて、シャルルの時とはまた違つた面  
倒臭そうな顔をしている。

「こりではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、こりではお前も  
一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう言つてラウラは再び直立不動の姿勢を取つていて  
そして女子達に顔を向けた。

「ラウラ・ボーデヴィイッヒだ」

『…………』

クラスを重苦しい沈黙が襲う。続きを言えと無言のプレッシャーが女子達によつてラウラに掛けられるが、ラウラにそれを気にする様子は全く無い。

ユウはその光景に目もくれず、小型端末に目を遣つてゐる。ディスプレイには、とある個人 ラウラ・ボーデヴィイッヒの情報が映し出されている。

ラウラ・ボーデヴィイッヒ少佐  
ドイツ軍IS配備特殊部隊「黒ウサギ隊」シュヴァルツ・ハーゼ隊長

詳しい経歴や個人の内面に關わる情報は得られないが、少なくとも今、教壇に立つてゐるラウラ・ボーデヴィイッヒなる女子は軍人で間違いないようだ。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が精一杯の笑顔でラウラに訊くが、ラウラから返されたのは無慈悲な即答だけだった。

一夏は心の中で泣きそうな山田先生を氣遣うが、その時、何の偶然かラウラと目が合つた。合つてしまつた。

「！ 貴様が

「

ラウラはつかつかと一夏の前まで歩いていき、一夏が認識する暇を  
与えずに右手を振り上げる。

「……！？」

そのまま右手を振ろうと力を込めた瞬間、自分の右腕がピタリと固定された感触をラウラは感じ、驚いて振り返った。  
振り返ったラウラの視線の先には、右手首を掴んでいるユウの姿。  
ユウの瞬間移動染みた動きに、一同は驚愕に目を見開いた。  
ラウラはユウを睨みつけた。

「……離せ」

「その提案には承服しかねます。一夏を殴りたければ、まずはその行為に見合う理由を言つて下さい。何も知らずに殴られる一夏が可哀そうですから」

ユウの言い分は尤もだ。ラウラは舌打ちして一夏に視線を移す。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。それが貴様を殴る理由だ。まあ言つてやつたぞ。殴らせろ」

ラウラは再び右腕に力を込める。しかし腕は動かない。  
ユウがまだ手を離さない。ラウラは再びユウに顔を向ける。

「貴様……」

「気に入らないから殴るとか、そんな小学生みたいな幼稚な理由で他人を殴りつけるのは止めて下さい。……教官を失望させる気です

か?」「

「ツー?」

ユウの口から教官といつ単語が出た瞬間、ラウラの顔が困惑に歪んだ。

ラウラの視線が千冬に移る。

千冬は何の感情も出さず、ただラウラを見ている。

不意にラウラの右腕から力が抜けた。ユウが掴んでいた手を離すと、ラウラの右腕がだらんと下ろされた。

「……ふん」

まるで興が削がれたと言わんばかりに、ラウラは一夏の前から立ち去り、空いている席に向かつて行つた。

*shift* 4・1 「三人目の男子」（後書き）

ユウ「遂に出ましたね……」

HAL「遂に出ましたよ……」

ユウ&アリ・HAL「「ヒ・ロ・イ・ンがツ――」」

ユウ「この時をどれほど心待ちにしたか……」

HAL「(I)Jからが本当のスタートだな」

一夏「お前、何の話してんだ?」

ユウ&アリ・HAL「「お前は黙つてろ!リア充」」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3751r/>

IS&lt;インフィニット・ストラatos&gt;月明の守護者

2011年11月20日09時04分発行